

「第一のヨナのしるしの拒否」

ヨハ 11 : 45~54

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① イエスはベタニヤで、ラザロを復活させた。
- ② これは、公生涯最後の大いなる奇跡であった。
- ③ ラザロの復活は、「ヨナのしるし」である。

* イエスのメシア性を証明する奇跡

* マタ 12 : 39~40

Mat 12:39 しかし、イエスは答えて言われた。「悪い、姦淫の時代はしるしを求めています。だが預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられません。

Mat 12:40 ヨナは三日三晩大魚の腹の中にいましたが、同様に、人の子も三日三晩、地の中にいるからです」

- ④ ヨナのしるしは、3つある。

* ラザロの復活

* イエス自身の復活

* 2人の証人の復活(黙 11章)

- ⑤ 第一のヨナのしるしは、信仰による応答を要求する。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 119 ラザロの復活がもたらした結果(ヨハ 11 : 45~54)

2. アウトライン

- (1) 信じたユダヤ人たち(45節)
- (2) パリサイ人に報告したユダヤ人たち(46節)
- (3) 祭司長とパリサイ人たち(47~48節)
- (4) 大祭司カヤパ(49~53節)
- (5) イエス(54節)

3. 結論

- (1) メシア的奇跡に対する指導者たちの応答
- (2) 当時の指導者たちの問題点
- (3) 誤った指導者たちがもたらす悲劇

指導者の責任について考えてみる。

I. 信じたユダヤ人たち (45 節)

1. 45 節

Joh 11:45 そこで、マリヤのところに来ていて、イエスがなされたことを見た多くのユダヤ人が、イエスを信じた。

- (1) イエスの自己啓示は、常に2つの反応を引き起こす。
 - ① 信仰と不信仰である。

- (2) ラザロの復活は、メシア的奇跡である。
 - ① 民衆は、パリサイ人からそのように教えられていた。
 - ② ラザロの復活を目撃した多くの者が、イエスはメシアであると理解した。
 - ③ 偏見なしにこの「しるし」(証拠)を検証すれば、当然信仰に導かれる。

- (3) 単純な民衆は、正しい回答を出すことができた。
 - ① その数は、多かった。

II. パリサイ人に報告したユダヤ人たち (46 節)

1. 46 節

Joh 11:46 しかし、そのうちの幾人かは、パリサイ人たちのところへ行って、イエスのなされたことを告げた。

- (1) 幾人かのユダヤ人たちはエルサレムに戻り、パリサイ人たちに報告した。
 - ① 彼らは、メシア的奇跡を目撃しながらも、イエスをメシアと認めなかった。

- (2) 信仰への最大の障がい、その人の道徳的状態である。
 - ① 内面にある邪悪な心、反抗心、不信仰な心
 - ② 人は、「信じたくない」から「信じない」のである。
 - ③ 心の入り口に「墓石」を置いた状態である。

- (3) 彼らは、パリサイ人たちの手先である。
 - ① 最大の危機的状況が訪れた。
 - ② 早く手を打つ必要がある。

Ⅲ. 祭司長とパリサイ人たち(47～48節)

1. 47節

Joh 11:47 そこで、祭司長とパリサイ人たちは議会を召集して言った。「われわれは何をしているのか。あの人が多くの上りしを行っているというのに。」

- (1) 祭司長とパリサイ人たちは、議会を召集した。
 - ①サンヘドリンのことである。
 - ②議長、副議長、69人の議員、合計71人。
 - ③急ぎよ召集したようなので、人数は不足していたと思われる。

- (2) 「われわれは何をしているのか」
 - ①なぜこの男の活動を阻止できないのか。
 - ②なぜ行動に移すのが遅いのか。
 - ③この箇所から、祭司長たち(サドカイ派)がイエス殺害の主導権を握る。
 - ④パリサイ派は、それを支持する。

(3) 「あの人が多くの上りしを行っているというのに」

- ①彼らは、イエスが「しるし」を行っていることを認めている。
- ②その中には、ラザロの復活も含まれる。
- ③彼らは、なぜ「しるし」を否定しなかったのか。
 - *公に行われている。
 - *数が多い。
 - *目撃情報が多い。

2. 48節

Joh 11:48 もしあの人をこのまま放っておくなら、すべての人があの人を信じるようになる。そうすると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も奪い取ることになる。」

(1) 彼らが恐れた理由

- ①このまま放置すれば、イエスをメシアと信じる人が多く出る。
- ②彼らは、イエスを王として擁立するだろう。
- ③そうすると、ローマが介入してくるだろう。

「このままにしておけば、皆が彼を信じるようになる。そして、ローマ人が来て、我々の神殿も国民も滅ぼしてしまうだろう」(新共同訳)
- ④「トポス」→「土地」か「神殿」か。「神殿」が正解である。
- ⑤祭司長たちの優先順位は、職場、そして、国民である。

IV. 大祭司カヤパ (49～53 節)

1. 49～50 節

Joh 11:49 しかし、彼らのうちのひとりで、その年の大祭司であったカヤパが、彼らに言った。「あなたがたは全然何もわかっていない。」

Joh 11:50 ひとりの人が民の代わりに死んで、国民全体が減びないほうが、あなたがたにとって得策だということも、考えに入れていない。」

- (1) 大祭司は、生涯その職責に就く。
 - ①ローマは、ひとりの人が巨大な権力を握ることを恐れた。
 - ②そのため、自分に都合のよい時に、都合のよい人物を大祭司に任命した。
 - ③「その年の大祭司であったカヤパ」は、ローマの支配を表現した言葉である。
 - ④カヤパは、紀元 18～36 年に大祭司であった (18 年間)。
 - ⑤もちろん、親ローマである。
 - ⑥イエスの裁判の席にいた。
 - ⑦ペテロとヨハネが議会で連れて来られた時も、そこにいた (使 4:6)。

- (2) 「あなたがたは全然何もわかっていない」
 - ①その通りである。イエスに関する解決策はまだ出されてない。
 - ②これは、軽蔑の言葉でもある。
 - ③これは、ヨハネによるアイロニー (皮肉) である。

- (3) 彼は、解決策を提案した。
 - ①イエスを放置すれば、ローマ軍によって国全体が減ぼされることになる。
 - ②ひとりの人 (イエス) が死ねば、国全体は減びないので、得策である。
 - ③イエスが人として来られた目的は、まさにこれである。
 - ④しかし、彼はそのことを理解しないままで、この言葉を口にしてている。

2. 51～52 節

Joh 11:51 ところで、このことは彼が自分から言ったのではなくて、その年の大祭司であったので、イエスが国民のために死のうとしておられること、

Joh 11:52 また、ただ国民のためだけでなく、散らされている神の子たちを一つに集めるためにも死のうとしておられることを、預言したのである。

- (1) これは、ヨハネによるアイロニー (皮肉) である。
 - ①カヤパの言葉を預言として解釈する方法もある。
 - ②彼は、イエスの贖罪の死を預言したのである。

③大祭司という職責のゆえに、神は彼に預言を与えた。

(2)「散らされている神の子たち」

①異邦人信者のことである。

②イエスに死は、新しい時代をもたらす。教会時代。

3. 53 節

Joh 11:53 **そこで彼らは、その日から、イエスを殺すための計画を立てた。**

(1) 第一のヨナのしるしは、神の意図とは異なる結果をもたらした。

①サドカイ人とパリサイ人たちは、第一のヨナのしるしに応答しなかった。

②それどころか、彼らはイエスに対してより敵対的になった。

③イエスを殺す計画が現実化した。

V. イエス (54 節)

Joh 11:54 **そのために、イエスはもはやユダヤ人たちの間を公然と歩くことをしないで、そこから荒野に近い地方に去り、エフライムという町に入り、弟子たちとともにそこに滞在された。**

(1) イエスの時はまだ来ていない。

①イエスはユダヤを去り、エフライムという町に入られた。

②ベタニヤの北約 25 キロの町であろう。

③ユダの荒野に近い地方。危険が迫れば逃げることができる。

(2) 次にイエスがユダヤに入るのは、十字架にかかる時である。

結論：

1. メシア的奇跡に対する指導者たちの応答

(1) ユダヤ人のツァラアト患者の癒し (ルカ 5 章)

①メシアに対する尋問が強化された。

(2) 口をきけなくする悪霊の追い出し (マタ 12 章)

①イエスは悪霊の頭によって悪霊を追い出していると主張した。

(3) 生まれつきの盲人の癒し (ヨハ 9 章)

①イエスを信じる者を会堂から追放するという決定を下した。

(4) ラザロの復活。第 1 のヨナのしるし

①サンヘドリンは、イエス殺害を決定した。

2. 当時の指導者たちの問題点

- (1) イエスをメシアとして信じるよりも、自らの地位を守るの方が大切。
- (2) 彼らにとっての神とは、彼ら自身である。
- (3) 今も、同じ問題点が存在する。
 - ①神の御心よりも、自分の計画を優先する。
 - ②神の羊よりも、自分を守ろうとする。

3. 誤った指導者たちがもたらす悲劇

(1) カヤパの言葉

「ひとりの人が民の代わりに死んで、国民全体が減びないほうが、あなたがたにとって得策だ」(50節)

- (2) 紀元70年に、エルサレムは崩壊し、ユダヤ人たちは世界に離散していった。
- (3) これが起こったのは、イエスを受け入れたからではなく、拒否したからである。

追記：①ヨハネの福音書は、90年代に書かれた。

②彼の視点は、復活、ペンテコステ、40年間の恵みの時代、エルサレム崩壊の後のものである。

③リーダーの責任とフォロワーの責任

「エルサレムに向かう最後の旅」

ルカ 17 : 11~37

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① イエスはベタニヤで、ラザロを復活させた。
- ② ラザロの復活は、「ヨナのしるし」である。
 - * イエスのメシア性を証明する奇跡
- ③ サンヘドリンは、イエスを殺すことを決定した。
- ④ イエスはユダヤを去り、エフライムという町に入られた。
 - * ベタニヤの北約25キロの町であろう。
- ⑤ 次にイエスがユダヤに入るのは、十字架にかかる時である。
- ⑥ イエスは、サマリヤとガリラヤの間を通り、エルサレムに上られた。
- ⑦ きょうの箇所の内容は、すべて旅の途中でイエスが教えたことである。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 120 イエスは、サマリヤとガリラヤの間を通り、エルサレムへの最後の旅を開始する。(ルカ 17 : 11~37)

2. アウトライン

- (1) 10人のツァラアト患者の癒し (11~19節)
- (2) 神の国に関する教え (20~21節)
- (3) 再臨に関する教え (22~37)

3. 結論

- (1) ツァラアト患者の癒しに隠された神の意図とは何か。
- (2) イエスが語る神の国とは何か。
- (3) ここで再臨のテーマが出て来るのはなぜか。

終末時代の生き方について考えてみる。

I. 10人のツァラアト患者の癒し (11~19節)

- 1. 10人のツァラアト患者の懇願 (11~13節)

Luk 17:11 そのころイエスはエルサレムに上られる途中、サマリヤとガリラヤの境を通られた。

Luk 17:12 ある村に入ると、十人のツァラアトに冒された人がイエスに出会った。彼らは遠く離れた所に立って、

Luk 17:13 声を張り上げて、「イエスさま、先生。どうぞあわれんでください」と言った。

(1) エルサレムに向かう通常のルート

- ①ヨルダン川の東岸に出る予定なのであろう。
- ②イエスと弟子たちが最後の過越の祭りを祝うためにエルサレムに上る旅である。

(2) ある村に入ると、10人のツァラアト患者がイエスに出会った。

- ①後で分かるが、9人はユダヤ人、1人はサマリヤ人である。
- ②両者には、人種的壁があった。
- ③ツァラアトに冒されると、社会から隔離され、孤独な生活に追い込まれる。
- ④ユダヤ人とサマリヤ人がともに住むということ自体が、ツァラアト患者が置かれた悲惨な状況を示している。

(3) 彼らは遠く離れた所に立って、声を張り上げている。

①レビ 13：45～46

「患部のあるそのツァラアトの者は、自分の衣服を引き裂き、その髪の毛を乱し、その口ひげをおおって、『汚れている、汚れている』と叫ばなければならない。その患部が彼にある間中、彼は汚れている。彼は汚れているので、ひとりで住み、その住まいは宿営の外でなければならない」

②彼らは、イエスに助けを求めた。

2. イエスの回答 (14 節)

Luk 17:14 イエスはこれを見て言われた。「行きなさい。そして自分を祭司に見せなさい。」
彼らは行く途中できよめられた。

(1) イエスは彼らに、自分を祭司に見せなさいと命じた。

- ①そのことばを信じて行動を開始するなら癒される、という約束である。
- ②事実、彼らは全員が癒された。

(2) 癒されたツァラアト患者たちは、大祭司カヤパに自分自身を見せる。

- ①大祭司カヤパは証明書を発行する。
- ②元患者たちは、ユダヤ人共同体に復帰することができる。
- ③レビ 13、14 章の規定

3. そのうちのひとりの応答 (15～16 節)

Luk 17:15 そのうちのひとは、自分のいやされたことがわかると、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、

Luk 17:16 イエスの足もとにひれ伏して感謝した。彼はサマリヤ人であった。

(1) そのうちのひとりが、イエスの元に戻って来た。

- ①大声で神をほめたたえた。
- ②イエスの足もとにひれ伏して感謝した。

*これは、礼拝の姿勢である。

- ③彼は、サマリヤ人であった。

4. イエスの驚き (17～19 節)

Luk 17:17 そこでイエスは言われた。「十人きよめられたのではないか。九人はどこにいるのか。」

Luk 17:18 神をあがめるために戻って来た者は、この外国人のほかには、だれもいないのか。」

Luk 17:19 それからその人に言われた。「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰が、あなたを直したのです。」

(1) イエスは、嘆かれた。

- ①癒された9人のユダヤ人たちは、戻って来なかった。
- ②ひとりの外国人(他国人、サマリヤ人)だけが戻って来た。

(2) イエスは、その人の信仰を祝福された。

- ①彼は、肉体的な癒だけでなく、霊的救いを得た。

II. 神の国に関する教え (20～21 節)

1. パリサイ人たちの質問 (20 節 a)

Luk 17:20 さて、神の国はいつ来るのか、とパリサイ人たちに尋ねられたとき、

(1) これは、信者でない者たちからの質問である。

- ①パリサイ人たちは、神の国の到来に関して非常に興味を持っていた。
- ②彼らは、世が混乱した時、神が大いなる奇跡をもって介入されると信じていた。
- ③イエスは「神の国」について語っていたので、これは予想される質問である。

2. イエスの回答 (20b～21 節)

イエスは答えて言われた。「神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。」

Luk 17:21 『そら、ここにある』とか、『あそこにある』とか言えるようなものではありません。

ん。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」

(1) イエスは、パリサイ人たちの神の国に関する神学的理解を否定された。

①人の目で認められるようなものではない。

(2) 「神の国は、あなたがたのただ中にあるのです」

①神の国が心の中にあるという意味ではない。パリサイ人たちは信者ではない。

②彼らのただ中に立っているイエス自身が、神の国の代表であり象徴である。

Ⅲ. 再臨に関する教え (22～37)

1. 再臨のテーマは、§ 139 の「オリーブ山の説教」で詳細に取り上げる (マタ 24:1～51)。

2. ここでの教えの要約

(1) 弟子たちには、辛い日々が待っている (22 節)。

Luk 17:22 イエスは弟子たちに言われた。「人の子の日を一日でも見たいと願っても、見られない時が来ます。

(2) メシアの再臨は、すべての人が認識できる形で実現する (23～24 節)。

Luk 17:23 人々が『こちらだ』とか、『あちらだ』とか言っても行ってはなりません。あとを追いかけてはなりません。

Luk 17:24 いなずまが、ひらめいて、天の端から天の端へと輝くように、人の子は、人の子の日には、ちょうどそのようであるからです。

(3) イエスは、この時代の人たちに苦しめられ、殺される (25 節)。

Luk 17:25 しかし、人の子はまず、多くの苦しみを受け、この時代に捨てられなければなりません。

(4) 大患難時代の直前まで、人々は普段通りに生活をする (26～30 節)。

Luk 17:26 人の子の日に起こることは、ちょうど、ノアの日に起こったことと同様です。

Luk 17:27 ノアが箱舟に入るその日まで、人々は、食べたり、飲んだり、めとったり、とついでにしていたが、洪水が来て、すべての人を滅ぼしてしまいました。

Luk 17:28 また、ロトの時代にあったことと同様です。人々は食べたり、飲んだり、売ったり、買ったり、植えたり、建てたりしていたが、

Luk 17:29 ロトがソドムから出て行くと、その日に、火と硫黄が天から降って、すべての人を滅ぼしてしまいました。

Luk 17:30 人の子の現れる日にも、全くそのとおりです。

(5) イスラエルの地に住む者は、大患難時代が起こると、すぐに行動を起こすべきである。後ろを振り返ってはならない(31~35節)。

Luk 17:31 その日には、屋上にいる者は家に家財があっても、取り出しに降りてはいけません。同じように、畑にいる者も家に帰ってはいけません。

Luk 17:32 ロトの妻を思い出さない。

Luk 17:33 自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。

Luk 17:34 あなたがたに言うが、その夜、同じ寝台でふたりの人が寝ていると、ひとりを取られ、他のひとは残されます。

Luk 17:35 女がふたりいっしょに臼をひいていると、ひとりを取られ、他のひとは残されます。」

(6) イスラエルの民は、異邦人の軍勢に取り囲まれる(37節)。

Luk 17:37 弟子たちは答えて言った。「主よ。どこですか。」主は言われた。「死体のある所、そこに、はげたかも集まります。」

- ①「死体」とは、イスラエルの民である。
- ②「はげたか」とは、異邦人の軍勢である。
- ③その場所は、ボツラ(現在のヨルダンにあるペトラ)である。

*ミカ2:12~13、エレ49:13~14、イザ34:1~8、63:1~6

結論

1. ツァラアト患者の癒しに隠された神の意図とは何か。

(1) イエスは、ひとりのツァラアト患者を癒されたことがある(ルカ5:12~16)。

①この時から、サンヘドリンによる尋問が厳しくなった。

(2) ここでは、イエスは10人のツァラアト患者を癒された。

①タイミングは、サンヘドリンがイエスの殺害を決定した直後である。

②9人のユダヤ人は癒されただけで、イエスに対する感謝を示さなかった。

(3) 大祭司カヤパは、イエスによって癒されたという証言を10倍聞かされる。

①彼は、患部を7日間観察し、癒しを宣言し、証明書を出す。

②これを10倍するのである。

(4) イエスのメシア性の証明は、ひとりのツァラアト患者の癒しで始まり、10人のツァラアト患者の癒しで終わる。

①エンディングをさらにドラマチックにしているのは、戻って来たのがサマリヤ

人ひとりだという事実である。

(5) 私たちへの適用は、「感謝」の重要性である。

2. イエスが語る神の国とは何か。

(1) イエスは、メシア的王国を提供された。

(2) ユダヤ人たちがイエスを拒否して以降、奥義としての王国の時代に移行した。

(3) これは、目に見えない、霊的な王国である。

(4) 「キリスト教界」のことである。

① 麦と毒麦が同時に育つ時代である。

3. ここで再臨のテーマが出て来るのはなぜか。

(1) イエスの初臨の期間が終わろうとしている。

(2) 次に、教会時代(恵みの時代)が始まろうとしている。

① これは、奥義としての王国の時代でもある。

(3) その先に、メシアの再臨とメシア的王国の成就が待っている。

(4) 21世紀という時代に生きながら、初臨を振り返り、再臨を展望する。

「祈りに関する教え」

ルカ 18 : 1~14

1. はじめに

(1) 文脈の確認

① イエスは、サマリヤとガリラヤの間を通り、エルサレムに上られた。

② その途中、イエスは3つの教えを語った。

* 10人のツァラアト患者の癒し

* 神の国に関する教え

* 再臨に関する教え

③ **ルカ 17 : 22**

「イエスは弟子たちに言われた。『人の子の目を一日でも見たいと願っても、見られない時が来ます』」

④ きょうの箇所は、再臨のテーマの延長線上で解釈する必要がある。

(2) 冒頭のコメント

① イエスのユーモアについて

② この箇所は、極めて現代的な意味を持っている。

(3) A. T. ロバートソンの調和表

§ 121 祈りに関する2つのたとえ話 (ルカ 18 : 1~14)

2. アウトライン

(1) やもめと裁判官のたとえ話 (1~8節)

① 序文 (1節)

② 内容 (2~5節)

③ 適用 (6~8節)

(2) パリサイ人と取税人のたとえ話 (9~14節)

① 序文 (9節)

② 内容 (10~13節)

③ 適用 (14節)

3. 結論

(1) 祈りを聞いてくださる神

(2) 恵みを与えてくださる神

私たちが抱いている神概念を再吟味する。

I. やもめと裁判官のたとえ話 (1~8 節)

1. 序文 (1 節)

Luk 18:1 いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。

(1) イエスは、弟子たちにこのたとえ話を語っている。

①章の区分に惑わされてはならない。

(2) たとえ話の目的が最初に提示されている。

①いつでも祈るべきである。

②失望してはならない。

③初臨と再臨の間の、「長くて困難な時期」が視野にある。

2. 内容 (2~5 節)

(1) 裁判官の登場 (2 節)

Luk 18:2 「ある町に、神を恐れず、人を人とも思わない裁判官がいた。

①旧約の律法では、裁判官(さばき司、長老、長)は神を恐れなければならない。

②彼の役割は、律法を破る者、弱者を搾取する者を裁くことである。

③彼は、弱者の権利を擁護する神の代理人である。

④この話に登場する裁判官は、それとは正反対の人物である。

*神を恐れず、人と人とも思わない。

*すべての行動の動機は、自分の利益である。

⑤聴衆は、「そういうのが、いるいる」と、ニヤッと笑ったはずである。

*今も、社会の頂点に着きながら、自分の利益しか考えない指導者はいる。

(2) やもめの登場 (3 節)

Luk 18:3 その町に、ひとりのやもめがいたが、彼のところにやって来ては、『私の相手をさばいて、私を守ってください』と言っていた。

①やもめは、裁判官とは対照的な人物である。

②旧約の律法では、やもめは抑圧された階層の代表である。

*収入の道は閉ざされていた。

*彼女は、裁判官に賄賂を支払うこともできない。

③「彼のところにやって来ては、」(エルコマイ)は、未完了形。

*繰り返しやって来た。しつこい女である。

*カナン人の女の例(マタ15:22)

④「私の相手をさばいて、私を守ってください」

*「エクディケオウ」とは、正義を行う、ある人の権利を守るなどの意。

*恐らく、不当な理由で土地か家を奪われそうになっていたのだろう。

⑤裁判官に正当な裁きを求めたが、聴衆は「むり、むり」と思ったはず。

(3) 予想外の展開(4~5節)

Luk 18:4 彼は、しばらくは取り合っていないが、後には心ひそかに『私は神を恐れず人を人とも思わないが、

Luk 18:5 どうも、このやもめは、うるさくてしかたがないから、この女のために裁判をしてやることにしよう。でないと、ひっきりなしにやって来てうるさくてしかたがない』と言った。」

①裁判官は、こういうケースは放置するのが常であった。

*自分の益にならないから。

*やもめが不当な仕打ちを受けているという事実は、彼を動かさなかった。

②彼の独白

*「私は神を恐れず人を人とも思わない」

*「この女のために裁判をしてやることにしよう」

*「うるさくてしかたがない」

・「ヒュポヒアゾウ」(目の下を打つ)(目に隈を作る)

・この女が頻繁に出入りするの、評判上もよろしくない。

3. 適用(6~8節)

(1) カル・バホメル(大から小へ)の議論(6~7節)

Luk 18:6 主は言われた。「不正な裁判官の言っていることを聞きなさい。

Luk 18:7 まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけなくて、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。

①イエスは、価値ある真理を教えるために悪人の例を用いることがあった。

*不正な管理人のたとえ話(ルカ16:1~13)

②不正な裁判官でも、やもめの執拗な願いに答える。

③ましてや、天の父はなおさら、信じる者たちの祈りを聞いてくださる。

④「選民」を厳密に解釈すると、大患難時代の少数のユダヤ人信者である。

*神の助けがあるというのは、どの時代の信者にも適用される真理である。

(2) 再臨を前提とした適用(8節)

Luk 18:8 あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくだ

さいます。しかし、人の子が来たとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」

- ①メシアの再臨の時、神の敵は裁かれる。
- ②修辭的質問「はたして地上に信仰がみられるでしょうか」
 - *やもめが発揮したような信仰を持ちなさいという警告である。
 - *試練の中でも、「御国を来たらせたまえ」と祈り続けることが信仰である。
- ③すでに神の国は成就しているという教えは、非聖書的である。

II. パリサイ人と取税人のたとえ話 (9~14節)

1. 序文 (9節)

Luk 18:9 自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。

- (1) イエスは、自分を義人だと自認している人たちに語った。
 - ①パリサイ人たちである。彼らは、他の人々を見下していた。
 - ②このたとえ話の目的は、彼らを辱めるためではなく、助けるためである。

2. 内容 (10~13節)

(1) パリサイ人と取税人の対比 (10節)

Luk 18:10 「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとり取税人であった。

- ①パリサイ人は、当時のユダヤ人共同体の中で、最も敬虔な人である。
- ②取税人は、売国奴として最も軽蔑されている人である。
- ③宗教的階層で言えば、最高と最低が祈るために宮に上ったのである。

(2) パリサイ人の祈り (11~12節)

Luk 18:11 パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。

Luk 18:12 私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』

- ①パリサイ人は、ささげ物を持って神殿に行った。
 - *彼が祈っている間、祭司は聖所の中で香を焚いていく。
 - *彼の祈りは、祈りではなく自慢である。「私」という一人称の代名詞。
- ②道徳的な自慢
 - *ゆする者、不正な者、姦淫する者ではない。

*この取税人のようではない。

③宗教的な自慢

*週に2度の断食。(月)と(木)に水も飲まない断食をしていた。

*十分の一を捧げている。厳密に行えば、収入の20%以上になる。

④すべて完璧である。

*自分の徳や善行を自分の手柄にせず、神に感謝するのは敬虔な行為である。

(3) 取税人の祈り (13節)

Luk 18:13 **ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』**

①「遠く離れて立ち」とは、至聖所と彼の心の距離を表現する言葉である。

②両手と目を天に向かって上げるのは、普通の祈りの姿勢である。

*彼は、目を天に向けようとしなかった。

③自分の胸をたたくのは、悲しみの表現である。

④「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」

*神に祈っている。

*ささげ物を持ってきていない。

*彼は、神の恵みによってのみ自分は救われると思っている。

⑤当時の認識では、パリサイ人の祈りは合格で、取税人の祈りは失格である。

3. 適用 (14節)

Luk 18:14 **あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」**

(1) イエスは、当時の認識を逆転させた。

①高慢な者は低くされ、低くする者は高くされるという原則がある。

(2) パリサイ人の祈り

①他の人たちとの比較に基づく祈りである。

②自分の罪は見えないが、他人の罪はよく見えるという祈りである。

③神に届かない、独白の言葉である。

(3) 取税人の祈り

①神の基準に基づく祈りである。

②自分の罪に焦点を合わせた祈りである。

- ③自分に誇れる点は何もないという認識から出た祈りである。
- ④神に届く言葉である。

結論

1. 祈りを聞いてくださる神

(1) やもめと裁判官のたとえ話の視点

- ①「ましてや神は…」と考えるのは、正しい。
- ②「だから祈り続けるべきだ」と考えるのも、正しい。
- ③しかし、最も正しい視点は、「天の父はよい方である」というものである。
- ④天の父は、私たちの祈りを聞きたいと願っておられる。

(2) 祈りとは、唇の運動のことではない。

- ①それは、心の在り方のことである。
- ②父なる神への全面的な信頼がもたらす、心の在り方である。

(3) 1テサ5:17

「絶えず祈りなさい」

- ①24時間祈れということではない。

(4) ロマ8:26

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます」

- ①言葉にならなくても、祈りは父なる神に届いている。

(5) 心の在り方であるなら、祈りには行動が伴うのである。

2. 恵みを与えてくださる神

(1) 取税人は霊的飢え渴きを覚えていた。

- ①彼は、富のために名誉や地位を捨てた。
- ②富を得たが、心に満足はなかった。

*マタイがそうであった。

*ザアカイがそうであった。

- ③彼は、自分には至聖所にある「贖いの蓋」(恵みの座)が用意されていないことを知っていた。

(2) 「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください」

- ①「あわれんでください」(ヒラスコマイ)は、怒りを収めてくださいという意。
- ②へブ2:17

「そういうわけで、神のことについて、あわれみ深い、忠実な大祭司となるため、主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それは民の罪のために、なだめがなされるためなのです」

③1 ヨハ2:2

「この方こそ、私たちの罪のための——私たちの罪だけでなく、世全体のための——なだめの供え物です」

④贖いの蓋(恵みの座)は、「ヒラステリオン」である(ヘブ9:5)。

⑤取税人は、自分が近づける「恵みの座」を求めたのである。

(3) 今の私たちは、この祈りをする必要はない。

①キリストの贖いの死によって、すでに「恵みの座」が用意された。

②正しい応答は、「信じます」である。

③そして、御国の到来を待ち望む「心の姿勢」で、日々神に仕えることである。

(4) これは、当時の聴衆には、革命的なたとえ話である。

①現代のクリスチャンは驚かない。

②知り過ぎているがゆえに、無感動が支配している。

(例話) 聖地旅行のリピーターが陥りやすい罠

「離婚に関する教え」

マコ 10 : 1~12、マタ 19 : 1~12

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① イエスは、サマリヤとガリラヤの間を通り、エルサレムに上られた。
- ② その途中、イエスは3つの教えを語った。
 - * 10人のツァラアト患者の癒し
 - * 神の国に関する教え
 - * 再臨に関する教え
- ③ イエスは、祈りに関して2つのたとえ話を語った。
 - * やもめと裁判官のたとえ話
 - * パリサイ人と取税人のたとえ話
- ④ きょうの箇所は、離婚に関する教えである。
 - * パリサイ人たちの質問がきっかけとなった。
 - * 離婚の問題は、当時のユダヤ人社会では論争的になっていた。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 122 ガリラヤを発ち、ペレアを通過する際に、イエスは離婚について教えた。

マコ 10 : 1~12、マタ 19 : 1~12

2. アウトライン

- (1) パリサイ人たちの質問 (1~3 節)
- (2) イエスの答え① (4~6 節)
- (3) パリサイ人たちの反論 (7 節)
- (4) イエスの答え② (8~9 節)
- (5) 弟子たちの感想 (10 節)
- (6) イエスの答え③ (11~12 節)

3. 結論

- (1) 旧約聖書における正当な離婚理由
- (2) 新約聖書における正当な離婚理由
- (3) 以上の原則の現代的適用

離婚に関する教えについて学ぶ。

I. パリサイ人たちの質問 (1~3 節)

1. 1~2 節

Mat 19:1 イエスはこの話を終えると、ガリラヤを去って、ヨルダンの向こうにあるユダヤ地方に行かれた。

Mat 19:2 すると、大ぜいの群衆がついて来たので、そこで彼らをいやされた。

(1) イエスは、エルサレムに向かっている。

①「ヨルダンの向こうにあるユダヤ地方」とは、ペレアのことである。

②ここは、ヘロデ・アンティパスの領地である。

(2) ペレア伝道は、比較的的成功していた。

①大ぜいの群衆がついて来た。

②数多くの癒しが行われた。

2. 3 節

Mat 19:3 パリサイ人たちがみもとにやって来て、イエスを試みて、こう言った。「何か理由があれば、妻を離別することは律法にかなっているでしょうか。」

(1) 質問の背景

「人が妻をめとり夫となり、妻に何か恥ずべき事を発見したため、気に入らなくなり、離婚状を書いてその女の手渡し、彼女を家から去らせ、彼女が家を出、行って、ほかの人の妻となり、次の夫が彼女をきらい、離婚状を書いてその女の手渡し、彼女を家から去らせた場合、あるいはまた、彼女を妻としてめとったあとの夫が死んだ場合、彼女を出した最初の夫は、その女を再び自分の妻としてめとることはできない。彼女は汚されているからである。これは、【主】の前に忌みきらうべきことである。あなたの神、【主】が相続地としてあなたに与えようとしておられる地に、罪をもたらしはならない」(申 24:1~4)

①「何か恥ずべき事」→「some uncleanness」(KJV)「some indecency」(RSV)

②「エルヴァット・ダヴァール」(a matter of uncleanness)

(2) この解釈に関して、B.C. 1 世紀から 2 つの学派間で論争があった。

①シャマイ学派：狭い解釈

* 不道德の罪以外の理由で、妻を離別することはできない。

②ヒレル学派：広い解釈

* どんな些細な理由でも、妻を離別することができる。

* 焦げたスープやパンを作っただけでも、妻を離別できる。

* ラビ・アキバ (2 世紀) は、より美しい人との出会いも理由に付け加えた。

(3) パリサイ人たちの質問は、ヒレル学派の見解についての質問である。

- ①「何か理由があれば」→「どんな些細なことでも、何か理由があれば」
- ②どう答えたとしても、イエスは批判にさらされる。

(4) イエスはペレアを通過していた。

- ①ヘロデ・アンティパスの領地である。
- ②バプテスマのヨハネは、このヘロデの離婚と結婚を非難したために斬首された。
- ③パリサイ人たちは、イエスも同じ目に会うことを願った。

II. イエスの答え① (4~6節)

1. 4~6節

Mat 19:4 イエスは答えて言われた。「創造者は、初めから人を男と女に造って、

Mat 19:5 『それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる』と言われたのです。それを、あなたがたは読んだことがないのですか。

Mat 19:6 それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。」

(1) イエスは、創世記の人類創造の記事に言及し、神の元々の意図を示された。

- ①神は、ひとりの男子とひとりの女子が結婚して一体となることを計画された。
- ②結婚した男女は「ひとり」である。
- ③それゆえ、人は夫婦となった男女を引き離してはならない。
- ④結婚関係の召しは、親子関係の召しよりも上位にある。

(2) 神は離婚を憎まれる。

「わたしは離婚を憎むとイスラエルの神、主は言われる。離婚する人は、不法でその上着を覆っていると万軍の主は言われる。あなたたちは自分の霊に気をつけるがよい。あなたたちは裏切ってはならない」(マラ2:16)

- ①罪は、神の最初の計画の中にはない。
- ②離婚も、神の最初の計画の中にはない。
- ③離婚は、罪の結果である。

III. パリサイ人たちの反論 (7節)

Mat 19:7 彼らはイエスに言った。「では、モーセはなぜ、離婚状を渡して妻を離別せよ、と命じたのですか。」

(1) 彼らは、イエスが申24:1~4とは異なる内容を教えていると理解した。

- ①イエスは、結婚関係の永続性を教えた。

- ②しかし、モーセは離婚状を渡して離別するように教えている。
- ③これは、矛盾ではないか。

IV. イエスの答え② (8～9節)

1. 8節

Mat 19:8 イエスは彼らに言われた。「モーセは、あなたがたの心がたくななので、その妻を離別することをあなたがたに許したのです。しかし、初めからそうだったわけではありません。」

- (1) モーセが離婚状を書いて妻を離別することを許可した理由
 - ①「あなたがたの心がたくななので」
 - ②これは、妻に最悪の事態が起こることを避けるための妥協案である。
 - ③離別の道がなければ、夫は妻を虐待し、最悪の場合は死に至らせる可能性あり。
 - ④決してモーセが離別を命じているわけではない。
 - ⑤当時の花嫁料は、離婚を想定してのことである。
- (2) 「初めからそうだったわけではありません」
 - ①神の最初の意図は、罪が入り込んだために、歪められた。

2. 9節

Mat 19:9 まことに、あなたがたに告げます。だれでも、不貞のためでなくて、その妻を離別し、別の女を妻にする者は姦淫を犯すのです。」

- (1) イエスは、離婚が許可される理由として、性的不道徳を上げる。
 - ①「不貞」とは、「ポルネイア」である。
 - ②訳文の比較
 - 「不貞のためでなくて」(新改訳)
 - 「不法な結婚でもないのに」(新共同訳)
 - 「不品行のゆえでなくて」((口語訳)
 - ③性的不道徳以外の理由で妻を離別し、別の女を妻にするなら、姦淫に当たる。
 - *その離婚は無効で、結婚関係が継続していると考えられるからである。
 - ④この教えは、結婚した婦人の立場を守るためのものでもある。
- (2) では、「ポルネイア」とは何か。
 - ①姦淫(モイケイア)と同じ意味。結婚関係にある者が性的罪を犯すこと。
 - ②ユダヤ式結婚で、婚約期間中に犯す性的罪のこと。
 - ③誤って一度だけ犯す性的罪ではなく、継続される性的罪のこと。
 - ④イエスの意図は、恐らく、結婚外の性的行為全般を指すものと思われる。

- (3) この理由で離婚した人に、再婚は許されるか。
- ①罪のない側には、再婚が許されるという立場がある。
 - ②罪を犯した側も、罪のない側も、再婚は許されないという立場もある。
 - ③聖書本文からは、どちらとも判断できない。
 - ④しかし、再婚の可能性がないなら、そもそも離婚する必要はないと思う。

V. 弟子たちの感想 (10 節)

Mat 19:10 弟子たちはイエスに言った。「もし妻に対する夫の立場がそんなものなら、結婚しないほうがましです。」

1. ユダヤ人の男性は、離婚を当然の権利と考えていた。
 - (1) 当時の男性たちにとっては、例外規定のない結婚は危険なかけである。
 - ①両親が決めた相手を結婚する場合がほとんどである。
 - ②もし、相手の女性が気に入らなかったどうするか。
 - ③不貞以外の理由での離別が罪であるなら、結婚は牢獄のようになってしまう。
 - (2) それなら、結婚しないほうがましだ。
 - ①弟子たちも、紀元1世紀のユダヤ人社会の常識に縛られていた。

VI. イエスの答え③ (11~12 節)

Mat 19:11 しかし、イエスは言われた。「そのことばは、だれでも受け入れることができるわけではありません。ただ、それが許されている者だけができるのです。」

Mat 19:12 というのは、母の胎内から、そのように生まれついた独身者がいます。また、人から独身者にさせられた者もいます。また、天の御国のために、自分から独身者になった者もいるからです。それができる者はそれを受け入れなさい。」

1. 独身生活は、誰もがができることではない。
 - (1) 性的機能不全で誕生した者
 - (2) 強制的に宦官にされた者
 - ①ユダヤ人にとっては、実に嫌悪すべきことである。
 - (3) 自分から独身者になった者
 - ①これは、独身の賜物である (1 コリ 7:7~8)
 - ②神の国のために独身生活を選ぶことは、奨励されるべきことである。
2. 結婚は素晴らしい祝福である。

結論

1. 旧約聖書における正当な離婚理由

(1) 性的不一致(申24:1)

- ①「何か恥ずべき事」とは、姦淫の罪ではない。
- ②その場合は、石打ちの刑に処せられる。
- ③この理由は、マタ19:9で取り消された。

(2) 宗教的不一致

- ①エズラとネヘミヤは、離婚を許可したばかりか、命令までした。
- ②これは、1コリ7:12~13で取り消された。

2. 新約聖書における正当な離婚理由

(1) 相手方の性的不道徳

- ①それでも結婚関係を維持し、信頼関係の回復を求めるのはよいことである。

(2) 結婚後、一方が信者となり、相手が離婚を望んだ場合

「しかし、もし信者でないほうの者が離れて行くのであれば、離れて行かせなさい。そのような場合には、信者である夫あるいは妻は、縛られることはありません。神は、平和を得させようとしてあなたがたを召されたのです。なぜなら、妻よ。あなたが夫を救えるかどうか、どうしてわかりますか。また、夫よ。あなたが妻を救えるかどうか、どうしてわかりますか」(1コリ7:15~16)

(3) 両方とも、再婚は許されると考える十分な根拠がある。

- ①ただし、独身生活に導かれる者もいる。

3. 以上の原則の現代的適用

(1) 非常に困難なテーマである。

- ①イエス時代のユダヤ人の状況に対して書かれている。
- ②総論的な内容で、具体的なケースを取り上げているわけではない。
- ③キリスト教界でも、意見の一致はない。
- ④以下に述べることは、私の考え方である。

(2) 上記(性的不道徳、未信者の相手が離婚を望む)以外の離婚理由はあり得るか。

- ①時代は複雑化している。
- ②種々の形態の虐待が、広がっている。
- ③ケースバイケースで判断して行く必要がある。

(3) 2つの原則を確認する。

- ①神は、離婚を憎んでおられる。

*離婚は、罪の結果である。

*最後まで和解を迫る。

*教会の助けを借りる。

②神は、憐れみ深い方である。

*離婚し、再婚した人は、赦されるか。

*再婚した人に、それは罪だからすぐに離婚するよという命令はない。

*キリストの十字架によって赦されない罪はない。

*クリスチャンと未信者の離婚率はほとんど変わらない。

*教会は、離婚経験者へのミニストリーを考える必要がある。

(4) 離婚問題を考えることは、十字架の愛を考えることである。

①神の義と恵みの狭間に立つことである。

②離婚と再婚に関しては、神との関係において各自が判断すべきことである。

「富に関する教え(1)」

マコ 10 : 17~31、マタ 19 : 16~20 : 16、ルカ 18 : 18~30

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① イエスは、エルサレムへの途上で、さまざまなテーマについて教えた。
- ② 前回は、離婚に関する教えが出て来た。
 - * パリサイ人たちの質問がきっかけとなった。
 - * 離婚の問題は、当時のユダヤ人社会では論争的になっていた。
- ③ 今回は、富に関する教えが出て来る。
- ④ § 123 「幼子を祝福するイエス」は、結論のところを取り上げる。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 124 富に関する教え

マコ 10 : 17~31、マタ 19 : 16~20 : 16、ルカ 18 : 18~30

2. アウトライン

- (1) 富める青年との対話 (16~22 節)
 - (2) 弟子たちとの対話 (23~26 節)
 - (3) ペテロとの対話 (27~30 節)
 - (4) ぶどう園の労働者のたとえ話 (20 : 1~16)
- (今回は、(1) と (2) を取り上げる)

3. 結論

- (1) § 123 と § 124 の対比
- (2) 唯一の救いの方法
- (3) クリスマンと富の関係

富に関する教えについて学ぶ。

I. 富める青年との対話 (16~22 節)

1. 16~17 節

Mat 19:16 すると、ひとりの人がイエスのもとに来て言った。「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」

Mat 19:17 イエスは彼に言われた。「なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方は、ひとりだけです。もし、いのちに入りたいと思うなら、戒めを守りなさい。」

(1) ひとりの人

- ①青年である(ネアニスコス)(マタ19:20)。20歳から40歳くらいまでの成人
- ②資産家である(マタ19:22)。
- ③役人である(ルカ18:18)。「サンヘドリンの議員」か「会堂管理者」である。
- ④御前にひざまずいた(マコ10:17)。熱心な探究心を示している。

(2) 「永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか」

- ①ラビ的ユダヤ教によれば、彼はすでに神の恵みを得ている。裕福であるから。
- ②しかし、彼は救いの確信を得たいと願っている。
 - * 永遠の命を得ているという確信が、救いの確信である。

(3) 彼は、「尊い先生」と呼びかけている(マコ10:17)

- ①この青年は、イエスを霊的指導者として尊敬している。
- ②しかし、彼にとってイエスは、あくまでも人間である。
- ③彼は、「アガソス」という言葉を使用している(本質的に善)。
 - * 「尊い」も「良い」も同じギリシア語の「アガソス」である。
 - * 「カロス」という言葉もある(外面的な善)。
- ④「尊い」とは、ラビに呼びかける際に使用する言葉ではない。

(4) イエスは、「良い方は、ひとりだけです」と答えた。

- ①「なぜ、わたしを『尊い』と言うのですか。尊い方は、神おひとりのほかには、だれもありません」(マコ10:18)
- ②これは正しい神学である。人は墮落しており、神だけが尊いお方である。
- ③ユダヤ人たちは、神が良い方であることを強調した。「the Good」というと神。
- ④イエスは、自らの神性を否定しているのではない。
- ⑤ここでイエスは、この青年が答えるのを待たれた。
 - * 「あなたこそ尊いお方、神です」という告白を期待された。
 - * そうすれば、「あなたは永遠の命を得ている」と宣告されたはずである。

(5) しかし、青年が答えないので、イエスはモーセの律法を示した。

- ①「もし、いのちに入りたいと思うなら、戒めを守りなさい」
- ②業による救いは不可能であることを示そうとされた。
- ③律法は、人に認罪を与える。

Mat 19:18 彼は「どの戒めですか」と言った。そこで、イエスは言われた。「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証をしてはならない。」

Mat 19:19 父と母を敬え。あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」

Mat 19:20 この青年はイエスに言った。「そのようなことはみな、守っております。何がまだ欠けているのでしょうか。」

(1) 青年は、非常に敏感で、察しが早い。

- ①「どの戒めですか」と尋ねている。
- ②パリサイ派の口伝律法も守るべきなのかという意図がある。

(2) イエスは、十戒の後半(5～10戒)、人間関係に関する律法を示した。

- ①第5戒：両親を敬え。
- ②第6戒：殺すな。
- ③第7戒：姦淫するな。
- ④第8戒：盗むな。
- ⑤第9戒：偽証をするな。
- ⑥第10戒：隣人のものを欲しがるな(隣人愛)。

(3) 青年は、「そのようなことはみな、守っております。何がまだ欠けているのでしょうか」と言った。

- ①彼は、霊的に盲目である。
- ②内的確信としては、「守っている」と思い込んでいる。
- ③それでも、彼は何か不足していると感じていた。
- ④「イエスは彼を見つめ、その人をいつくしんで言われた」(マコ10:21)
 - *イエスは、彼を愛された。
 - *彼が神の国に入ることを願われた。

3. 21～22節

Mat 19:21 イエスは彼に言われた。「もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」

Mat 19:22 ところが、青年はこのことばを聞くと、悲しんで去って行った。この人は多くの財産を持っていたからである。

(1) ここでイエスは、彼の本当の問題を指摘された。

- ①富が、彼の心を支配していた。
- ②もし彼が義人(イエスを神と信じる信仰によって義とされている)であるなら、

彼は貧しい人たちに愛を示すはずである。

(2) 青年は、悲しんで去って行った。

- ①彼は、隣人を自分自身のように愛していなかったのである。
- ②つまり、彼はイエスが指摘した戒めを実行していなかったのである。
- ③彼は救われていない。
- ④この青年がその後どうなったかは、記されていない。
- ⑤恐らく、富を手放すことができなかつたのであろう。
- ⑥これは、第1戒の違反である。

「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があつてはならない」(出20:3)

II. 弟子たちとの対話(23~26節)

1. 23~24節

Mat 19:23 それから、イエスは弟子たちに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。金持ちが天の御国に入るのはむずかしいことです。

Mat 19:24 まことに、あなたがたにもう一度、告げます。金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」

(1) 弟子たちへの教え

「金持ちが天の御国に入るのはむずかしいことです」

「金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい」

- ①誇張法である。
- ②針の穴とは、そういう名称の門ではない。
 - *中世になってから、「針の穴」という門が出現した。
- ③縫い針の穴である。
- ④ルカでは、手術用の針の穴である。
- ⑤イエスは、人間的な業による救いが不可能であることを教えている。

2. 25節

Mat 19:25 弟子たちは、これを聞くと、たいへん驚いて言った。「それでは、だれが救われることができるのでしょうか。」

(1) 弟子たちもパリサイ派の神学の影響を受けていたことが分かる。

- ①金持ちは、神の祝福を受けているとの教えがあつた。
- ②金持ちでも救われないとしたら、誰が救われるというのか。

3. 26節

Mat 19:26 イエスは彼らをじっと見て言われた。「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。」

(1) 人間には不可能なことを、神はなさる。

①金持ちが救われるのは、難しい。

*見える物に信頼しているので、見えない神を信頼することができない。

*神だけが、それを可能にしてくださる。

(2) 金持ちにも、貧しい人にも、救いの可能性は備えられている。

①霊的な物乞いになるなら、神は救ってくださる。

結論

1. §123と§124の対比

(1) §123 「幼子たちを祝福するイエス」 マタ19:13~15

Mat 19:13 そのとき、イエスに手を置いて祈っていただくために、子どもたちが連れて来られた。ところが、弟子たちは彼らをしかった。

Mat 19:14 しかし、イエスは言われた。「子どもたちを許してやりなさい。邪魔をしないでわたしのところに来させなさい。天の御国はこのような者たちの国なのです。」

Mat 19:15 そして、手を彼らの上に置いてから、そこを去って行かれた。

①マコ10:14で、イエスは憤っておられる。

②イエスは幼子たちを愛し、彼らを祝福された。

③「天の御国はこのような者たちの国なのです」と言われた。

④無力な幼子は、親に信頼するしか生きる方法はない。

⑤幼子のような信仰を持つことが、救いを得る方法である。

(2) §124 「富める青年」

①彼は、富を神としていた。

②それゆえ、幼子のような信仰を持つことができなかった。

③聖書を学ぶことは、単純の信仰を持つことである。

2. 唯一の救いの方法

(1) 持っている物をすべて売れば、救われるというのではない。

(2) 救いの道は、たった一つである。主イエスに対する信仰がそれである。

①自分は罪人で、神の聖なる要求に応えることができないとの認識が必要。

②この青年は、持ち物を売って隣人愛を実践することができなかった。

③「もしれば救いの条件なら、私にはできません。自分の努力によって自分を

救うことはできません。それゆえ、あなたの恵みによって私を救ってください」と言うべきであった。

3. クリスマンと富の関係

(1) これは、クリスマンは金持ちになってはいけないと教えているのではない。

- ①神は私たちに物質的祝福も与えてくださる。
- ②クリスマンは、富の管理者としても召されている。
- ③将来に備えて、賢く富を管理する責任がある。

(2) クリスマンは、富の管理者としての使命を再認識すべきである。

- ①富に縛られる人は、良き管理者ではない。
- ②今の世界には、助けを必要とする人たちが満ちている。
- ③今は、主の再臨が近い時代である。
- ④主は、地上に宝を積むよりも、天に宝を積むように教えておられる。

「自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです」(マタ6:19~21)

「富に関する教え(2)」

マタ 19:27~20:16

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① イエスは、エルサレムへの途上で、さまざまなテーマについて教えた。
- ② 前回は、富める青年が登場した。
 - * 永遠の命を得るために何をしたらよいかという質問があった。
 - * イエスは、この青年が富に束縛されていることを指摘された。
 - * 金持ちが神の国に入るのは非常に困難なことである。
- ③ 今回は、ペテロの質問に答える形で、有名なたとえ話が語られる。
 - * たとえ話の部分は、マタイの福音書だけに出て来る。
 - * 実は、このたとえ話は、実に美しい話である。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 124 富に関する教え

マコ 10:17~31、マタ 19:16~20:16、ルカ 18:18~30

2. アウトライン

- (1) 富める青年との対話 (16~22 節)
 - (2) 弟子たちとの対話 (23~26 節)
 - (3) ペテロとの対話 (27~30 節)
 - (4) ぶどう園の労働者のたとえ話 (20:1~16)
- (今回は、(3) と (4) を取り上げる)

3. 結論

- (1) たとえ話からの教訓
- (2) 逆転の発想

富に関する教えについて学ぶ。

Ⅲ. ペテロとの対話 (27~30 節)

1. 27 節

Mat 19:27 そのとき、ペテロはイエスに答えて言った。「ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。私たちは何がいただけるでしょうか。」

(1) ペテロは、イエスの教えの要点を理解したと感じた。

①ペテロの言葉は、イエスが富める青年に語ったものと同じである。

②確かに、弟子たちは「何もかも捨てて」イエスに従ってきた。

*漁師たちは船や網を捨てて来た。

*マタイは、収税所を捨てて来た。

(2) 「私たちは何がいただけるでしょうか」

①この言葉は、ペテロの内面を表現している。肉的な性質の現れである。

②ペテロはイエスと取引をしている。

③私たちにもこのような性質があるので、注意する必要がある。

2. 28～29節

Mat 19:28 そこで、イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。世が改まって人の子がその栄光の座に着く時、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。

Mat 19:29 また、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、あるいは畑を捨てた者はすべて、その幾倍もを受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。

(1) イエスは、「イエスのために犠牲を払った者は報酬を受ける」と約束された。

①12弟子が受ける褒賞

②信者一般が受ける褒賞

③永遠の褒章

(2) 12弟子が受ける褒賞

①「世が改まって」とは、千年王国のことである。

②「新しい世界になり」(新共同訳)

③「人の子が栄光の座に着く時」は、千年王国の描写である。

④信者が受ける褒賞は、千年王国での地位や責務に関係している。

*キリストの御座の裁きで褒賞は決まるが、それが可視化するのには千年王国。

⑤12弟子は、12の座に着いて、イスラエルの12部族をさばく。

*王政時代に入る前の士師は、さばき司である。

(3) 信者一般が受ける褒賞

①イエスのために家族や畑を捨てた者は、今の時代において、その幾倍も受ける。

②信者は、世界に広がる神の家族との交流を持つようになる。

③富を犠牲にした者は、その幾倍もの霊的富を得るようになる。

(4) 永遠の褒章

- ①永遠のいのちのことである。
- ②すべてを捨てることによって永遠のいのちを得るのではない。
- ③永遠のいのちは、賜物である。
- ④すべてを捨てた者は、永遠のいのちをフルに味わい、楽しむようになる。
*クリスチャン生活をフルに楽しむ人は幸いである。

3. 30節

Mat 19:30 **ただ、先の者があとになり、あとの者が先になることが多いのです。**

(1) この言葉の意味

- ①これは、神と取引するような心に対する警告である。
- ②神のために何かを犠牲にするなら、それは必ず報われる。
- ③しかし、利己的な動機でそうすることのないように、注意せよ。
- ④なぜなら、先の者があとになり、あとの者が先になることが多いのだから。

(2) これは、次のたとえ話への導入である。

- ①たとえ話は、始まりと終わりが、括弧でくくられている。
- ②マタ 20:16 も同じ言葉である。これが最後の括弧である。

IV. ぶどう園の労働者のたとえ話 (20:1~16)

1. 1節

Mat 20:1 **天の御国は、自分のぶどう園で働く労務者を雇いに朝早く出かけた主人のようなものです。**

(1) 神がぶどう園の主人にたとえられている。

- ①収穫の時期には、多くの労働者が必要になる。
- ②収穫は短時間のうちに行う必要がある。
- ③作業は、午前6時に始まり、午後6時に終わる。

(2) 日雇い労働者

- ①小作農で、自分の畑での作業がすぐに終わる人
- ②父の畑をまだ相続していない息子たち
- ③畑をなくしたため、職を求めて各地を転々としている労働者

2. 2節

Mat 20:2 彼は、労務者たちと一日一デナリの約束ができると、彼らをぶどう園にやった。

(1) 午前6時の男たち（12時間労働）

- ①日雇い契約ができた。
- ②12時間労働で1デナリ。当時の相場である。
- ③彼らは、ぶどう園で働き始めた。

3. 3～5節

Mat 20:3 それから、九時ごろに出かけてみると、別の人たちが市場に立っており、何もしていないでいた。

Mat 20:4 そこで、彼は那些人たちに言った。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。相当のものを上げるから。』

Mat 20:5 彼らは出て行った。それからまた、十二時ごろと三時ごろに出かけて行って、同じようにした。

(1) 午前9時の男たち（9時間労働）

- ①市場で立っており、何もしていない人たち
- ②日雇い契約ではない。
- ③彼らは、「相当のものを上げるから」という主人の言葉を信頼した。

(2) 午前12時の男たち（6時間労働）

- ①同じようにした。

(3) 午後3時の男たち（3時間労働）

- ①同じようにした。

4. 6～7節

Mat 20:6 また、五時ごろ出かけてみると、別の人たちが立っていたので、彼らに言った。『なぜ、一日中仕事もしないでここにいるのですか。』

Mat 20:7 彼らは言った。『だれも雇ってくれないからです。』彼は言った。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。』

(1) 午後5時の男たち（1時間労働）

- ①彼らは、仕事がないので、一日中そこに立っていた。
- ②1時間労働のためにでも雇うのは、収穫期の人手不足を示している。
- ②この人とは、賃金の話は一切していない。

(2) 日雇い契約を結んだのは、午前6時の男たちだけである。

①午前9時、午前12時、午後3時、午後5時の男たちは、主人の判断に委ねた。

5. 8～10節

Mat 20:8 こうして、夕方になったので、ぶどう園の主人は、監督に言った。『労働者たちを呼んで、最後に来た者たちから順に、最初に来た者たちにまで、賃金を払ってやりなさい。』

Mat 20:9 そこで、五時ごろに雇われた者たちが来て、それぞれ一デナリずつもらった。

Mat 20:10 最初の者たちがもらいに来て、もっと多くもらえらるだろうと思ったが、彼らもやはりひとり一デナリずつであった。

(1) その日の内に賃金を支払うのは、律法の命令である。

①申 24:14～15

②その日暮らしの者には、日当をもらうことが重要であった。

(2) 賃金は、最後に来た者たちから順に支払われた。

①この順番なので、午前6時の男たちは、支払額を見ることができた。

②雇用契約のない者たち全員が、1デナリを受け取った。

(3) 午前6時の男たちは、もっと多くもらえらると思った。

①労働時間を考えると、そう思うのは当然であろう。

②しかし、彼らもまた同額の1デナリを受け取った。

6. 11～12節

Mat 20:11 そこで、彼らはそれを受け取ると、主人に文句をつけて、

Mat 20:12 言った。『この最後の連中は一時間しか働かなかったのに、あなたは私たちと同じにしました。私たちは一日中、労苦と焼けるような暑さを辛抱したのです。』

(1) 午前6時の男たちは、主人に文句を言った。

①自分たちは、一日中働いた。

②労苦と焼けるような暑さを辛抱した。

7. 13～16節

Mat 20:13 しかし、彼はそのひとりに答えて言った。『友よ。私はあなたに何も不当なことはしていない。あなたは私と一デナリの約束をしたではありませんか。』

Mat 20:14 自分の分を取って帰りなさい。ただ私としては、この最後の人にも、あなたと同じだけ上げたいのです。

Mat 20:15 自分のものを自分の思うようにしてはいけないという法がありますか。それとも、

私が気前がいいので、あなたの目にはねたましく思われるのですか。』

(1) 主人の主張

- ①これは、契約に基づく支払であって、自分は何も不当なことはしていない。
- ②それゆえ、自分の分を取って帰りなさい。
- ③午後5時の男たちにも同額を支払うのは、そうしてあげたいからだ。
*主人は、彼らは生活のためにこの金が必要であることを知っていた。
- ④自分のものを自分の思うようにしてはいけないという法はない。
- ⑤問題は、他人が祝されているのを見て妬ましく思う心にある。

Mat 20:16 このように、あとの者が先になり、先の者があとになるものです。』

(1) たとえ話の結論である。

- ①神からの褒賞を利己的な心で求める者は、あとになる。
- ②神と褒賞に関して取引するような者は、あとになる。
- ③神の褒賞に関しては、驚きがある。

結論

1. たとえ話からの教訓

(1) 神の僕は、神の畑で忠実に働き、結果を神に委ねる。

- ①神は、すべての犠牲に対して褒賞を与えてくださる。
- ②神と取引するのは、愚かなことである。
- ③その場合は、その人の心に問題がある。

(2) 神は恵み深いお方である。

- ①それゆえ、結果を委ねることができる。

(例話) 家庭教師の報酬

- ②主人は、それぞれが抱える必要に答えるために賃金を支払った。
- ③それゆえ、神と取引する必要はない。

(3) 神は主権者である。

- ①すべてのものは、神のものである。
- ②神は、褒賞に関するすべての決定権を持っておられる。

2. 逆転の発想

(1) ユダヤ教の終末論 vs. イエスの終末論

- ①ユダヤ教では、裁きの日の教えがあった。

*イスラエルはよく働いたので、高額の賃金を受け取る。

*異邦人はほとんど働いていないので、賃金もわずかである。

②イエスは、その教えを逆さにされた。

*富や地位は、次の世で祝福を受けることの保証とはならない。

*イスラエル人であることも、祝福の保証ではない。

*来るべき世では、貧しい者、抑圧された者が、正当な褒賞を受ける。

(2) 客観的読み方 vs. 主観的読み方

①このたとえ話は、不公平感で満ちている。

②このたとえ話は、私が午後5時の労働者であることを教えている。

(3) 損をした vs. 特権に与った

①損をしたという発想

(例話) 死ぬ直前に信じて、洗礼を受ければいい。

(例話) 引っ越しが終わってから入社した人

*自分は、炎天下で12時間も働いた。

②特権に与ったという発想

*主人は、実に麗しいお方である。

*自分は、このように麗しい主人に仕える特権に与っている。

「受難と復活の予告」

マコ 10 : 32~45

1. はじめに

(1) 文脈の確認

① イエスは、エルサレムへの途上で、さまざまなテーマについて教えた。

② 今回は、受難に関する教えが出て来る。

③ これは、福音書の流れの中では3度目の受難と復活の宣言である。

* これまでのものと比べると、非常に詳細な情報が語られている。

④ 12弟子は、その意味を理解することができなかった。

「しかし弟子たちには、これらのことが何一つわからなかった。彼らには、このことばは隠されていて、話された事が理解できなかった」(ルカ 18 : 34)

⑤ 弟子たちが乗っている文脈と、イエスが語っている文脈とが異なる。

⑥ この箇所は、神からリーダーたちに与えられたチャレンジである。

* すべての人が、何らかの形でリーダーである。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 125 イエスは再び受難と復活を予告する。

マコ 10 : 32~45、マタ 20 : 17~28、ルカ 18 : 31~34

2. アウトライン

(1) 受難と復活の予告 (32~34 節)

(2) ヤコブとヨハネの願い (35~37 節)

(3) イエスの教え (38~40 節)

(4) 10人の弟子たちの反応 (41 節)

(5) イエスの教え (42~節)

3. 結論

(1) 「仕える者」と「しもべ」

(2) 先頭の立つイエス

受難と復活の教えを通して、弟子道について学ぶ。

I. 受難と復活の予告 (32~34 節)

1. 32 節

Mar 10:32 さて、一行は、エルサレムに上る途中にあった。イエスは先頭に立って歩いて行かれた。弟子たちは驚き、また、あとについて行く者たちは恐れを覚えた。すると、イエスは再び十二弟子をそばに呼んで、ご自分に起ころうとしていることを、話し始められた。

(1) 一行は、エルサレムに上る途上にあった。

①イエスは、先頭に立って歩いて行かれた。

②イエスの決意が表明されている。

*エルサレムでの受難に向かって歩いている。

(2) 弟子たちは驚いた。

①「弟子たち」と「あとについて行く者たち」は、同じグループであろう。

②驚きと恐れが感情が、彼らを支配した。

③彼らには、御国の希望が与えられていた。

④と同時に、エルサレムに行くのは危険だと分かっていた。

⑤サンヘドリンもローマも恐ろしい存在である。

(3) イエスは再び12弟子をそばに呼んだ。

①3度目の受難の予告を語る。

*これまでで最も詳細なものである。

②イエスは、旧約聖書にあるメシア受難の預言を知っていた。

*詩22:6~8

*イザ50:6、52:13~53:12

③イエスは、当時の宗教的、政治的文脈を知っていた。

*マコ8:15 「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種に気をつけなさい」

2. 33~34節

Mar 10:33 「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子は、祭司长、律法学者たちに引き渡されるのです。彼らは、人の子を死刑に定め、そして、異邦人に引き渡します。

Mar 10:34 すると彼らはあざけり、つばきをかけ、むち打ち、ついに殺します。しかし、人の子は三日の後に、よみがえります。」

(1) 未来形の動詞が8つ出て来る。

①予告する内容が、確実に起こることを示している。

②イエスが、エルサレムで起こることを詳細に理解していることを示している。

(2) 8つの内容を見てみよう。

- ①メシア(人の子)は、祭司長、律法学者たち(サンヘドリン)に引き渡される。
- ②ユダヤ人たちは、イエスを死刑に定める。
- ③ユダヤ人たちは、イエスを異邦人(ローマ人)に引き渡す。

*死刑を執行する権威がなかったから。

- ④異邦人たちは、イエスをあざける。
- ⑤つばきをかける。
- ⑥むち打つ。
- ⑦ついに殺す。

*③～⑦は、十字架刑を描写したものである。

- ⑧しかしメシアは、3日後に復活する。

*受難と復活とは、セットで予告されている。

*将来の希望が保証されている。

II. ヤコブとヨハネの願い(35～37節)

1. 35節

Mar 10:35 さて、ゼベダイのふたりの子、ヤコブとヨハネが、イエスのところに来て言った。「先生。私たちの頼み事をかなえていただきたいと思います。」

(1) マタ 20 : 20

「そのとき、ゼベダイの子たちの母が、子どもたちといっしょにイエスのもとに来て、ひれ伏して、お願いがありますと言った」

①ゼベダイの子ヤコブとヨハネ

②母の名は、サロメである。

*十字架のそばにいた婦人(マタ 27 : 56、マコ 15 : 40、ヨハ 19 : 25 参照)

*イエスの母マリアの姉である。

③ということは、ヤコブとヨハネはイエスの従弟たちである。

*血縁関係を利用して、他の弟子たちを出し抜こうとしている。

④母も2人の息子たちも、自分の資質を提示しないで、結果だけを求めている。

2. 36～37節

Mar 10:36 イエスは彼らに言われた。「何をしてほしいのですか。」

Mar 10:37 彼らは言った。「あなたの栄光の座で、ひとりを先生の右に、ひとりを左にすわらせてください。」

(1) 彼らは、メシア的王国が間もなく来ると思い込んでいる。

①それは、イエスが栄光の座に着く時である。

②彼らは、メシア的王国の前にメシアの受難があることを知らない。

③彼らの野望は、メシア的王国で最高の地位に着くことである。

*宮廷においては、右の座は最高位、左の座は2番目の地位である。

III. イエスの教え (38~40 節)

1. 38 節

Mar 10:38 しかし、イエスは彼らに言われた。「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていないのです。あなたがたは、わたしの飲もうとする杯を飲み、わたしの受けようとするバプテスマを受けることができますか。」

(1) イエスは、彼らの無知を指摘された。

①メシアの栄光に与ることは、メシアの受難に与ることでもある。

(2) イエスは、彼らに質問された。

①「杯」とは、「喜び」や「神の怒り(裁き)」の比喩的表現である。

*ここでは、「神の怒り」を意味する。

*イエスは、それを自分に適用された。

*イエスの死は、自発的なものである。

②「バプテスマ」も、「杯」と同じような意味である。

*水の中に浸かるとは、悲劇に打ちひしがれることの比喩的表現である。

*イエスは、神の怒りを一身に受けて、死ぬ。

③この質問は、「できません」という回答を期待したものである。

2. 39 節 a

Mar 10:39 彼らは「できます」と言った。

(1) ヤコブとヨハネは、終末論戦争(メシア的戦争)を考えたのであろう。

①メシア的王国をもたらすための戦争である。

②自分たちも、その戦いに参加する意思があるという意味であらう。

③彼らは、イエスの受難が罪の贖いのための受難であることを理解しなかった。

3. 39b~40 節

イエスは言われた。「なるほどあなたがたは、わたしの飲む杯を飲み、わたしの受けるべきバプテスマを受けはします。」

Mar 10:40 しかし、わたしの右と左にすわることは、わたしが許すことではありません。それに備えられた人々があるのです。」

- (1) イエスは、「杯」と「バプテスマ」を別の意味で彼らに適用された。
 - ①彼らもまた、苦難に会う。
 - ②しかしそれは、罪の贖いのための苦難ではない。
 - ③イエスに従う過程で経験する苦難である。

- (2) イエスの予告は、その通りになった。
 - ①ヤコブは、殉教の死を遂げる最初の使徒となった(使12:2)。
 - ②ヨハネは、多くの迫害や追放に会いながら、90歳代まで生きた。

- (3) イエスは、彼らの願いを拒否された。
 - ①イエスにはその権威はない。
 - ②父なる神が、栄誉ある座に着く者を決めておられる。

IV. 10人の弟子たちの反応(41節)

1. 41節

Mar 10:41 十人の者がこのことを聞くと、ヤコブとヨハネのことで腹を立てた。

- (1) これは、他の10人の使徒たちの知るところとなった。
 - ①母と2人の息子が、イエスに近づいたのである。
 - ②目に付かないはずがない。

- (2) 彼らは、ヤコブとヨハネのことで腹を立てた。
 - ①彼らもまた、野望を抱いていた。
 - ②イエスは、御国における「偉大さ」について教える必要性を感じた。

V. イエスの教え(42~45節)

1. 42節

Mar 10:42 そこで、イエスは彼らを呼び寄せて、言われた。「あなたがたも知っているとおおり、異邦人の支配者と認められた者たちは彼らを支配し、また、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。

- (1) 地上での「偉大さ」
 - ①支配者は上に立って権威をふるう。
 - *中東の王たちは、自らを神とした。
 - *ギリシアやローマも、専制政治を行った。

②下の者たちを支配し、自分の思うように動かそうとする。

*ローマは、ユダヤ人たちを抑圧した。

③ユダヤ人教師イエスが、異邦人の習慣を悪い例として取り上げている。

2. 43～44節

Mar 10:43 しかし、あなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりた
いと思う者は、みなに仕える者になりなさい。

Mar 10:44 あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、みなのもべになりなさい。

(1) 御国での「偉大さ」

①みなに仕える者こそ、偉大な人である。

②みなのもべになる者こそ、偉大な人である。

③イエスの教えは、革命的なものである。

*奴隷は、社会的に見下されていた。

3. 45節

Mar 10:45 人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、
多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。」

(1) 最高の手本は、イエスご自身である。

①メシアは、仕えられるためではなく、仕えるために来られた。

②ゴールは、贖いの代価として自分のいのちを与えることである。

(2) イエスの使命は、2つある。

①しもべとしての召命を忘れたイスラエルの民を回復すること。

②異邦人の光となること。

結論

1. 「仕える者」と「しもべ」

(1) 仕える者

①ディアコノスというギリシア語

②英語では、「minister」、「deacon」である。

③ディアコノスの日本語訳は、執事である。

*使6:1～4で7人が選ばれた。

*彼らは、長老に仕えるのがその役割である。

④自発的奉仕が、その特徴である。

(2) しもべ

- ①デューロスというギリシア語
- ②英語では、「servant」である。
- ③犠牲的奉仕が、その特徴である。

(3) サーバント・リーダーシップ

- ①成功するための単なる方程式ではない。
- ②在り方の問題である。
- ③イエスの教えは革命的なものであり、それを受け入れるなら心の革命が起こる。

2. 先頭に立つイエス

(1) エルサレムに向かうイエスは、孤独であった。

- ①弟子たちの前を行くイエス
- ②受難に顔を向けるイエス

(2) エルサレムに向かうイエスは、喜びに満ちていた。

- ①父の御心を忠実にを行うことを決意するイエス
- ②苦難の先に置かれた喜びを見るイエス
 - *高く上げられる喜び
 - *花嫁を贖う喜び

③ **ヘブ 12 : 2b**

「イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず
十字架を忍び、神の御座の右に着座されました」

(3) クリスマン生活は、イエスの後に従う生活である。

- ①クリスマンとは、「follower of Jesus」である。
- ② **ヘブ 12 : 2a**

「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい」

③御国での評価こそ、クリスマンが気にかけるべきものである。

*この世の統治原則ではなく、御国の基準に従って歩むべきである。

「バルテマイの癒し」

マコ 10 : 46～52

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①イエスは、エルサレムへの途上で、さまざまなテーマについて教えた。
- ②前回は、イエスによる受難と復活の予告であった。
- ③弟子たちは、その意味が理解できなかった。
- ④弟子たちが乗っている文脈と、イエスが語っている文脈とが異なる。
 - *イエスは十字架に向かって進んでいる。
 - *弟子たちの認識では、戴冠式に向かう王の行列に参加している。
- ⑤このことを前提に、きょうの箇所を読む必要がある。
- ⑥単純で、美しい物語である。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 126 盲人のバルテマイとその仲間の癒し

マコ 10 : 46～52、マタ 20 : 29～34、ルカ 18 : 35～43

2. アウトライン

- (1) 状況説明 (46 節)
- (2) バルテマイの願い (47～48 節)
- (3) イエスの答え (49～52 節)

3. 結論

- (1) 逆転の法則
- (2) 機会の法則
- (3) 弟子の法則

盲人の癒しを通して、弟子道について学ぶ。

I. 状況説明 (46 節)

1. 46 節

Mar 10:46 彼らはエリコに来た。イエスが、弟子たちや多くの群衆といっしょにエリコを出られると、テマイの子のバルテマイという盲人の物ごいが、道ばたにすわっていた。

- (1) イエスの一行は、ペレアを去ってヨルダン川を渡り、エリコまで来た。

- ① エリコはユダヤの一部である。
 - ② エリコからエルサレムまでは、徒歩で1日の道のりである。
 - ③ 多くの群巡礼者が、エルサレムに向かっていった。
- (例話) 今年のペサハは、4月3日(金)の日没から始まった。

(2) 盲人は、何人いたのか。

- ① マタ 20 : 30 では、「ふたりの盲人」となっている。
- ② マルコの福音書では、ひとりである。
- ③ これは、矛盾ではない。
 - * 盲人はふたりいた。
 - * マルコは、より目立つ人物に焦点を合わせている。

(3) この出来事が起こった場所は、どこか。

- ① ルカ 18 : 35
「イエスがエリコに近づかれたころ、ある盲人が、道ばたにすわり、物ごいをしていった」
- ② マコ 10 : 46
「彼らはエリコに来た。イエスが、弟子たちや多くの群衆といっしょにエリコを出られると、テマイの子のバルテマイという盲人の物ごいが、道ばたにすわっていた」
- ③ これは、矛盾ではない。
 - * 旧約のエリコ
 - * 新約のエリコ (ヘロデが冬の王宮のために建設。南に約2キロの場所)
 - * イエスは、旧約のエリコを出て、新約のエリコに向かっておられた。

(例話) 不信仰な質問をする学者 「第3の盲人」

(4) 当時の盲人の社会的地位は、どのようなものであったか。

- ① 盲人や身体にハンディのある者は、一般職に就くことができなかった。
- ② 生き延びる唯一の方法は、物ごいをすることであった。
 - * 通常は、人通りの多い場所に座った。
- ③ 彼らは、社会的弱者であったが、モーセの律法によって守られていた。
- ④ 宗教的には、見下されていた。
- ⑤ 子どもたちが見下されていたのと、同じである。

II. バルテマイの願い (47～48 節)

1. 47 節

Mar 10:47 ところが、ナザレのイエスだと聞くと、「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください」と叫び始めた。

- (1) 彼は、イエスに関する知識を持っていた。
 - ①ナザレのイエスは、盲人の目を開いた方である。
 - ②そこで彼は、叫び始めた。

- (2) 「ダビデの子イエスさま」
 - ①彼は、イエスがイスラエルのメシアであることを信じた。
 - ②不信仰な指導者たちとは、対照的である。

- (3) イエスは、彼を黙らせなかった。
 - ①イエスは、「人の子」という称号を用いられた。
 - ②ここでは、「ダビデの子」と呼ばれることを受け入れている。

2. 48 節

Mar 10:48 そこで、彼を黙らせようと、大ぜいでたしなめたが、彼はますます、「ダビデの子よ。私をあわれんでください」と叫び立てた。

- (1) 人々は、彼を黙らせようとした。
 - ①大ぜいでたしなめた。弟子たちも入っていたであろう。
 - ②盲人は、王の行列を妨害している。
 - ③弟子たちが、イエスに近づく子どもたちを叱ったのと同じ構図である。
 - ④しかし盲人は、ますます激しく叫び立てた。

III. イエスの答え (49～52 節)

1. 49～50 節

Mar 10:49 すると、イエスは立ち止まって、「あの人を呼んで来なさい」と言われた。そこで、彼らはその盲人を呼び、「心配しないでよい。さあ、立ちなさい。あなたをお呼びになっている」と言った。

Mar 10:50 すると、盲人は上着を脱ぎ捨て、すぐ立ち上がって、イエスのところに来た。

- (1) イエスは立ち止まられた。
 - ①エルサレムに向かう決意を固めている時でも、弱者への奉仕を忘れない。
(例話) タイムマネジメントと予定変更

②「あの人を呼んで来なさい」とは、たしなめている人たちへの叱責である。

(2) 人々は、盲人に励ましの言葉をかけた。

「心配しないでよい。さあ、立ちなさい。あなたをお呼びになっている」(新改訳)

「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ」(新共同訳)

「喜べ、立て、おまえを呼んでおられる」(口語訳)

「心安かれ、起て、なんぢを呼びたまふ」(文語訳)

「運のいいやつだ。おい、イエス様がお呼びだぞ」(リビングバイブル)

(4) 盲人は、すぐにイエスのところに来た。

①劇的な描写である。

②目撃者情報である。ペテロがマルコに伝えたと思われる。

2. 51～52節

Mar 10:51 そこでイエスは、さらにこう言われた。「わたしに何をしてほしいのか。」すると、盲人は言った。「先生。目が見えるようになることです。」

Mar 10:52 するとイエスは、彼に言われた。「さあ、行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。」すると、すぐさま彼は見えるようになり、イエスの行かれる所について行った。

(1) 「わたしに何をしてほしいのか」

①盲人の信仰を確認し、それを引き出すための質問である。

(2) 「先生」

①「ラボニ」とは、「我が主」という意味である。

②ヨハ20:16で、マグダラのマリアが復活のイエスにそう呼びかけている。

(3) 「あなたの信仰があなたを救ったのです」

①信仰が彼を癒したのではない。

②信仰は、癒しを受け取る方法である。

③さらに、肉体的癒しは、彼が霊的に救われたことを示している。

(4) この盲人は、イエスの後に従った。

結論

1. 逆転の法則

- (1) 先の者が後になり、後の者が先になる。
- (2) 「いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです」(マコ8:35)
- (3) イスラエルは靈的盲目状態にあったが、この盲人は、靈的には見えていた。
「そこで、イエスは言われた。『わたしはさばきのためにこの世に来ました。それは、目の見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです』(ヨハ9:39)

2. 機会の法則

- (1) イエスがエリコを通るのは、これが最後である。
 - (2) 盲人は、最初で最後の機会を有効に捉えた。
 - ①盲人は、一生懸命イエスに叫び続けた。
「神は言われます。『わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。』確かに、今は恵みの時、今は救いの日です」(2コリ6:2)
- (例話) テレビ伝道 「今が時です」

3. 弟子の法則

- (1) 弟子化のプロセス
 - ①まず、自らの無力を認識した。
 - *盲人であるので、一般人よりもその認識がある。
 - *上着を脱ぎ捨てた。象徴的行為である。
 - *上着は、防寒用であり、寝具であり、施しを受けるための道具である。
 - ②次に、イエスをメシアと認識した。
 - *神の恵みを与えてくれるのは、イエスだけである。
 - ③その結果、信仰による救いを体験した。
 - *肉体の癒しは、靈的に救われていることの証明である。
 - ④そして、イエスに従った。
 - *数日後に、彼はイエスの十字架の死を目撃することになる。
- (2) 盲人の視力の回復は、弟子たちの靈的目が開かれることの例示である。
 - ①弟子たちの目は、イエスの復活と聖霊降臨によって開かれる。
 - ②盲人のために立ち止まることこそ、神の国の本質に関係したことである。
- (3) バルテマイとは、「テマイの息子」という意味である。
 - ①実名が出て来るのは、初代教会で有名な信者になっていたからであろう。
 - ②「いのちの書」と「小羊のいのちの書」

*誕生した人の名は、すべて「いのちの書」に書かれている。

*不信者のままで死ぬと、その名は消される。

*信じた時に、「小羊のいのちの書」に名が記される。

*最終的には、「いのちの書」と「小羊のいのちの書」が同一のものとなる。

(例話) ホテルの予約表に名が記されていないことがあった。

「ザアカイの救い」

ルカ 19 : 1~10

1. はじめに

(1) 文脈の確認

① イエスは、エルサレムへの途上で、さまざまなテーマについて教えた。

② 弟子たちが乗っている文脈と、イエスが語っている文脈とが異なる。

* イエスは十字架に向かって進んでいる。

* 弟子たちの認識では、戴冠式に向かう王の行列に参加している。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 127 ザアカイの家を訪問し、「ミナのたとえ」を語り、エルサレムに向う。

ルカ 19 : 1~28

(3) § 127 の 2 区分

① 1~10 節 ザアカイの救い

② 11~28 節 ミナのたとえ

2. アウトライン

(1) 状況説明 (1~2 節)

(2) ザアカイの行動 (3~4 節)

(3) イエスの行動 (5 節)

(4) 人々の応答とザアカイの応答 (6~10 節)

3. 結論 : 3 つのコメンタリー (注解、解説、例証)

(1) ルカ 18 : 17

(2) ルカ 18 : 27

(3) ルカ 19 : 10

ザアカイの体験を通して、イエスが罪人を救う方法について学ぶ。

I. 状況説明 (1~2 節)

1. 1 節

Luk 19:1 それからイエスは、エリコに入って、町をお通りになった。

(1) 2つのエリコがあった。

①旧約のエリコ

②新約のエリコ

*ヘロデの冬の宮殿があった。

*当時のリゾート地であった。

*冬季には多くの訪問者があった。

(2) イエスは、エリコを通過された。

①エリコの町には少なくとも3人の罪人がいた。

*バルテマイとその仲間

*ザアカイ

②イエスは、脇道ではなく、エリコを通過された。

2. 2 節

Luk 19:2 ここには、ザアカイという人がいたが、彼は取税人のかしらで、金持ちであった。

(1) エリコは取税人がいる町であった。

①国境の町で、通行税を徴収する収税所があった。

②パレスチナで最も裕福な町で、物品税の徴収額も多かった。

(2) ザアカイは、取税人のかしらであった。

①彼は、通行税や物品税を徴収する権利をローマから委託されていた。

②その仕事のために、他の取税人たちを雇っていた。

③普通にやっていたら金持ちになるはずだが、彼はごまかしを行っていた。

④その結果、裕福になっていた。

⑤彼は、ユダヤ人社会では罪人と見なされていた。

II. ザアカイの行動 (3~4 節)

1. 3 節

Luk 19:3 彼は、イエスがどんな方か見ようとしたが、背が低かったので、群衆のために見ることができなかった。

(1) 背が低かった。

①当時の平均身長から判断すると、彼は150センチくらいの男である。

②群衆がいるので、イエスを見ることができないと判断した。

(2) イエスに興味があった。

- ①ザアカイ(ザカイオス)とは、「pure」(清い、純粹)という意味である。
- ②彼の両親は我が子を見て、「pure」と名づけた。
- ③その後、ある時点で、魂をローマに売る決心をした。
- ④裕福になったが、心は渴きを覚えていた。
- ⑤イスラエルの神に立ち帰りたいと願っていた。

2. 4節

Luk 19:4 それで、イエスを見るために、前方に走り出て、いちじく桑の木に登った。ちょうどイエスがそこを通り過ぎようとしておられたからである。

(1) 彼は、前方に走り出て、いちじく桑の木に登った。

- ①亜熱帯気候の中で多くの木が育っていた。ナツメヤシ、いちじく桑の木。
- ②いちじく桑は、枝が幹の低い所から出ているので、登りやすい。
- ③彼は、「ボックス席」に座って、イエスの一行を眺めようとした。

Ⅲ. イエスの行動 (5節)

1. 5節

Luk 19:5 イエスは、ちょうどそこに来られて、上を見上げて彼に言われた。「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」

(1) イエスは、ザアカイを見上げた。

- ①神を認識する最初のステップ

(2) イエスは、ザアカイの名を呼んだ。

- ①神に知られている。
- ②ユダヤ人にとっては、会ったことのない人の名を知っているのは預言者である。

(3) イエスは、ザアカイを招いた。

- ①取税人は、ユダヤ社会では罪人であり、排除されるべき人間である。

(4) イエスは、彼の家に泊まることにしてあると言われた。

- ①いかに高貴な人物であっても、自分から宿泊を申し出ることにはなかった。
- ②イエスは、自らそれを申し出た。福音書の中で、ここだけである。

「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから」(新改訳)

「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」(新共同訳)

「ザアカイよ、急いで下りてきなさい。きょう、あなたの家に泊まることにしているから」(口語訳)

「ザアカイ、急ぎおりよ、今日われ汝の家に宿るべし」

「ザアカイさん。早く降りてきなさい。今晚はあなたの家に泊めてもらうつもりでいますから」(リビングバイブル)

- ①「dei」 It is necessary for me to stay at your house.
- ②I must abide at thy house.
- ③しかも、「きょう」(セイメロン)という言葉が強調されている。

IV. 人々の応答とザアカイの応答 (6～10節)

1. 6節

Luk 19:6 ザアカイは、急いで降りて来て、そして大喜びでイエスを迎えた。

- (1) イエスの招きは、ザアカイが予想もしなかったことである。
 - ①時間をかけて木に登ったであろう彼が、急いで降りてきた。
- (2) 大喜びでイエスを家に迎えた。
 - ①喜ぶ(カイロウ)という言葉(名詞はカラ)は、ルカの福音書で9回出て来る。
 - ②信仰と救いに関連した喜びの状態を表現する言葉である。
 - ③この時点で、ザアカイは新生した。
 - *新生は瞬間的であり、聖化はプロセスである。

2. 7節

Luk 19:7 これを見て、みなは、「あの方は罪人のところに行って客となられた」と言ってつぶやいた。

- (1) エリコの町には、イエスが泊まるのにふさわしい場所がいくつもあった。
 - ①伝統的に、エリコは祭司たちの町でもある。
- (2) しかも、イエスが選んだ場所は、罪人の家である。
 - ①ラビたちは、取税人の家には泊まらなかった。
 - ②取税人は、什一献金を捧げていない可能性が大であるとの推定があった。

3. 8節

Luk 19:8 ところがザアカイは立って、主に言った。「主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します。」

(1) ザアカイの公の宣言

- ①財産の半分を貧しい人たちに施す。
- ②だまし取った物は、4倍にして返す。

(2) これは、モーセの律法の要求以上のものである。

- ①物をだまし取った場合は、120%の返済(レビ6:5、民5:7)。
- ②家畜や物を盗んだ場合は、200%の返済(出22:4、22:7)。
- ③罪を赦されることと、弁済すべきこと、別問題である。

4. 9節

Luk 19:9 イエスは、彼に言われた。「きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。」

(1) ザアカイの変化は、彼が救われたことを証明している。

- ①ザアカイの救いは、「きょう」起こったことである。

(2) 「この人もアブラハムの子なのですから」

- ①パリサイ人たちは、アブラハムの子孫であれば神の国に入ると教えていた。
- ②しかし、取税人はその特権から外されている。
- ③ザアカイは、アブラハムの子孫であり、アブラハムの信仰に倣う者となった。
- ④ザアカイは、信仰によって救われたのである。

5. 10節

Luk 19:10 人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」

(1) これは、イエスが受肉された目的である。

結論 : 3つのコメンタリー (注解、解説、例証)

1. ルカ 18 : 17

「まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、入ることはできません。」

- (1) ザアカイの行動は子どものようである。
- (2) ザアカイの応答も、子どものようである。

2. ルカ 18 : 27

「イエスは言われた。『人にはできないことが、神にはできるのです』」

- (1) 富める若者は、宗教的な人物であった。
- (2) しかし彼は、富に支配されていた。
- (3) 金持ちが神の国に入るのは難しい。
- (4) ザアカイも金持ちであった。
- (5) しかしザアカイは、富の支配から解放された。

3. ルカ 19 : 10

「人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです」

- (1) イエスは、地上に留まるためではなく、通り過ぎるために来られた。
 - ①イエスの使命は、失われた人を捜して救うことである。
- (2) イエスは、エリコを通り過ぎた。
 - ①しかしイエスは、通り過ぎなかった。
 - ②十字架に向かっていく途上で、ザアカイの家に留まられた。
 - ③ザアカイを救うためであった。
 - ④ザアカイは、恵みの座に近づくことができない人物となっていた。
 - ⑤イエスは彼を、真の恵みの座に招かれた。
- (3) イエスは、私の前を通り過ぎなかった。
 - ①私を見上げた。
 - ②私の名を呼んだ。
 - ③私を招いた。
 - ④私が必要だと言われた。

「ミナのたとえ」

ルカ 19 : 11~28

1. はじめに

(1) 文脈の確認

① イエスは、エルサレムへの途上で、さまざまなテーマについて教えた。

② 弟子たちが乗っている文脈と、イエスが語っている文脈とが異なる。

* イエスは十字架に向かって進んでいる。

* 弟子たちの認識では、戴冠式に向かう王の行列に参加している。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 127 ザアカイの家を訪問し、「ミナのたとえ」を語り、エルサレムに向う。

ルカ 19 : 1~28

(3) § 127 の 2 区分

① 1~10 節 ザアカイの救い

② 11~28 節 ミナのたとえ

2. アウトライン

(1) たとえ話の目的 (11 節)

(2) 遠い国に行く主人 (12~14 節)

(3) 帰宅する主人 (15~27 節)

(4) エルサレムに向かうイエス (28 節)

3. 結論

(1) イエスによる弟子訓練のまとめ

(2) 私たちに委ねられているミナ

(3) キリストの御座の裁き

ミナのたとえを通して、イエスの弟子としての生き方について学ぶ。

I. たとえ話の目的 (11 節)

1. 11 節

Luk 19:11 人々がこれらのことに耳を傾けているとき、イエスは、続けて一つのたとえを話された。それは、イエスがエルサレムに近づいておられ、そのため人々は神の国がすぐにでも

現れるように思っていたからである。

(1) イエスは、神の国に関する誤解を解くために、このたとえ話を語られた。

- ① イエスがエルサレムに近づいていた。
- ② イエスは、「きょう、救いがこの家に来ました」と言われた。
- ③ 神の国とは、メシア的王国である。
- ④ 人々は、メシア的王国が近いと考えた。
- ⑤ ローマの圧政やその他の異邦人諸国の圧政からの解放への期待があった。
- ⑥ 弟子たちも、同じ期待を抱いていた。

⑦ 使 1 : 6

「そこで、彼らは、いっしょに集まったとき、イエスにこう尋ねた。『主よ。今こそ、イスラエルのために国を再興してくださるのですか』」

- ⑧ 神の国はすぐには来ないというのが、イエスの教えである。
- ⑨ では、神の国が来るまで、弟子としていかに生きるべきか。
- ⑩ 対象は、弟子たちとユダヤ人たち全般である。

II. 遠い国に行く主人 (12~14 節)

1. 12 節

Luk 19:12 それで、イエスはこう言われた。「ある身分の高い人が、遠い国に行った。王位を受けて帰るためであった。」

(1) このたとえ話には、歴史的背景があった。

- ① ヘロデは、ユダヤの王としての称号を得るためにローマに行った (前 40 年)。
 - * 彼は、ユダヤの民衆からの支持を得ていなかった。
 - * 称号を得て後、ヘロデは残虐な方法で反抗的な人々を沈黙させた。
- ② ヘロデの息子アケラオも、王になるためにローマに行った (前 4 年)。
 - * ユダヤ人の代表 50 人が反対を表明するためにローマに行った。
 - * 王となったアケラオは、忠実な者に褒賞を与え、反抗する者を殺害した。

(2) このたとえ話では、ある身分の高い人とはイエスのことである。

- ① メシアの来臨には、初臨と再臨がある。
- ② イエスは、父なる神のもとに行き、やがて王として戻って来られる。
- ③ 初臨と再臨の間で生きる弟子たちには、忠実さが要求される。

2. 13 節

Luk 19:13 彼は自分の十人のしもべを呼んで、十ミナを与え、彼らに言った。『私が帰るまで、

これで商売しなさい。』

- (1) 10人のしもべとは、イエスの弟子たちである。
 - ①再臨までの期間、ある賜物を委託されている。

- (2) 各人が、1ミナを預かった。
 - ①1ミナは、労働者100日分の賃金である。
 - ②ローマ時代、資産を持っている人は少数であった。
 - ③金利は、非常に高かった。
 - *金貸しはほとんどが裕福な個人によって行なわれていた。
 - *「トラペザ」を銀行と訳しているが、これは両替商の机のことである。
 - *当時の金利は、年率4-12%、高利の場合は24-48%であった(月率の12倍)。

- (3) 主人の意図は、それを元手に商売をして財産を増やすことであった。
 - ①財産を増やすのは、今よりもはるかに容易だった。

3. 14節

Luk 19:14 しかし、その国民たちは、彼を憎んでいたので、あとから使いをやり、『この人に、私たちの王にはなってもらいたくありません』と言った。

- (1) その国民たちとは、しもべたちとは別の人たちである。
 - ①彼らは、この身分の高い人に王になって欲しくない人たちである。

- (2) 狭義には宗教的指導者たちであり、広義にはイスラエルの民全般である。
 - ①彼らは、イエスをメシアと認めたくない人たちである。
 - ②使徒行伝では、ステパノや使徒たちが殉教の死を遂げている。

Ⅲ. 帰宅する主人 (15~27節)

1. 15節

Luk 19:15 さて、彼が王位を受けて帰って来たとき、金を与えておいたしもべたちがどんな商売をしたかを知ろうと思い、彼ら呼び出すように言いつけた。

- (1) 身分の高い人は王位を受けて帰って来た。
 - ①これは、キリストの再臨の型である。

- (2) しもべたちがどのように商売をしたかの評価が行われる。
 - ①これは、キリストの御座の裁きの型である。

2. 16～17 節

Luk 19:16 さて、最初の者が現れて言った。『ご主人さま。あなたの一ミナで、十ミナをもうけました。』

Luk 19:17 主人は彼に言った。『よくやった。良いしもべだ。あなたはほんの小さな事にも忠実だったから、十の町を支配する者になりなさい。』

(1) 最初のしもべは、1 ミナを元手にして 10 ミナをもうけた。

①彼は、おほめに与った。

②「ほんの小さな事」という言葉（役立たずのしもべですという認識）

(2) 忠実さに比例して、多くの責任が与えられた。

①10 の町を支配する者になる。

②ローマ帝国は、認定した王が独自に行政官を任命することを許可していた。

③この責任委譲は、千年王国での責任委譲の型である。

3. 18～19 節

Luk 19:18 二番目の者が来て言った。『ご主人さま。あなたの一ミナで、五ミナをもうけました。』

Luk 19:19 主人はこの者にも言った。『あなたも五つの町を治めなさい。』

(1) 2 番目のしもべは、1 ミナを元手にして 5 ミナをもうけた。

①最初のしもべと同じ原則で取り扱われた。

4. 20～21 節

Luk 19:20 もうひとりが来て言った。『ご主人さま。さあ、ここにあなたの一ミナがございません。私はふろしきに包んでしまっておきました。』

Luk 19:21 あなたは計算の細かい、きびしい方ですから、恐ろしゅうございました。あなたはお預けにならなかったものをも取り立て、お蒔きにならなかったものをも刈り取る方ですから。』

(1) 3 番目のしもべは、なにもしなかった。

①「ふろしき」とは、汗をぬぐう布のことである。ハンカチ、ナプキンなど。

②これは、主人の財産を扱う方法としては、最も危険なものである。

(2) 彼は言い訳をした。

①主人に対する侮辱的な言葉を吐いた。

②実際は、主人が戻って来るとは思わなかったのであろう。

5. 22～23 節

Luk 19:22 主人はそのしもべに言った。『悪いしもべだ。私はあなたのことばによって、あなたをさばこう。あなたは、私が預けなかったものを取り立て、蒔かなかったものを刈り取るきびしい人間だと知っていた、というのか。』

Luk 19:23 だったら、なぜ私の金を銀行に預けておかなかったのか。そうすれば私は帰って来たときに、それを利息といっしょに受け取れたはずだ。』

(1) 主人は、3番目のしもべの口実をそのまま繰り返した。

- ①それを認めたということではなく、彼の欺瞞を指摘したのである。
- ②本当にそう思っていたなら、高利貸しに預けておくべきだった。

6. 24～26 節

Luk 19:24 そして、そばに立っていた者たちに言った。『その一ミナを彼から取り上げて、十ミナ持っている人にやりなさい。』

Luk 19:25 すると彼らは、『ご主人さま。その人は十ミナも持っています』と言った。

Luk 19:26 彼は言った。『あなたがたに言うが、だれでも持っている者は、さらに与えられ、持たない者からは、持っている物までも取り上げられるのです。』

(1) その人の1ミナは、10ミナ持っている人に回される。

- ①そばに立っていた者たちは、そのことを理解することができない。

(2) 神の国の原則

- ①「持っている者は、さらに与えられ、持たない者からは、持っている物までも取り上げられる」
- ②この原則は、今も生きている。

7. 27 節

Luk 19:27 ただ、私が王になるのを望まなかったこの敵どもは、みなここに連れて来て、私の目の前で殺してしまえ。』

(1) 敵とは、イエスをメシアと信じない人たちの型である。14節の国民たち。

- ①彼らは、殺された。

(2) これは、不信仰なイスラエルがどのような裁きを受けるかを予告したものである。

- ②イエスは、紀元70年のエルサレム崩壊を予見しておられる。

IV. エルサレムに向かうイエス (28節)

1. 28節

Luk 19:28 これらのことを話した後、イエスは、さらに進んで、エルサレムへと上って行かれた。

(1) エリコからエルサレムへは、約30キロの上り道である。

①次回から、「エルサレムにおける公生涯最後の奉仕」に入る。

結論：

1. イエスによる弟子訓練のまとめ (ルカ 17:11~19:28)

(1) 癒されたツァラアト患者 (ルカ 17:11~19)

①感謝の心を示す。

(2) 懇願するやもめ (ルカ 18:1~14)

①天の父は地上の裁判官よりも恵み深い方である。

②継続した祈りは聞かれる。

(3) 子ども (ルカ 18:15~17)

①子どものように神の国を受け入れる。

(4) ザアカイ (ルカ 19:1~10)

①富の束縛から解放された。

②そうでない例は、富める若者であった (ルカ 18:18~25)。

2. 私たちに委ねられているミナ

(1) すべての信者が同じように持っている特権

①福音を伝える特権

②キリストをこの世に紹介する特権

③祈りの特権

④献金の特権

(2) 持てる者にはより多くのものが委ねられる。

3. キリストの御座の裁き

(1) 携挙の後、信者は人の子の前に立つ (ルカ 21:34~36)。

- ①これは、信者の褒章のための裁きであって、罪の裁きではない。
- ②3番目のしもべは特権が与えられなかっただけで、追い出されたわけではない。

(2) 2 コリ 5 : 10

「なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現れて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです」

- ①裁きの基準は、信者になって以降の行為である。
- ②罪の裁きではない。
「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」(ロマ 8 : 1)

(3) 1 コリ 3 : 10~15

- ①土台(キリスト)の上にどのような建物を建てたかが裁きの基準となる。
- ②神の御心に沿った働きは、金、銀、宝石である。
- ③告白されていない罪を持った生活は、木、草、わらである。
- ④各人の働きは、火で試される。
- ⑤木、草、わらなどは燃えて灰になる。
- ⑥金、銀、宝石は精錬され、より純化される。

「勝利の入城」

ルカ 19 : 29～44

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① イエスの公生涯は、3年半続いた。
- ② ついにイエスは、メシアとしてエルサレムに入城される。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 128a ベタニヤに到着 (ヨハ 11 : 55～12 : 1, 9～11)

§ 128b 勝利の入城 (ルカ 19 : 29～44)

(3) ベタニヤに到着

- ① マルタ、マリア、ラザロの家がある。イエスはそこに滞在された。
 - * 過越の祭りの間、エルサレムの町の周辺にテント村が作られた。
- ② ベタニヤからエルサレムまでは徒歩で行ける距離である。
 - * その途中に、ベテパゲがある。
- ③ この時点で、祭司長と律法学者たちは、イエスを殺そうとしていた。
- ④ それは、一般民衆にも広く知れ渡っていた。
- ⑤ 祭司長と律法学者たちは、イエスを見た者は報告せよとの命令を出していた。
- ⑥ イエスがベタニヤに着いたとの噂が流れ、大ぜいのユダヤ人がやって来た。
- ⑦ イエスだけでなく、ラザロを見るためでもあった。
- ⑧ 祭司長たちは、ラザロも殺そうと相談した。

2. アウトライン

- (1) 入城の準備 (29～35 節)
- (2) 人々の歓迎 (36～38 節)
- (3) パリサイ人たちの抗議 (39～40 節)
- (4) イエスの嘆き (41～44 節)

3. 結論

- (1) 勝利の入城と過越の祭り
- (2) 勝利の入城と仮庵の祭り
- (3) 勝利の入城とイエスの感情

勝利の入城の意味について学ぶ。

I. 入城の準備 (29～35 節)

1. 29～31 節

Luk 19:29 オリーブという山のふもとのベテパゲとベタニヤに近づかれたとき、イエスはふたりの弟子を使いに出して、

Luk 19:30 言われた。「向こうの村に行きなさい。そこに入ると、まだだれも乗ったことのない、ろばの子が見つからないのに気がつくでしょう。それをほどいて連れて来なさい。

Luk 19:31 もし、『なぜ、ほどくのか』と尋ねる人があったら、こう言いなさい。『主がお入用なのです。』

(1) 「勝利の入城」と呼ばれるが、実態はそうではない。

①民衆は、メシア的王国の設立を期待していた。

②イエスは、十字架に向かっておられた。

(2) ベテパゲとベタニヤからは、エルサレムは目前にある。

①イエスが弟子を派遣する時は、ふたり一組が多い。

(3) イエスは、ろばを必要とされた。

①ゼカ9:9の預言の成就である。

「シオンの娘よ。大いに喜べ。エルサレムの娘よ。喜び叫べ。見よ。あなたの王があなたのところに来られる。この方は正しい方で、救いを賜り、柔和で、ろばに乗られる。それも、雌ろばの子の子ろばに」(ゼカ9:9)

②ろばは、祭司、貴族、平和の使者たちの乗り物である。

③王の乗り物は、馬である。

④イエスは、平和の君としてエルサレムに入城される。

(4) 所有者たちとは、あらかじめ打ち合わせができていたのであろう。

①「主がお入り用なのです」という言葉がすべてを解決する。

2. 32～34 節

Luk 19:32 使いに出されたふたりが行って見ると、イエスが話されたとおりであった。

Luk 19:33 彼らがろばの子をほどいていると、その持ち主が、「なぜ、このろばの子をほどくのか」と彼らに言った。

Luk 19:34 弟子たちは、「主がお入り用なのです」と言った。

(1) イエスが話された通りのことが起こった。

①所有者は、複数形である。「所有者たち」である。

- ②彼らが、ろばと、ろばの子を大切にしていたことが分かる。
- ③メシアに自分たちの持ち物を提供できるのは、特権である。

(2) イエスの貧しさは、読者に好印象を与えた。

- ①当時の人たちの大半が、初代教会の信者も含めて、非常に貧しかった。
- ②ろばの子を借りなければ入城できないメシアに、親近感を覚えたことであろう。

3. 35 節

Luk 19:35 **そしてふたりは、それをイエスのもとに連れて来た。そして、そのろばの子の上に自分たちの上着を敷いて、イエスをお乗せした。**

(1) ろばの子の上に上着を敷くのは、鞍を作るためである。

(例話) ベエル・シェバのベドウィンテントでの体験

(2) **マタ 21 : 7**

「そして、ろばと、ろばの子とを連れて来て、自分たちの上着をその上に掛けた。イエスはそれに乗られた」

- ①母親がろばの子のそばを歩いた。
- ②弟子たちは、ろばと子の両方に上着を掛けた。
- ③イエスは、両方に乗られたのであろう。交互に乗られたのであろう。
- ④ろばの子が暴れないのは、小さな奇跡である。

II. 人々の歓迎 (36~38 節)

1. 36 節

Luk 19:36 **イエスが進んで行かれると、人々は道に自分たちの上着を敷いた。**

(1) オリーブ山の西側をエルサレムに向かって下って行かれる。

①下り切った所が、ケデロンの谷である。

(2) 道に上着を敷くのは、王に対する表敬である。

「すると、彼らは大急ぎで、みな自分の上着を脱ぎ、入口の階段の彼の足もとに敷き、角笛を吹き鳴らして、『エフーは王である』と言った」 (2列9:13)

①ニムシの子ヨシャパテの子エフーは、ヨラムに対して謀反を起こした。

2. 37~38 節

Luk 19:37 **イエスがすでにオリーブ山のふもとに近づかれたとき、弟子たちの群れはみな、**

自分たちの見たすべての力あるわざのことで、喜んで大声に神を賛美し始め、
Luk 19:38 こう言った。／「祝福あれ。／主の御名によって来られる王に。／天には平和。
／栄光は、いと高き所に。」

- (1) 弟子たちの群れが叫んだ。
 - ①彼らは、多くの奇跡を目撃してきた。
 - ②そのことのゆえに、大声で神を賛美し始めた。
 - ③およそ1年前のガリラヤで、イエスを王にする試みは失敗していた。
 - ④今こそイエスは、メシアとして自分を表し、メシア的王国を建設される。

(2) 賛美の内容

「祝福あれ。主の御名によって来られる王に。天には平和。栄光は、いと高き所に」

- ①「主の御名によって来られる王」とは、メシアのことである。

「【主】の御名によって来る人に、祝福があるように。私たちは【主】の家から、あなたがたを祝福した」(詩 118 : 26)
- ②ルカ 2 : 14 との対比

「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように」(ルカ 2 : 14)

 - *ここでは、「地の上に」という部分が書かれていない。
 - *その成就是、まだ先のことである。
- ③以上のことは、通常の巡礼者を歓迎する内容ではない。
 - *パリサイ人たちは、危機感を覚えた。

Ⅲ. パリサイ人たちの抗議 (39～40 節)

1. 39 節

Luk 19:39 するとパリサイ人のうちのある者たちが、群衆の中から、イエスに向かって、「先生。お弟子たちをしかってください」と言った。

- (1) パリサイ人たちは、何が起きているかを理解した。
 - ①イエスは、自分自身をメシアとして公にしている。
 - ②弟子たちは、メシアを歓迎する聖句を引用して、大声で叫んでいる。
 - ③人々も、イエスをメシアとして歓迎している。
- (2) パリサイ人たちはすでにイエスのメシア性を拒否していた。
 - ①弟子たちを叱って黙らせるように、イエスに要請した。

2. 40節

Luk 19:40 イエスは答えて言われた。「わたしは、あなたがたに言います。もしこの人たちが黙れば、石が叫びます。」

(1) イエスは、弟子たちを叱らなかった。

①これまでは、「今見たことを言うてはならない」という命令があった。

(2) 人間が黙ったとしても、無生物である石が叫び出すことであろう。

①石とは、どんな石でもよい。

②特にここでは、城壁の石、あるいは神殿の石を指すと思われる。

IV. イエスの嘆き (41～44節)

1. 41～42

Luk 19:41 エルサレムに近くなったころ、都を見られたイエスは、その都のために泣いて、

Luk 19:42 言われた。「おまえも、もし、この日のうちに、平和のことを知っていたのなら。

しかし今は、そのことがおまえの目から隠されている。

(1) イエスはエルサレムを見て、泣かれた。

①外面的繁栄と内面的腐敗(不信仰)の対比

(2) ルカ 19:42 の訳文の比較

「おまえも、もし、この日のうちに、平和のことを知っていたのなら。しかし今は、そのことがおまえの目から隠されている」(新改訳)

「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら……。しかし今は、それがお前には見えない」(新共同訳)

「もしおまえも、この日に、平和をもたらす道を知ってさえいたら……。しかし、それは今おまえの目に隠されている」(口語訳)

「永遠の平和が、すぐ手の届くところにあったのに、あなたはそれをはねつけてしまいました。もう遅すぎます」(リビングバイブル)

①「平和への道」とは、イエスをメシアとして信じる道である。

②しかし、ユダヤ人たちの霊的目が盲目となっていた。

③エルサレムがイエスを拒否したので、イエスもエルサレムを拒否される。

2. 43～44節

Luk 19:43 やがておまえの敵が、おまえに対して壘を築き、回りを取り巻き、四方から攻め寄せ、

Luk 19:44 **そしておまえと其中的子どもたちを地にたたきつけ、おまえの中で、一つの石もほかの石の上に積まれたままでは残されない日が、やって来る。それはおまえが、神の訪れの時を知らなかったからだ。」**

- (1) 紀元70年に起こることの預言である。
 - ①敵がエルサレムに対して壘を築き、回りを取り巻き、四方から攻め寄せる。
 - ②エルサレムの住民を虐殺する。
 - ③エルサレムは完全に崩壊する。

- (2) その理由は、「神の訪れの時を知らなかったから」である。
 - ①イエスは救いのメッセージを持ってエルサレムを訪れた。
 - ②神の民は、それを歓迎しなかった。
 - ③彼らは、自分たちの考え方や願いを優先させた。

結論：

1. 勝利の入城と過越の祭り

(1) 出12:3~7

Exo 12:3 **イスラエルの全会衆に告げて言え。この月の十日に、おのおのその父祖の家ごとに、羊一頭を、すなわち、家族ごとに羊一頭を用意しなさい。**

Exo 12:4 **もし家族が羊一頭の方より少ないなら、その人はその家のすぐ隣の人と、人数に応じて一頭を取り、めいめいが食べる分量に応じて、その羊を分けなければならない。**

Exo 12:5 **あなたがたの羊は傷のない一歳の雄でなければならない。それを子羊かやぎのうちから取らなければならない。**

Exo 12:6 **あなたがたはこの月の十四日までそれをよく見守る。そしてイスラエルの民の全集会は集まって、夕暮れにそれをほふり、**

Exo 12:7 **その血を取り、羊を食べる家々の二本の門柱と、かもいに、それをつける。**

- ①ニサンの月の10日に、家ごとに羊一頭を用意する。
- ②その羊は、傷のない一歳の雄でなければならない。
- ③それを小羊かやぎのうちから取る。
- ④傷がないかどうか、ニサンの月の14日まで見守る。
- ⑤夕暮れにそれをほふる(午後3時~5時)。
- ⑥その血を、二本の門柱と、かもいに塗る。
- ⑦日没後(ニサンの月の15日)に、その肉を食べる。

- (2) 勝利の入城は、過越の小羊の選り分けである。

- ①ニサンの月の10日。紀元30年4月2日。
- ②それから4日間、神の子羊イエスは吟味を受け、傷がないことが証明される。
 - *パリサイ人たち
 - *サドカイ人たち
 - *律法学者たち
 - *ヘロデ党の者たち

2. 勝利の入城と仮庵の祭り

(1) 過越の祭りは春の祭り、仮庵の祭りは秋の祭りである。

(2) ヨハ12:12~13

「その翌日、祭りに来ていた大ぜいの人の群れは、イエスがエルサレムに来ようとしておられると聞いて、しゅろの木の枝を取って、出迎えるために出て行った。そして大声で叫んだ。『ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。イスラエルの王に。』」

- ①しゅろの木の枝を用いるのは、仮庵の祭りである。
- ②人々は、メシアの到来は仮庵の祭りの成就であるという理解を持っていた。
- ③この言葉は、詩118:22~27の成就である。
- ④ラビたちは、この言葉はメシアを正式にお迎えする際の言葉であると教えた。
- ⑤ペテロも、同じ誤解をしていた(変貌山の出来事)。

(3) マタ21:9

「そして、群衆は、イエスの前を行く者も、あとに従う者も、こう言って叫んでいた。『ダビデの子にホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。ホサナ。いと高き所に。』」

- ①「ホサナ」とは、「私たちを救ってください」という意味である。
- ②「ホシャナ」(ヘブル語)、「ホザンナ」(ギリシア語)
- ③ユダヤ教では、仮庵の祭りにおいて「ホシャナ」の祈りを祈る。
- (4) 以上のことから、人々はメシア的王国の出現を期待していたことが分かる。

3. 勝利の入城とイエスの感情

(1) イエスは、弟子たちの「ホシャナ」の祈りを受け入れた。

- ①イエスは、弟子たちを黙らせなかった。
- ②このような賛美と叫びの声は、歴史の必然である。
- ③イエスがエルサレムに入城された日は、特別な日である。
- ④創3:15の「女の子孫」の約束以来、歴史はこの日に向かって進んできた。
- ⑤イエスの誕生も、バプテスマのヨハネ以来の公生涯も、すべてこの日のために

あった。

(2) イエスはエルサレムを見て泣かれた。

①泣くとは、「クライオウ」という動詞

②大粒の涙と泣き声

③エルサレムが、「神の訪れの時を知らなかったから」である。

④「メシアの生涯」151回目。特別な回である。

⑤イエスは、日本をどう見ておられるのか。

⑥イエスは、私をどう見ておられるのか。

「いちじくの木のかい、神殿の清め」

マコ 11 : 12~18

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① イエスは、メシアとしてエルサレムに入城された。
- ② それは、ニサンの月の10日。紀元30年4月2日。日曜日であった。
- ③ きょうの箇所は、その翌日である。ニサンの月の11日。月曜日である。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 129 呪われたいちじくの木と神殿の清め

マコ 11 : 12~18、マタ 21 : 18、19、12、13、ルカ 19 : 45~48

(3) 予備知識

- ① この箇所は、イエスの「短気と怒り」を教えているのではない。
- ② この箇所は、サンドイッチ構造になっている。
 - * イエスは、いちじくの木を呪う (マコ 11 : 12~14)。
 - * イエスは、神殿を清める (マコ 11 : 15~18)。
 - * 翌日、いちじくの木が枯れている (マコ 11 : 19~25)。

2. アウトライン

- (1) いちじくの木のかい (12~14 節)
- (2) 神殿の清め (15~18 節)

3. 結論

- (1) ある質問への回答
- (2) 4種類の神殿
- (3) 教会時代の神殿

呪われたいちじくの木の意味について学ぶ。

I. いちじくの木のかい (12~14 節)

1. 12 節

Mar 11:12 翌日、彼らがベタニヤを出たとき、イエスは空腹を覚えられた。

- (1) 翌日とは、月曜日の朝のことである。

- ①前の日に、イエスは民衆からの歓迎を受けてエルサレムに入城した。
- ②この箇所は、その歓迎に対するイエスの応答である。

(2) 前日イエスは、エルサレムからベタニヤに戻っておられた。

- ①ベタニヤから徒歩でエルサレムに向かっている。
- ②空腹を覚えたのは、イエスの人間性を示している。
 - *神としての力と権威を示された日に、空腹を覚えたのである。
 - *御子イエスの犠牲を感じ取ることのできる箇所である。
- ③恐らくイエスは、屋外に留まり、断食の祈りをしておられたのであろう。

2. 13節

**Mar 11:13 葉の茂ったいちじくの木が遠くに見えたので、それに何かありはしないかと思
行かれたが、そこに来ると、葉のほかは何もないのに気づかれた。いちじくのなる季節ではな
かったからである。**

(1) イスラエルでは、いちじくの木はよく見かける木である。

- ①3月に、緑の実(つぼみ)を付ける。
 - *これは食用で、農夫がよく食べていた。
- ②4月に、葉を茂らせる。
 - *過越の祭りは、3月～4月である。
- ③5月末～6月、いちじくの実がなる。収穫の終わりは、8月末である。
 - *その前に、つぼみは落ちる。
 - *食用のつぼみが付かない年は、実もならない。

(2) このいちじくの木は、遠くから見ても分かるほど葉を茂らせていた。

- ①いちじくのなる季節ではないので、実がないのは当然である。
- ②イエスが期待したのは、緑の実である。

(3) このいちじくの木は、イエスと同時代のイスラエルの民の象徴である。

- ①外面は繁栄しているが、内面は実を付けていない。
- ②イスラエルの民の特徴は、宗教的偽善である。
- ③イエスによる宮清めは、宗教的偽善の裁きである。

3. 14節

**Mar 11:14 イエスは、その木に向かって言われた。「今後、いつまでも、だれもおまえの実を
食べることはないように。」弟子たちはこれを聞いていた。**

- (1) イエスのことばは、その木に対するかいである。
 - ①ペテロは、「あなたがのろわれたいちじくの木」(21節)と言っている。
 - ②これは、エルサレムに下る裁きについての預言的行為である。

- (2) イエスがかいのことばを口にするのは、不可解なことか。
 - ①イエスが超自然の力を用いてかいしているのは、この箇所だけである。
 - ②イエスは、一本の木を例話として用いて弟子訓練をしておられる。
 - *神は、外面と内面がかい離している宗教的欺瞞を憎まれる。
 - *神の怒りの証明が、神殿の清め(宮清め)である。

II. 神殿の清め(15~18節)

1. 15節 a

Mar 11:15 それから、彼らはエルサレムに着いた。

- (1) 神殿の清めは、3つの福音書(共観福音書)すべてに記録されている。
 - ①これは、イエスの公生涯の最後に起こった出来事である。

- (2) ヨハネの福音書には、もうひとつの神殿の清めが記録されている
 - ①ヨハ2:13~22
 - ②これは、イエスの公生涯の最初に起こった出来事である。

2. 15b~16節

イエスは宮に入り、宮の中で売り買いしている人々を追い出し始め、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒し、

Mar 11:16 また宮を通り抜けて器具を運ぶことをだれにもお許しにならなかった。

- (1) 神殿の構造
 - ①聖所(至聖所と聖所)
 - ②イスラエルの庭、婦人の庭
 - ③異邦人の庭(②と③の間に隔ての壁が立っていた)。

- (2) 異邦人の庭で、商売人たちが商売をしていた。
 - ①大祭司カヤパが営業を許可した(カヤパのバザールと呼ばれていた)。
 - ②実際は、カヤパー家の富につながっていた。

- (3) 両替人

- ①ローマの銀貨
- ②ギリシアの銀貨
- ③ツロで鑄造された銀貨

*神殿で半シェケル払う場合に、③を使用する。

*半シェケルは、20歳以上の男子が毎年支払う額である(出30:12~16)。

*その支払いのために、①と②を③に両替する。

(4) その他の商売人

- ①神殿の礼拝に必要なものを売っていた。

*ぶどう酒、オリーブ油、塩、いけにえの動物や鳥

- ②両替もこれらの商品の販売も、あざむきと搾取の温床となった。

(5) 神殿は通り抜けの通路になっていた。

- ①町からオリーブ山に行くのに、神殿を横切ってはならないという規則があった。

- ②人々はそれを無視して、器に入った物を持って移動していた。

- ③まさに、渋谷のスクランブル交差点のような状態であった。

(6) 公生涯の最後に、イエスは再度宮清めを行われた。

3. 17節

Mar 11:17 **そして、彼らに教えて言われた。『わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる』と書いてあるではありませんか。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしたのです。』**

- (1) イエスは、神殿がどのような目的のためにあるのかを教えた。

- ①人々の注目を集めた上で、教えた。

- ②聖句を2つ引用している。

(2) **イザ 56:7**

「わたしは彼らを、わたしの聖なる山に連れて行き、わたしの祈りの家で彼らを楽しませる。彼らの全焼のいけにえやその他のいけにえは、わたしの祭壇の上で受け入れられる。わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれるからだ」

- ①千年王国での状況の預言

- ②神殿は祈りの家である。

- ③「すべての民の」とあるのは、マコだけである。

*マタ 21:13、ルカ 19:46には、それが書かれていない。

*マルコの福音書の読者は、異邦人である。

(3) エレ7:11

「わたしの名がつけられているこの家は、あなたがたの目には強盗の巣と見えたのか。そうだ。わたしにも、そう見えていた。——【主】の御告げ——」

①南王国ユダの人々は、神殿があるからエルサレムは安全だと考えていた。

②イエスと同時代のユダヤ人たちも、同じ罪を犯している。

*彼らは、神殿を強盗の巣にした。

*それでも、神殿に逃げ込めば安心だと考えていた。

4. 18節

Mar 11:18 祭司長、律法学者たちは聞いて、どのようにしてイエスを殺そうかと相談した。イエスを恐れたからであった。なぜなら、群衆がみなイエスの教えに驚嘆していたからである。

(1) 指導者たちは、イエスの暗殺法を相談した。

①イエスを恐れたからである。

(2) 民衆の暴動が起こらないように細心の注意を払う必要がある。

①民衆は、イエスの教えを聞いて感動していた。

②指導者たちの地位はローマによって保障されていた。

③暴動が起これば、ローマから特権を剥奪される危険性がある。

結論：

1. ある質問への回答

「ある牧師が、クリスチャンでない人の内にも聖霊がおられると教えています。イエス・キリストが十字架ですべての御業を成し遂げられて以降は『終わりの日』と呼ばれている時代であって、その贖いの時点から、聖霊は『すべての人』に注がれているのだ、と解釈されているようです。主な引用聖句の一つは、ヨエル書の2章28節です。それから自分なりに、聖霊の内住に焦点を合わせて聖書を読み、学んできていますが、やはりその解釈にはまったく同意ができません。どう考えたらよいのか、お教えてください」

(1) ヨエ2:28

「その後、わたしは、わたしの霊をすべての人に注ぐ。あなたがたの息子や娘は預言し、年寄りも夢を見、若い男は幻を見る」

(2) 使2:16~17

「これは、預言者ヨエルによって語られた事です。『神は言われる。終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る』」

(3) 解説

- ①ヨエ2:28は、大患難時代の終わりにイスラエルに起こることの預言である。
- ②イスラエルは悔い改め、救いに至る。
- ③ペンテコステで、その預言の一部が成就した。
- ④しかし、「すべての人に注ぐ」という部分は、まだ成就していない。
- ⑤これは、クリスチャンでない人に何が起こるかを預言したものではない。
- ⑥不信者にも聖霊が内住するという教えは、聖書的ではない。
 - *私たちから伝道の意欲を奪い去る。
 - *やがて、普遍的救いの教理に道を開くようになる。

2. 4種類の神殿

はじめに

- ①エデンの園では神殿は不要であった。
- ②アダムとエバは、シャカイナグローリーとともに住んだ。
- ③アダムとエバは、墮落後、園から追放された。
- ④ノアの洪水によって、エデンの園は滅びた。
- ⑤地上に神が臨在される場所がなくなった。

(1) ソロモンの神殿 (第一神殿)

- ①出エジプトの時代、荒野で幕屋建設の命令が下った。
- ②神は、幕屋の至聖所の中に臨在を現すと約束された。
- ③幕屋と同じ形状のものが、ソロモンの時代に神殿として建設された。
- ④シャカイナグローリーが至聖所にとどまった。
- ⑤偶像礼拝のゆえに、シャカイナグローリーが去った (エゼキエルの時代)。

(2) ゼルバベルの神殿 (第二神殿)

- ①バビロン捕囚から帰還後に、建設された。
- ②この神殿には、契約の箱もシャカイナグローリーもない。
- ③後に、ヘロデ大王が拡張した。
- ④イエス時代の神殿は、ヘロデ大王が拡張した神殿である。

(3) 大患難時代の神殿 (第三神殿)

- ①大患難時代の前に建つのか、前半の3年半の間に建つのかは分からない。
- ②大患難時代の中に、反キリストの像が置かれ、その礼拝が強要される。

(4) 千年王国の神殿 (第四神殿)

- ①シャカイナグローリーが戻ってくる。
- ②キリストの犠牲を記念するために、いけにえが再び捧げられる。

おわりに

- ①神殿は、神が人間とともにおられることのしるしとなった。
- ②神殿は、人が神を礼拝し、神と交流する場となった。
- ③イエスは、神殿を所有し、その上に権威を持っておられる。
*公生涯の最初と最後に、それを啓示された。
- ④新天新地においては、神殿は不要となる。
*そこは、シャカイナグローリーが満ちている場所である。

3. 教会時代の神殿

(1) 1 コリ 6 : 19

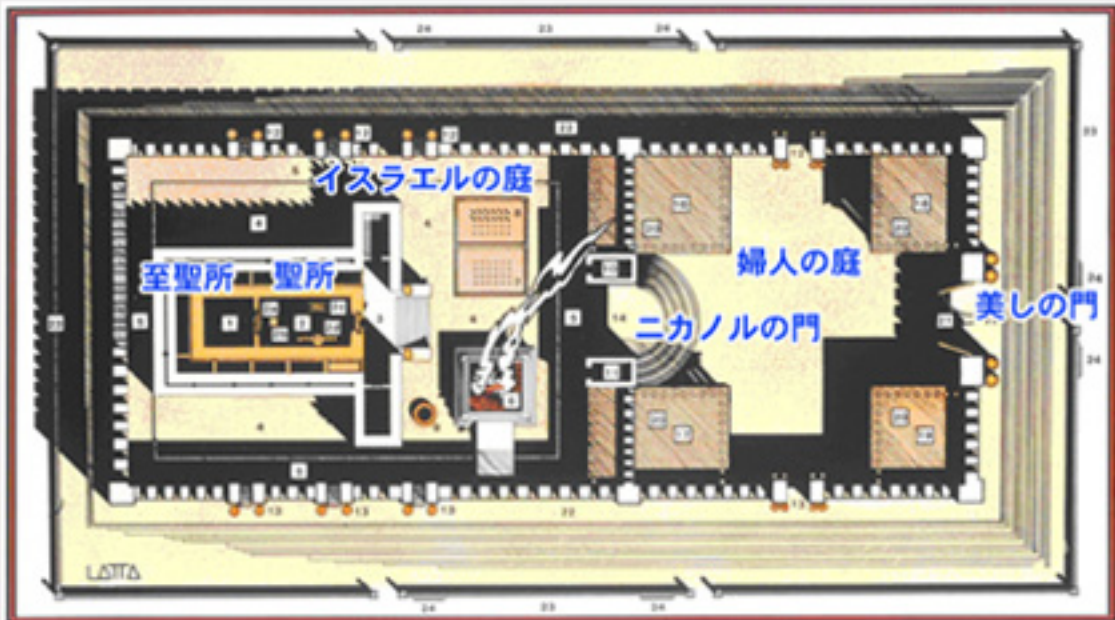
「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか」

- ①信者の内には、聖霊が宿って下さっている。
- ②信者の体は、神殿である。
- ③信者の体は、もはやその人のものではない (贖われた)。
- ④ロマ 5 : 5、8 : 9、11、1 コリ 2 : 12、ガラ 3 : 2、4 : 6、1 ヨハ 3 : 24、4 : 13

(2) エペ 2 : 21

「この方であって、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、このキリストにあって、あなたがたもともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです」

- ①教会もまた、神殿である。
- ②ユダヤ人信者と異邦人信者を含む集合体としての教会である。
- ③1 コリ 3 : 16、2 コリ 6 : 16



「一粒の麦」

ヨハ 12 : 20~36

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① イエスは、メシアとしてエルサレムに入城された。
- ② それは、ニサンの月の10日。紀元30年4月2日。日曜日であった。
- ③ 月曜日に、いちじくの木のかげと、宮清めがあった。
- ④ きょうの箇所もまた、ニサンの月の11日(月)の出来事である。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 130 イエスに会うことを願ったギリシア人たち

ヨハ 12 : 20~50

- ① 一粒の麦の話 (20~36 節)
- ② ヨハネによるイエスの公生涯のまとめ (37~50 節)

*今回は、①を取り上げる。

2. アウトライン

- (1) 幾人かのギリシア人の願い (20~22 節)
- (2) イエスの回答 (23~26 節)
- (3) イエスの祈り (27~29 節)
- (4) イエスと群衆の対話 (30~36 節)

3. 結論

- (1) ギリシア人たちが自分からイエスのところに行かなかったのはなぜか。
- (2) 天からの声とは何か。

「一粒の麦のたとえ」から、教訓を学ぶ。

I. 幾人かのギリシア人の願い (20~22 節)

1. 20 節

Joh 12:20 さて、祭りのとき礼拝のために上って来た人々の中に、ギリシヤ人が幾人かいた。

- (1) 過越の祭りは、3大巡礼祭の一つである。
 - ① ユダヤ人の男性は、エルサレムに上ってこの祭りを祝うように命じられている。
- (2) ここでのギリシア人の登場には、大いに意味がある。

- ①ギリシア人は、古代世界での放浪者、真理の探究者である。
- ②ここに登場するのは、ユダヤ教に改宗したギリシヤ人(異邦人)たちである。
- ③彼らは、キリストを通して神を礼拝するようになる異邦人の象徴である。

2. 21～22節

Joh 12:21 この人たちがガリラヤのベツサイダの人であるピリポのところに来て、「先生。イエスにお目にかかりたいのですが」と言って頼んだ。

Joh 12:22 ピリポは行ってアンデレに話し、アンデレとピリポとは行って、イエスに話した。

(1) そのギリシヤ人たちが、イエスとの面会を希望した。

- ①彼らは、ピリポに仲介を依頼した。
- ②ピリポを「先生(ご主人)」と呼んでいる。非常に丁寧にいぬいな言い方である。
- ③ピリポはベツサイダ出身で、ギリシア名を持つ唯一の使徒である。
- ④「イエスにお目にかかりたいのですが」

*「君よ、われらイエスに謁(まみ)えんことを願ふ」(文語訳)

*彼らの言葉は、単刀直入で明快である。

(例話) 講壇の前に、このみことばが置かれている教会

(2) ピリポはアンデレに相談し、2人でイエスのもとに行った。

- ①ピリポは、不安だったのだろう。
 - *これまでイエスは、異邦人伝道に消極的であった。
- ②それで、話し易いアンデレに相談したのであろう。
 - *仲介を頼まれることは、うんざりするほどあったと思われる。
- ③しかし、この情報によってイエスは十字架の時が近いことを実感するのである。

II. イエスの回答(23～26節)

1. 23～24節

Joh 12:23 すると、イエスは彼らに答えて言われた。「人の子が栄光を受けるその時が来ました。」

Joh 12:24 まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのみこです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。

(1) イエスは、その申し出には答えていないように見えるが、そうではない。

- ①イエスは、「死と復活のプログラム」について預言的に語っている。
- ②そうすることで、より深いレベルでギリシヤ人たちの願いに答えている。

(2) 「人の子が栄光を受けるその時が来ました」

- ① 「栄光を受ける時」とは、十字架の時である。
- ② 異邦人の来訪によって、イエスは明確に死の時が来たことを認識した。
- ③ 恐らくギリシア人たちは、イエスに逃れの道を提供しようとしたのであろう。
- ④ ほとんどの人たちにとって、死とは屈辱の体験である。
- ⑤ イエスにとっては、十字架の死は栄光に至る門である。
* 父なる神に従順であることが、栄光に至る条件である。

(3) 「まことに、まことに、あなたがたに告げます」

- ① 厳粛な教えや宣言の前に言う定型句である。
- ② 「アーメン、アーメン」

(4) 一粒の麦のたとえ

- ① 一粒の麦が地に落ちてしななければ、それは一粒のままで残る。
- ② もし死ねば、豊かな実を結ぶ。
- ③ もしイエスが死ななければ、彼一人が栄光の座に着く。
- ④ 死ねば、その死と復活を通して、多くの新しいいのちが生まれるようになる。
- ⑤ その中には、異邦人信者も多く含まれている。

2. 25～26 節

Joh 12:25 自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです。

Joh 12:26 わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいる所に、わたしに仕える者もいるべきです。もしわたしに仕えるなら、父はその人に報いてくださいます。

(1) 一粒の麦から導き出される一般原則

- ① ユダヤ的には、「愛する」「憎む」とは、優先順位の問題である。
- ② 多くの人たちは、自己中心的な人生を送っている。
- ③ その結果、霊的いのちを失っている。
- ④ しかし、霊的いのちを優先させる者は、永遠のいのちに至る。

(2) 弟子たちへの適用

- ① 霊的いのちを優先させるとは、主イエスに仕えることである。
- ② イエスに従って自己犠牲の道を歩む者に祝福が約束されている。
- ③ これは、より豊かな実をつけるために自我に死ぬという原則である。

*伝道の実

*人格の実

- ④父なる神は、そのような人に報いてくださる。(今も、永遠に至るまで)
- ⑤しかし、自己犠牲の道は、容易なことではない。
- ⑥イエスは次の祈りによって、ご自身の心の中を見せる。

Ⅲ. イエスの祈り (27～29 節)

1. 27～28 節 a

Joh 12:27 今わたしの心は騒いでいる。何と言おうか。『父よ。この時からわたしをお救いください』と言おうか。いや。このためにこそ、わたしはこの時に至ったのです。

Joh 12:28 父よ。御名の栄光を現してください。」

(1) 父なる神への祈り

- ①イエスの心は騒いでいる。
 - *罪人として処刑されようとしている。
- ②自然な思いとしては、苦難と辱めの死を避けたい。
- ③しかし、「父よ。この時からわたしをお救いください」とは言わない。
- ④イエスは、父なる神の御心をよく知っている。
- ⑤「いや。このためにこそ、わたしはこの時に至ったのです」
 - *このことばは、メシアとしてのイエスの確信を表したものである。
- ⑥「父よ。御名の栄光を現してください」と祈られた。

(2) 私たちへの適用

- ①感情的には心が騒いでいても、神の御名が崇められることを求める。
- ②そのような対応が可能になるためには、みことばを心に蓄えておく必要がある。

2. 28b～29 節

そのとき、天から声が聞こえた。「わたしは栄光をすでに現したし、またもう一度栄光を現そう。」

Joh 12:29 そばに立っていてそれを聞いた群衆は、雷が鳴ったのだと言った。ほかの人々は、「御使いがあの方に話したのだ」と言った。

(1) 祈りに対して、父なる神からの答えが返ってきた。

- ①「わたしは栄光をすでに現したし、」
 - *イエスの地上生涯において、神の栄光は現れた。
 - *30年のナザレでの隠れた生活

*3年半にわたる公生涯

*イエスが行った種々の癒しと奇跡

②「またもう一度栄光を現そう」

*死、埋葬、復活、昇天を通して、さらに大いなる栄光が現れる。

(2) そばに立っていた群衆の反応

①雷が鳴った。

②天使が話した。

IV. イエスと群衆の対話 (30～36 節)

1. 30～33 節

Joh 12:30 イエスは答えて言われた。「この声が聞こえたのは、わたしのためにではなくて、あなたがたのためにです。」

Joh 12:31 今がこの世のさばきです。今、この世を支配する者は追い出されるのです。

Joh 12:32 わたしが地上から上げられるなら、わたしはすべての人を自分のところに引き寄せます。」

Joh 12:33 イエスは自分がどのような死に方で死ぬかを示して、このことを言われたのである。

(1) イエスの招きのことば

①天からの声が聞こえたのは、その場にいた群衆のためである。

②イエス自身は、その声を聞かなくてもよかった。

(2) 「今がこの世のさばきです」

①この世は、イエスのメシア性を拒否し、イエスを十字架につけようとしている。

②その不信仰のゆえに、この世は裁かれる。

(3) 「今、この世を支配する者は追い出されるのです」

①サタンは、イエスの十字架の死で自分は勝利したと思った。

②しかし、イエスの死は人類の救いとサタンに対する勝利をもたらした。

③サタンは不法な侵入者であり、支配者である。

④サタンはその権威を失う。

*判決は確定したが、その執行はまだ途上にある。

*最終的には、火の池に投げ込まれる (黙 20 : 10)。

(4)「わたしが地上から上げられるなら、わたしはすべての人を自分のところに引き寄せます」

①「地上から上げられる」とは、十字架の死のことである(イザ52:13参照)。

*イエスは、ご自分がどのような死に方をするか知っていた。

②その後、すべての人がイエスのもとに引き寄せられる。

*これは、普遍的救いを説いたものではない。

*これは、すべての民族に救いが提供されるという意味である。

③これは、ギリシヤ人の願いに対する回答である。

*十字架よって、民族的区別なくイエスのもとに近づけるようになる。

2. 34節

Joh 12:34 そこで、群衆はイエスに答えた。「私たちは、律法で、キリストはいつまでも生きておられると聞きましたが、どうしてあなたは、人の子は上げられなければならない、と言われるのですか。その人の子とはだれですか。」

(1) 群衆にはイエスの語った内容が理解できない。

①彼らは、メシアは死なないと教えられていた(イザ9:6~7、ダニ7:14)。

②もしイエスがメシアなら、なぜメシアが死ぬのか。

③彼らは、メシアの初臨と再臨を区別していなかったのである。

3. 35~36節

Joh 12:35 イエスは彼らに言われた。「まだしばらくの間、光はあなたがたの間にあります。やみがあなたがたを襲うことのないように、あなたがたは、光がある間に歩きなさい。やみの中を歩く者は、自分がどこに行くのかわかりません。

Joh 12:36 あなたがたに光がある間に、光の子どもとなるために、光を信じなさい。」／イエスは、これらのことをお話しになると、立ち去って、彼らから身を隠された。

(1) 群衆は、イエスの語っていることは知的に難解であると言った。

①今も、多くの人たちが同じように不満を口にする。

(2) イエスは、問題は倫理的、道徳的なものであると教える。

①光と闇のテーマが繰り返される。

②イエスは光である。

③その光が間もなく消え、闇が襲おうとしている。

④光のある間に、光の子どもとなるために、光を信じなければならない。

⑤いつでも決断できると考えるのは、愚かなことである。

⑥今は「恵みの時、救いの時」である。

結論：

1. ギリシア人たちが自分からイエスのところに行かなかったのはなぜか。

- (1) 行けなかったのである。
- (2) ギリシア人が入れるのは、異邦人の庭までであった。
- (3) その先に、婦人の庭、イスラエルの庭があった。
- (4) 異邦人の庭とその先の庭の間には、隔ての壁が置かれていた。
*それを超えて行くことは、死罪に当たる。
- (5) エペ2:14~16

Eph 2:14 キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、

Eph 2:15 ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、

Eph 2:16 また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。

- ①十字架によって、隔ての壁はうちこわされた。
- ②その結果、ユダヤ人と異邦人は「新しいひとりの人」となった。
- ③両者は、同じ原則によって、神と和解させられる。
- (6) エペソ書執筆時点では、パウロはローマの獄中にいた。
①彼は、異邦人を神殿に引き入れたという罪でユダヤ人たちから訴えられていた。

2. 天からの声とは何か。

- (1) これを、バット・コルという。
- (2) バット・コルは、3回聞こえた。
 - ①洗礼の時(マタ3:17)
 - ②変貌山において(マタ17:5)
 - ③一粒の麦の話に続いて(ヨハ12:28)
- (3) この超自然的な声は、人々にイエスに関する真理を教えるためのものであった。
 - ①しかし、その意味を理解した者は少なかった。
- (4) 今も、霊的な事項に関して合理的な説明をする人が多くいる。
 - ①いくら福音を伝えても、心の動かない人がいる。
 - ②伝道の主体は、聖霊である。

「イエスの公生涯のまとめ」

ヨハ 12 : 37~50

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①イエスは、メシアとしてエルサレムに入城された。
- ②それは、ニサンの月の10日。紀元30年4月2日。日曜日であった。
- ③月曜日に、いちじくの木のかいどと、宮清めがあった。
- ④さらに月曜日に、ギリシア人の面会希望と「一粒の麦」の話があった。
- ⑤きょうの箇所は、ヨハネによるイエスの公生涯のまとめである。
- ⑥非常に厳粛な警告のことばである。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 130 イエスに会うことを願ったギリシア人たち

ヨハ 12 : 20~50

- ①一粒の麦の話 (20~36 節)
- ②ヨハネによるイエスの公生涯のまとめ (37~50 節)

*今回は、②を取り上げる。

2. アウトライン

(1) ユダヤ人の不信仰の分析 (37~43 節)

- ①イザ 53 : 1~12 の成就 (37~38 節)
- ②イザ 6 : 9~10 の成就 (39~41 節)
- ③信じた者の問題点 (42~43 節)

(2) イエスの教えの5つのポイント (44~50 節)

3. 結論

- (1) イエスがメシアであることを示す7つのしるしについて
- (2) イエスを信じなかった人たちについて
- (3) イエスを信じた人たちについて

イエスの公生涯のまとめから、教訓を学ぶ。

I. ユダヤ人の不信仰の分析 (37~43 節)

1. イザ 53：1～12の成就（37～38節）

(1) 37節

Joh 12:37 イエスが彼らの目の前でこのように多くのしるしを行われたのに、彼らはイエスを信じなかった。

- ①ユダヤ人の不信仰は、ヨハネが最初から書いていたことである。
「この方はご自分のくじに來られたのに、ご自分の民は受け入れなかった」
(ヨハ1：11)
- ②イエスは彼らの目の前で、ご自身のメシア性を示す多くの奇跡を行われた。
- ③「信じなかった」とは、「不信仰な状態を続けた」ということ。頑固な態度。
- ④不信仰は、理屈に合わないものである。

(2) 38節

Joh 12:38 それは、「主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか。また主の御腕はだれに現されましたか」と言った預言者イザヤのことばが成就するためであった。

- ①ユダヤ人の不信仰は、イザヤによって預言されていた。
- ②ヨハネは、イザ 53：1を引用している。
- ③疑問文に対する答えは、「信じた者は多くはない」である。
- ④「主の御腕」とは「神の力」。信じない人がその力を体験することはない。

2. イザ 6：9～10の成就（39～41節）

(1) 39～40節

Joh 12:39 彼らが信じることができなかつたのは、イザヤがまた次のように言ったからである。

Joh 12:40 「主は彼らの目を盲目にされた。また、彼らの心をかたくなにされた。それは、彼らが目で見ず、心で理解せず、回心せず、そしてわたしが彼らをいやすことのないためである。」

- ①不信仰の理由は、イザ 6：9～10の成就である。
- ②主は彼らに、靈的盲目と心の頑なさをもたらした。
- ③これは、不信仰に対する神からの裁きでもある。
(例話) イザ 53章は、今日のユダヤ教では無視されている。

(2) 41節

Joh 12:41 イザヤがこう言ったのは、イザヤがイエスの栄光を見たからで、イエスをさして言ったのである。

- ①イザ 6章で、イザヤは神の栄光を目撃し、預言者として召された。

- ②イザヤが見た栄光とは、イエスの栄光である。
- ③イエスは神であることが証明されている。

3. 信じた者の問題点 (42~43)

(1) 42 節

Joh 12:42 しかし、それにもかかわらず、指導者たちの中にもイエスを信じる者がたくさんいた。ただ、パリサイ人たちははばかり、告白はしなかった。会堂から追放されないためであった。

- ①指導者たちの多くが、イエスはメシアだと信じた。
 - *議員、役人など
- ②しかし彼らは、信仰告白はしなかった。
- ③会堂から除名されることを恐れたのである。

(2) 43 節

Joh 12:43 彼らは、神からの栄誉よりも、人の栄誉を愛したからである。

- ①彼らは、神からほめられることよりも、人間による評価の方を気にした。
- ②彼らは、真の信者なのか。このテーマは、結論で扱う。

II. イエスの教えの要約 (44~50 節)

1. イエスは父を証言するために来た (44 節)。

Joh 12:44 また、イエスは大声で言われた。「わたしを信じる者は、わたしではなく、わたしを遣わした方を信じるのです。」

- (1) 44~50 節には、イエスがどこで、いつ語ったかの説明がない。
 - ①イエスのこれまでの教えを、ヨハネが要約していると考えられる。
 - ②イエスの教えのポイントは、5つある。
- (2) イエスを信じることは、父なる神を信じることである。
 - ①イエスと父とは完全に一体である。
 - ②神を信じると言いながら、イエスを信じないことはあり得ないことである。
 - ③イエスを信じないで、神を信じることはできない。

2. イエスは父から派遣された (45 節)。

Joh 12:45 また、わたしを見る者は、わたしを遣わした方を見るのです。

- (1) 父なる神の実態は霊である。

①神を見た者はいない。

(2) イエスは、父なる神を啓示するために来られた。

①イエスが啓示するのは、神の体ではなく、神のご性質である。

②イエスの内に見られるご性質は、父のご性質でもある。

3. イエスは光である (46 節)。

Joh 12:46 わたしは光として世に来ました。わたしを信じる者が、だれもやみの中にとどまることのないためです。

(1) イエスは、この世に輝くシャカイナグローリーである。

①イエスがこの世に来た目的は、私たちが闇から解放するためである。

(2) 信じる者は、どのような闇から解放されたのか。

①私たちは、命、死、永遠に関して無知であったが、イエスにあって真理を見出した。

②私たちは、道徳的に闇の中にいたが、そこから解放された。

③私たちは、サタンの闇の王国から解放され、愛と光の神の御国に導かれた。

4. イエスを受け入れ者は救われる (47 節)。

Joh 12:47 だれかが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさばきません。わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです。

(1) イエスの初臨の目的は、世を救うことである。

①それゆえイエスは、信じない者を裁かない。

②不信者の裁きは、将来のことである。

5. イエスを拒否する者は、イエスが語ったことばによって裁かれる (48～50 節)。

Joh 12:48 わたしを拒み、わたしの言うことを受け入れない者には、その人をさばくものがあります。わたしが話したことばが、終わりの日にその人をさばくのです。

Joh 12:49 わたしは、自分から話したわけではありません。わたしを遣わした父ご自身が、わたしが何を言い、何を話すべきかをお命じになりました。

Joh 12:50 わたしは、父の命令が永遠のいのちであることを知っています。それゆえ、わたしが話していることは、父がわたしに言われたとおりを、そのままに話しているのです。」

(1) イエスを信じなかった者が裁かれる基準は、イエスが語ったことばである。

(2) イエスが語ったことは、すべて父から命じられたことである。

①イエスは、自分の言いたいことを言ったのではない。

(3) 父の命令は、信じる者に永遠の命を与えるものである。

①イエスはそれを知っているのに、父が命じる通りに語っている。

結論：

1. イエスがメシアであることを示す証拠

- (1) 水をぶどう酒に変えた奇跡 (2 : 1~12)
- (2) 王室の役人の息子の癒し (4 : 46~54)
- (3) ベテスダの池での病人の癒し (5 章)
- (4) 5千人のパンの奇跡 (6 章)
- (5) ガリラヤ湖の嵐を静める奇跡 (6 : 16~21)
- (6) 生まれつきの盲人の癒し (9 章)
- (7) ラザロの復活 (11 章)

2. イエスを信じなかった人たち

(1) 信じようとしなない。

「イエスが彼らの目の前でこのように多くのしるしを行われたのに、彼らはイエスを信じなかった」 (37 節)

①神が与えるしるしに応答しなかった。

②不信仰な態度を継続した。自らの心を頑なにした。

(2) 信じられなくなった。

「彼らが信じるができなかったのは、イザヤがまた次のように言ったからである」 (39 節)

(3) 信じられないようにさせられた。

「主は彼らの目を盲目にされた。また、彼らの心をかたくなにされた。それは、彼らが目で見ず、心で理解せず、回心せず、そしてわたしが彼らをいやすことのないためである」 (40 節)

(4) 不信仰を続ければ、信じるのがより難しくなる。

3. イエスを信じた人たち

「しかし、それにもかかわらず、指導者たちの中にもイエスを信じる者がたくさんいた。

ただ、パリサイ人たちをはばかり、告白はしなかった。会堂から追放されないためであった」(42節)

(1) 彼らは、本当に信じ、救われたのか。

①告白をしないのは、救われていない証拠だと考える人もいる。

②救われてはいるが、告白をしていないだけだと考える人もいる。

(2) 少なくとも、2人は本物の信仰を持っていた。

「そのあとで、イエスの弟子ではあったがユダヤ人を恐れてそのことを隠していたアリマタヤのヨセフが、イエスのからだを取りかたづけたいとピラトに願った。それで、ピラトは許可を与えた。そこで彼は来て、イエスのからだを取り降ろした。前に、夜イエスのところに来たニコデモも、没薬とアロエを混ぜ合わせたものをおよそ三十キログラムばかり持って、やって来た」(ヨハ19:38~39)

①アリマタヤのヨセフとニコデモは、神の栄誉を受ける者となった。

「枯れたいちじくの木」

マコ 11 : 19～25

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① イエスは、メシアとしてエルサレムに入城された。
- ② それは、ニサンの月の10日。紀元30年4月2日。日曜日であった。
- ③ 月曜日に、いちじくの木のかげと、宮清めがあった。
- ④ さらに月曜日に、ギリシア人の面会希望と「一粒の麦」の話があった。
- ⑤ きょうの出来事は、火曜日に起こったものである。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 131 枯れたいちじくの木と祈りについての教え

マコ 11 : 19～25

2. アウトライン

- (1) 月曜日の夕方 (19 節)
- (2) 火曜日の朝 (20～21 節)
- (3) 祈りについての教え (22～25 節)

3. 結論 : 3つの誤解を解く。

- (1) 「山を動かす」ということば
- (2) 「信じるなら、その通りになる」ということば
- (3) 「赦してやりなさい」ということば

枯れたいちじくの木から霊的教訓を学ぶ。

I. 月曜日の夕方 (19 節)

1. 18 節を再確認する。

Mar 11:18 祭司長、律法学者たちは聞いて、どのようにしてイエスを殺そうかと相談した。イエスを恐れたからであった。なぜなら、群衆がみなイエスの教えに驚嘆していたからである。

- (1) ユダヤ人の指導者たちは、イエスを殺す相談をしていた。
 - ① 群衆がイエスの方に流れていくのを恐れた。

- (2) 群衆は、イエスの教えに驚嘆していた。

- ①宮清めの出来事を目撃した。
- ②イエスの教えは、ラビたちの教えとは全く違う。

2. 19節

Mar 11:19 夕方になると、イエスとその弟子たちは、いつも都から外に出た。

- (1) 直訳は、「夕が来るたびに」である。
 - ①イエスは習慣的に、夜はエルサレムの町の外で過ごした。
 - ②祭りの期間、町の中は世界各地からの巡礼者で混雑した状態になった。
 - ③多くの者たちが、町の外に出て夜を過ごした。
 - ④ただし、過越の食事だけは町の中で食することを願った。

- (2) イエスが町から外に出た理由(上記以外の理由)
 - ①身の安全を確保するためである。
 - ②まだ神の時が来ていない。
 - ③羊を守るのが、イエスの使命である。
 - *羊とは、12弟子のことである。
 - *彼らは、イエスが地上を去った後、福音の使者となる。

- (3) イエスはエルサレムとベタニヤの間を往復した。
 - ①マルタとマリアの家に泊まるが多かった。
 - ②屋外に宿泊したこともあったと思われる。

II. 火曜日の朝(20~21節)

1. 20節

Mar 11:20 朝早く、通りがかりに見ると、いちじくの木が根まで枯れていた。

- (1) ベタニヤからエルサレムに向かう途中の出来事である。
 - ①イエスが呪ったいちじくの木が枯れていた。
 - ②復習：春先に小さな実(蕾)がなる。イエスはそれを期待された。

- (2) 訳語としては、「根まで枯れていた」ではなく「根から枯れていた」である。
 - ①根が枯れるから、木が枯れるのである。
 - ②ユダヤ人たちの内面(霊的状态)が死んでいるので、外面も滅びるのである。

2. 21節

Mar 11:21 ペテロは思い出して、イエスに言った。「先生。ご覧なさい。あなたののろわれたいちじくの木が枯れました。」

(1) ペテロの記憶力のよさに注目しよう。

「するとすぐに、鶏が、二度目に鳴いた。そこでペテロは、『鶏が二度鳴く前に、あなたは、わたしを知らないと言います』というイエスのおことばを思い出した。それに思い当たったとき、彼は泣き出した」(マコ 14:72)

(2) ペテロは驚いた(弟子たち全員がそうであった)。

「イエスは、その木に向かって言われた。『今後、いつまでも、だれもおまえの実を食べることのないように。』弟子たちはこれを聞いていた」(マコ 11:14)

①前日のイエスのことばの印象よりも厳しい結果が起こった。

②「先生」とは、「ラビ」である。

③「ご覧なさい。あなたののろわれたいちじくの木が枯れました」

*イエスをたしなめるようなニュアンスが感じられる。

(3) イエスの回答に注目しよう。

①イエスは、いちじくの木が枯れたことが何を指しているかを説明していない。

②霊的のちがなければやがて滅びる、というのが霊的教訓である。

③補足説明:聖書では、イスラエルの民を象徴する言葉は「ぶどうの木」である。

④ここでは、いちじくが枯れたという出来事を、ユダヤ人の現状に適用している。

⑤この出来事には、もう一つの適用がある。それが祈りに関する教えである。

⑥弟子たちが驚いたことが、イエスの教えの舞台設定となっている。

III. 祈りに関する教え (22~25節)

1. 22節

Mar 11:22 イエスは答えて言われた。「神を信じなさい。」

(1) 間もなくイエスは、地上を去ろうとしている。

①弟子たちは、自分たちだけで難問に取り組むことになる。

②その弟子たちへの重要な教えである。

(2) 「神を信じなさい」

①祈りが聞かれるための必須条件である。

②神の全能の力と変わることのない愛への信頼である。

③神というお方への信頼である(汝と我の関係)。

2. 23節

Mar 11:23 まことに、あなたがたに告げます。だれでも、この山に向かって、『動いて、海に入れ』と言って、心の中で疑わず、ただ、自分の言ったとおりにになると信じるなら、そのとおりになります。

(1) 「まことに、あなたがたに告げます」

- ① 「アーメン」という厳粛なイントロダクション
- ② 次に続く内容が重要であることを示している。

(2) 「だれでも、この山に向かって、『動いて、海に入れ』と言って、心の中で疑わず、ただ、自分の言ったとおりにになると信じるなら、そのとおりになります」

- ① 誇張法である。
- ② 山とはオリーブ山、海とは死海である。
- ③ 否定：心の中で疑わない。
- ④ 肯定：自分の言ったとおりにになると信じる。

3. 24節

Mar 11:24 だからあなたがたに言うのです。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。

(1) 以上の条件が満たされたなら、祈りは聞かれたと信じてよい。

- ① 実際の答えがまだ与えられていなくても、与えられたのと同じと信じる。

4. 25節

Mar 11:25 また立って祈っているとき、だれかに対して恨み事があったら、赦してやりなさい。そうすれば、天におられるあなたがたの父も、あなたがたの罪を赦してくださいます。」

(1) 「立って祈っているとき」

- ① ひざまずいて祈るのは、後代の習慣である。
- ② 立って祈るのが、ユダヤ人たちの一般的な習慣である。

(2) 神を信じる者は、自分が赦された者であることを知っている。

- ① それゆえ信者には、自分に罪を犯した者を赦すことが期待されている。

(3) 26節(異本による訳文)(新共同訳)

「もし赦さないなら、あなたがたの天の父も、あなたがたの過ちをお赦しにならない」

結論：3つの誤解

1. 「山を動かす」ということば

(1) 実際に山を動かすわけではない。

(2) これは、「解決困難な問題」のことである。

「大いなる山よ、お前は何者か。ゼルバベルの前では平らにされる。彼が親石を取り出せば、見事、見事と叫びがあがる」(ゼカ4:7)

(3) 私たちが祈るべき執りなしの祈り

「どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住ませ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるように」(エペ3:16~17)

2. 「信じるなら、その通りになる」ということば

(1) 信仰のない祈りは虚しい。

「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神が存在しておられること、また、神は御自分を求める者たちに報いてくださる方であることを、信じていなければならないからです」(ヘブ11:6)

(2) 「その通りになる」には、神の御心と調和しているという前提がある。

「アバ、父よ。あなたにおできにならないことはありません。どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願うことではなく、あなたのみこころのままを、なさってください」(マコ14:36)

「あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます」(ヨハ15:7)

3. 「赦してやりなさい」ということば

(1) 隣人を赦さなければ神の赦しを受けることができないということではない。

(2) 赦しは、信仰と恵みによって与えられる。

①信じる内容は、「福音の三要素」である。

②信じる対象は、神である。

(3) ここで問題になっているのは、父なる神と信者の「親子関係」である。

①隣人を赦さない者は、日々の生活の中で神の祝福を受けることができない。

「お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい」(エペ4:32)

「祭司長と民の長老たちによる小羊の吟味(1)」

マタ 21 : 23~32

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① イエスは、メシアとしてエルサレムに入城された。
- ② それは、ニサンの月の10日。紀元30年4月2日。日曜日であった。
- ③ 月曜日に、いちじくの木のかげと、宮清めがあった。
- ④ 火曜日に、いちじくの木が枯れていた。
- ⑤ きょうの出来事は、火曜日に起こったものである。

(2) この箇所を流れているモチーフ

- ① 過越の小羊はイエスの型であり、イエスはその本体である。
- ② ニサンの月の10日~14日まで、小羊はしみや傷がないかどうか吟味を受ける。
 - * 4つのグループの指導者たちがイエスに挑戦する。
- ③ 挑戦の目的は2つある。
 - * 群衆を誘導し、イエスに敵対させること
 - * イエスがローマ法に違反しているという口実を見つけること

(3) ユダヤ人の指導者たちとの議論の特徴

- ① ここに登場するのは、古代世界における典型的な議論の方法である。
- ② 質疑応答、機知に富んだ軽妙な言葉、論敵の言葉の矛盾を突く論理展開など。
(例話) 福音書を読んだヨッシーさんの感想

(4) A. T. ロバートソンの調和表

§ 132 サンヘドリンは、公にイエスの権威に挑戦する。

マコ 11 : 27~12 : 12、マタ 21 : 23~22 : 14、ルカ 20 : 1~19

2. アウトライン

- (1) イエスの権威に対する挑戦 (23~27節)
 - (2) ふたりの息子のたとえ話 (28~32節)
 - (3) ぶどう園の主人と農夫のたとえ話 (33~46節)
 - (4) 婚宴のたとえ話 (22 : 1~14節)
- (今回は、(1) と (2) を取り上げる)

3. 結論:

- (1) キリスト教界における権威について
- (2) 信仰の成長について
- (3) 人生の逆転について

小羊の吟味から、靈的教訓を学ぶ。

I. イエスの権威に対する挑戦(23~27節)

1. 23節

Mat 21:23 それから、イエスが宮に入って、教えておられると、祭司長、民の長老たちが、みもとに来て言った。「何の権威によって、これらのことをしておられるのですか。だれが、あなたにその権威を授けたのですか。」

- (1) 最初の挑戦は、祭司長と長老たちから来た。
 - ①祭司長は、サドカイ派である。
 - *彼らはローマの意向を気にしなければならない政治家である。
 - ②長老は、パリサイ派である。
 - *彼らは政治的には無力であるがゆえに、サドカイ派よりも人気があった。
- (2) 彼らがこのように公に挑戦をするのは、不法なことではない。
 - ①彼らは、自分たちのことを真理の守護者と見なしていた。
 - ②権威をもって教える者が現れたなら、その人に挑戦するのは当然のことである。
 - ③しかもイエスは、正式なラビ教育を受けていない。
- (3) 「これらのこと」(マタ 21:8~14の内容)
 - ①勝利の入城
 - ②人々の賞賛を受けたこと
 - ③宮きよめ
 - ④盲人や足のなえた人たちの癒し
 - ⑤神殿で教えていること
- (4) 「何の権威によって」、「だれが、あなたにその権威を授けたのですか」
 - ①これは、イエスを罠にかけるための質問である。
 - ②もし天から権威を受けたと言え、冒とく罪で訴える。
 - ③もし人から権威を受けたと言え、その主張は無効である。
 - *ユダヤ教では、ラビは彼以前のラビたちの教えを引用する。
 - *それがラビの権威の源となる。

*しかしイエスは、ラビたちの教えを引用せず、聖書だけを引用した。

2. 24～25 節 a

Mat 21:24 イエスは答えて、こう言われた。「わたしも一言あなたがたに尋ねましょう。もし、あなたがたが答えるなら、わたしも何の権威によって、これらのことをしているかを話しましょう。

Mat 21:25 ヨハネのバプテスマは、どこから来たものですか。天からですか。それとも人からですか。」

(1) イエスの回答は、ラビ的議論の典型的な例である。

- ①質問に対して、質問で答えている。
- ②もし彼らがイエスの質問に答えるなら、イエスも彼らの質問に答える。

(2) 「ヨハネのバプテスマは、どこから来たものですか」

- ①「ヨハネのバプテスマ」とは、ヨハネの奉仕全体のことである。
- ②ヨハネは、なんの権威によって奉仕を続けたのかということである。

(3) 「天からですか。それとも人からですか」

- ①これは、イエスの論敵をジレンマに陥れる質問である。
- ②これまでとは、立場が逆転した。

3. 25b～27 節 a

すると、彼らはこう言いながら、互いに論じ合った。「もし、天から、と言え、それならなぜ、彼を信じなかったか、と言うだろう。

Mat 21:26 しかし、もし、人から、と言え、群衆がこわい。彼らはみな、ヨハネを預言者と認めているのだから。」

Mat 21:27 そこで、彼らはイエスに答えて、「わかりません」と言った。

(1) もし天からの権威と答えれば、ではなぜイエスを信じないかと責められる。

- ①指導者たちは、ヨハネが神から遣わされた預言者であることを認めていた。
- ②ヨハネはイエスを指して、「見よ、神の小羊」と叫んでいた。
- ③つまり、ヨハネとイエスの権威は、同じ源から発しているということである。

(2) もし人からと答えれば、群衆が恐い。

- ①群衆の多くがヨハネの権威を信じていたので、騒ぎ出すだろう。
- ②特に、祭司長たちはローマの目を恐れていたので、「世論」を気にした。

(3) そこで彼らは、「わかりません」と答える第3の道を選んだ。

4. 27節b

イエスもまた彼らにこう言われた。「わたしも、何の権威によってこれらのことをするのか、あなたがたに話すまい。

(1) 彼らはすでに知っているのである。

①知っていることを、さらに教える必要はない。

(2) イエスは、彼らを叱責するために3つのたとえ話を語る。

①緊張感が高まって行くことを見逃してはならない。

II. ふたりの息子のたとえ話(28~32節)

1. 28~30節

Mat 21:28 ところで、あなたがたは、どう思いますか。／ある人にふたりの息子がいた。その人は兄のところに来て、『きょう、ぶどう園に行つて働いてくれ』と言つた。

Mat 21:29 兄は答えて『行きます。お父さん』と言つたが、行かなかつた。

Mat 21:30 それから、弟のところに来て、同じように言つた。ところが、弟は答えて『行きたくありません』と言つたが、あとから悪かつたと思つて出かけて行つた。

(1) 父がふたりの息子に、ぶどう園に行つて働いてくれと言つた。

①父としては、当然のことを言つている。

②父に対する敬意と従順は、ユダヤ的美徳である。

(2) 兄の場合

①すぐに「行く」と言つたが、行かなかつた。

②父への不従順は、悪徳である。

③この場合は、いったんは行くと言つていたのでさらに悪い。

(3) 弟の場合

①行きたくないと言つたのは、よくない。

②しかし、最終的には悔い改めて、出かけて行つた。

2. 31~32節

Mat 21:31 ふたりのうちどちらが、父の願つたとおりにしたのでしょうか。」彼らは言つた。「あとの者です。」イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。取税人や遊女た

ちのほうが、あなたがたより先に神の国に入っているのです。

Mat 21:32 というのは、あなたがたは、ヨハネが義の道を持って来たのに、彼を信じなかった。しかし、取税人や遊女たちは彼を信じたからです。しかもあなたがたは、それを見ながら、あとになって悔いることもせず、彼を信じなかったのです。

(1) イエスは、どちらが父の願った通りにしたかと聞いた。

①修辭的質問や招きの言葉を最後まで取っておくのは、聴衆に強い印象を与えるための古典的手法である。

(2) 指導者たちは、「あとの者です」と答えた。

①この答えによって、彼らは自分自身を裁いたのである。

(3) イエス自身が、このたとえ話の適用を語る。

①宗教的指導者たちと取税人や遊女たちの対比

②これ以上落差のある対比はない。

③祭司長やパリサイ人たちから見ると、取税人や遊女たちは救い難い罪人である。

④その罪人たちの方が、先に神の国に入っているというのである。

⑤宗教的指導者たちにとっては、これ以上の侮辱はない。

(4) 兄とは、宗教的指導者たちのことである。

①ヨハネが義の道(信仰による義)を持ってきたとき、彼らはヨハネを神からの預言者と認めた。

②しかし、それが行為となって現れることはなかった。

(5) 弟とは、取税人や遊女たちのことである。

①彼らは、神のことばからは遠い所にいた。

②しかし、悔い改めてイエスを信じた。

③行動は、真の「神の子」が誰であるかを証明する。

結論：

1. キリスト教界における権威について

(1) 神学校に行かなくても、牧師になれるか。

①答えは、「イエス」である。

②神がご自分の僕を召し、その人に権威を与える。

(2) では、神学校に行く必要はないのか。

① 答えは、「イエス」& 「ノー」である。

② 2テモ2:2

「多くの証人の前で私から聞いたことを、他の人にも教える力のある忠実な人たちにゆだねなさい」

* 神の器となるためには、訓練が必要である。

* 使徒たちの教えを継承するのが牧師の使命である。

③ 神学校で学ぶことには、多くの益がある。

* しかし、神学校でなくても、よい学びをする機会はある。

* 要するには、教えの内容が問題なのである。

(3) 牧師の権威の範囲は、どこまでなのか。

① ユダヤ的法律の原則が、きょうの箇所背景にある。

② 派遣された者は、派遣した者と同じ権威を行使できる。

③ その場合は、派遣された者は主人の意図に忠実に行動するという前提がある。

④ ヨハネは、神の御心に基づいて行動した。

⑤ イエスは、100%父の御心に従った。

2. 信仰の成長について

(1) イエスは、指導者たちの質問に答えなかった。

① すでに彼らは答えを知っていた。

② しかし、それを受け入れ、行動に移すことはしなかった。

③ すでに知っていることを、さらに教える必要はないのである。

(2) 神が私たちが扱う方法も、それと同じである。

① すでに知っている真理を実践し始めるまでは、新しい真理を学ぶことはない。

3. 人生の逆転について

(1) 表面的に義の衣をかぶっている者は、神の前における真の悔い改めを知らない。

① 私たちは、儀式や伝統によってクリスチャンになるのではない。

(2) 福音とは、「失敗者へのグッドニュース」である。

(例話) 「オリーブの家」の入室者への励ましのメッセージ

「人生、やり直しがきく」

「祭司長と民の長老たちによる小羊の吟味(2)」

マタ 21 : 33~46

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① イエスの最後の1週間について学んでいる。
- ② きょうの出来事は、火曜日に起こったものである。
- ③ 過越しの小羊はイエスの型であり、イエスはその本体である。
- ④ ニサンの月の10日~14日まで、小羊はしみや傷がないかどうか吟味を受ける。
- ⑤ 4つのグループの指導者たちがイエスに挑戦する。
- ⑥ 挑戦の目的は2つある。
 - * 群衆を誘導し、イエスに敵対させること
 - * イエスがローマ法に違反しているという口実を見つけること

(2) 前回の内容の確認

- ① イエスに挑戦した最初のグループは、祭司長とパリサイ人たちである。
- ② 彼らは、イエスの権威に挑戦した。
- ③ イエスは、ヨハネの権威はどこから来たかという問いで彼らを沈黙させた。
- ④ 続いて、3つのたとえ話を語られた。
 - * すべて、祭司長とパリサイ人たちを叱責する内容である。
 - * 紀元1世紀のユダヤ教の考え方を前提に、解釈する必要がある。
 - * 正確な解釈をしてから、適用を考える。

(3) A. T. ロバートソンの調和表

§ 132 サンヘドリンは、公にイエスの権威に挑戦する。

マコ 11 : 27~12 : 12、マタ 21 : 23~22 : 14、ルカ 20 : 1~19

2. アウトライン

- (1) イエスの権威に対する挑戦 (23~27 節)
 - (2) ふたりの息子のたとえ話 (28~32 節)
 - (3) ぶどう園の主人と農夫のたとえ話 (33~46 節)
 - (4) 婚宴のたとえ話 (22 : 1~14 節)
- (今回は、(3) を取り上げる)

3. 結論 :

- (1) 「ぶどう園の外で殺す」という意味について
- (2) 「別の農夫たちに貸す」という意味について
- (3) 「石」という意味について

小羊の吟味から、霊的教訓を学ぶ。

Ⅲ. ぶどう園の主人と農夫のたとえ話(33~46節)

1. 33節

Mat 21:33 もう一つのたとえを聞きなさい。／ひとりの、家の主人がいた。彼はぶどう園を造って、垣を巡らし、その中に酒ぶねを掘り、やぐらを建て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた。

(1) 当時の主人と農夫の関係

- ①ローマ帝国の郊外の地(田舎)は、そのほとんどが地主の所有地であった。
- ②地主は都市生活をし、畑を農夫に貸して、その収穫で裕福な生活をしていた。
 - * 奴隷に労働させることもあった。
 - * 畑を貸す場合は、相手は小作農(自由人)であった。
- ③寛大な地主は尊敬を集めたが、そのような地主は稀であった。
- ④このたとえ話に登場する地主は、非常に寛大である。
 - * 下層階級からは尊敬されたであろうが、貴族階級からは軽蔑された。

(2) イエスは、イザ5:1~2をイメージしながら語っている。

「さあ、わが愛する者のためにわたしは歌おう。そのぶどう畑についてのわが愛の歌を。わが愛する者は、よく肥えた山腹に、ぶどう畑を持っていた。彼はそこを掘り起こし、石を取り除き、そこに良いぶどうを植え、その中にやぐらを立て、酒ぶねまでも掘って、甘いぶどうのなるのを待ち望んでいた。ところが、酸いぶどうができてしまった」

(3) このたとえ話に出て来る言葉の意味

- ①主人は、父なる神。
- ②ぶどう園は、イスラエル。
- ③農夫は、イスラエルの指導者たち。

2. 34~36節

Mat 21:34 さて、収穫の 때가近づいたので、主人は自分の分を受け取ろうとして、農夫たちのところへしもべたちを遣わした。

Mat 21:35 すると、農夫たちは、そのしもべたちをつかまえて、ひとり袋だたきにし、も

うひとりは殺し、もうひとりは石で打った。

Mat 21:36 そこでもう一度、前よりももっと多くの別のしもべたちを遣わしたが、やはり同じような扱いをした。

(1) 収穫の時の小作料の徴収

- ①小作農は、収穫の時に主人に対して、あらかじめ決められているものを支払う。
- ②収穫量であったり、率であったりした(最低25%以上)。
- ③常に、力があるのは小作農ではなく、主人の方である。
- ④問題のある小作農に対応するために、私兵集団を擁していた主人もいた。

(2) 小作農の反抗

- ①小作農たちが、力のある者のように振る舞っている。
- ②寛大な主人に対する反抗である。
- ③主人が遣わしたしもべたちを苦しめた。
 - *ひとりは袋叩きにした。
 - *もうひとりは殺した。
 - *もうひとりは石で打った。
 - *もっと多くのしもべたちも同じように扱った。
- ④ルカ20:10~12では、3人のしもべが3回にわたって派遣されている。
 - *バビロン捕囚前の預言者たち
 - *バビロン捕囚後の預言者たち
 - *バプテスマのヨハネとイエスの弟子たち

3. 37~39節

Mat 21:37 しかし、そのあと、その主人は、『私の息子なら、敬ってくれるだろう』と言って、息子を遣わした。

Mat 21:38 すると、農夫たちは、その子を見て、こう話し合った。『あれはあと取りだ。さあ、あれを殺して、あれのものになるはずの財産を手に入れようではないか。』

Mat 21:39 そして、彼をつかまえて、ぶどう園の外に追い出して殺してしまった。

- (1) 息子は、イエスを指している。
- (2) 小作農は、それが跡取りであることを認識したうえで、殺した。
 - ①主人の財産を自分のものにしようとした。
 - ②民衆は神から指導者たちに委ねられたのであって、神の所有物である。
 - ③指導者たちは、イエスが神の子であることを知っていた(公に認めなかったが)。

4. 40~41節

Mat 21:40 この場合、ぶどう園の主人が帰って来たら、その農夫たちをどうするでしょう。」

Mat 21:41 彼らはイエスに言った。「その悪党どもを情け容赦なく殺して、そのぶどう園を、季節にはきちんと収穫を納める別の農夫たちに貸すに違いありません。」

(1) 質問が最後に来る。

- ①聴衆は、なぜ主人は行動を起こさないのかと考えていたはずである。
- ②主人はその農夫たちをどうするだろうかというのは、当然の質問である。

(2) 指導者たちは、正しく答えた。

- ①悪党どもを殺し、そのぶどう園を忠実な農夫たちに貸すにちがいない。
- ②彼らは、そう答えることによって自分自身を裁いている。

5. 42 節

Mat 21:42 イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、次の聖書のことばを読んだことがないのですか。／『家を建てる者たちの見捨てた石。／それが礎の石になった。／これは主のなされたことだ。／私たちの目には、／不思議なことである。』」

(1) イエスは、詩 118 : 22~23 を引用している。

- ①イエスは家を建てる者たち(指導者たち)に、ご自身を啓示された。
*家とは神殿である。
- ②しかし、彼らの建設計画には、イエスが入り込む余地はなかった。

6. 43 節

Mat 21:43 だから、わたしはあなたがたに言います。神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ国民に与えられます。

Mat 21:44 また、この石の上に落ちる者は、粉々に砕かれ、この石が人の上に落ちれば、その人を粉みじんに飛ばしてしまいます。」

(1) イエスは、このたとえ話を適用している。

- ①神の国(メシア的王国)は彼らから取り去られ、実を結ぶ国民に与えられる。
- ②この石に敵対するなら、滅びに会う。
*紀元70年のエルサレム崩壊の預言である。

(2) 聖書の一部が引用された場合、その箇所全体を読む必要がある。

- ①詩 118 : 26 には、「【主】の御名によって来る人に、祝福があるように」とある。
- ②イスラエルの中に、信仰を持つ人たちが出て来ることを預言している。

6. 45~46 節

Mat 21:45 祭司長たちとパリサイ人たちは、イエスのこれらのたとえを聞いたとき、自分たちをさして話しておられることに気づいた。

Mat 21:46 それでイエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。群衆はイエスを預言者と認めていたからである。

(1) 指導者たちは、これらのたとえ話が自分たちへの叱責であることに気づいた。

①イスラエルの民全体ではなく、指導者たちに対する叱責である。

(2) イエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れたので手が出せなかった。

①群衆は、イエスを預言者と認めていた。

②群衆をなだめることが最大の関心事なので、真理を直視することがない。

結論：

1. 「ぶどう園の外で殺す」という意味について

Mat 21:39 そして、彼をつかまえて、ぶどう園の外に追い出して殺してしまった。

(1) ヘブ 13:11~12 は、イエスが門の外で苦しみを受けたと教えている。

「動物の血は、罪のための供え物として、大祭司によって聖所の中まで持って行かれますが、からだは宿営の外で焼かれるからです。ですから、イエスも、ご自分の血によって民を聖なるものとするために、門の外で苦しみを受けられました」

(2) これは、贖罪の日の犠牲である。

①血は罪を清める供え物。

②からだは宿営の外(汚れた地)で焼かれる。

(3) イエスの犠牲もこれと同じである。

①イエスは、門の外(汚れた地)で苦しみました。

②イエスの血は、私たちの罪を清める。

(4) それゆえ、イエスが苦しみましたように門の外で苦しみを受けようではないか。

2. 「別の農夫たちに貸す」という意味について

Mat 21:43 だから、わたしはあなたがたに言います。神の国はあなたがたから取り去られ、神の国の実を結ぶ国民に与えられます。

(1) この聖句は、置換神学の根拠とされることが多い。

「ユダヤ人から取り去られ、教会に与えられる、の意(1ペテ2:9参照)」

(新改訳聖書の注解・索引・チェーン式引照付き版)

(2) この解釈の問題点

①「あなたがた」とは、イエス時代の指導者たちである。

②「神の国」が完全にイスラエルから取り去られたわけではない。

③さらに、「神の国(メシア的王国)」は、いまだに教会に与えられていない。

(3) 文脈を考慮した正しい解釈

①神の国は、イエス時代の指導者たちから取り去られる。

②「神の国の実を結ぶ国民」とは、大患難時代の指導者たちである。

*「国民」は、世代(ジェネレーション)の意味で用いられている。

③神の国は、将来の世代(大患難時代)の信仰ある指導者たちに与えられる。

3. 「石」という意味について

Mat 21:44 また、この石の上に落ちる者は、粉々に砕かれ、この石が人の上に落ちれば、その人を粉みじんに飛ばしてしまいます。」

(1) 石の上に落ちる者(初臨)

イザ8:13~15

「万軍の【主】、この方を、聖なる方とし、この方を、あなたがたの恐れ、この方を、あなたがたのおののきとせよ。そうすれば、この方が聖所となられる。しかし、イスラエルの二つの家には妨げの石とつまずきの岩、エルサレムの住民にはわなとなり、落とし穴となる」

(2) 石が人の上に落ちる(再臨)

ダニ2:35

「そのとき、鉄も粘土も青銅も銀も金もみな共に砕けて、夏の麦打ち場のもみがらのようになり、風がそれを吹き払って、あとかたもなくなりました。そして、その像を打った石は大きな山となって全土に満ちました」

①バビロンの王ネブカデネザルが見た夢の中の像

②像は世界の王国を象徴している。

③一つの石が人手によらずに切り出され、像を打ち砕いた。

④その石は、大きな山となって全地に満ちた。

ダニ2:44

「この王たちの時代に、天の神は一つの国を起こされます。その国は永遠に滅ぼされることがなく、その国は他の民に渡されず、かえってこれらの国々をことごとく打ち砕いて、絶滅してしまいます。しかし、この国は永遠に立ち続けます」

①石は世界の王国を滅ぼす神の国である。

②神の国は永遠に立ち続ける。

「祭司長と民の長老たちによる小羊の吟味(3)」

マタ 22 : 1~14

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① イエスの最後の1週間について学んでいる。
- ② きょうの出来事は、火曜日に起こったものである。
- ③ イエスは、神の小羊として4つのグループの指導者たちから挑戦を受ける。
- ④ 挑戦の目的は2つある。
 - * 群衆を誘導し、イエスに敵対させること
 - * イエスがローマ法に違反しているという口実を見つけること

(2) これまでの内容の確認

- ① イエスに挑戦した最初のグループは、祭司長とパリサイ人たちである。
- ② 彼らは、イエスの権威に挑戦した。
- ③ イエスは、ヨハネの権威はどこから来たかという問いで彼らを沈黙させた。
- ④ 続いて、3つのたとえ話を語られた。

(3) A. T. ロバートソンの調和表

§ 132 サンヘドリンは、公にイエスの権威に挑戦する。

マコ 11 : 27~12 : 12、マタ 21 : 23~22 : 14、ルカ 20 : 1~19

2. アウトライン

- (1) イエスの権威に対する挑戦 (23~27 節)
 - (2) ふたりの息子のたとえ話 (28~32 節)
 - (3) ぶどう園の主人と農夫のたとえ話 (33~46 節)
 - (4) 婚宴のたとえ話 (22 : 1~14 節)
- (今回は、(4) を取り上げる)

3. 結論 :

- (1) 3つのたとえ話とイスラエルの霊的歴史
- (2) 婚礼の礼服

小羊の吟味から、霊的教訓を学ぶ。

IV. 婚宴のたとえ話(1~14節)

1. 1~3節

Mat 22:1 イエスはもう一度たとえをもって彼らに話された。

Mat 22:2 「天の御国は、王子のために結婚の披露宴を設けた王にたとえることができます。

Mat 22:3 王は、招待しておいたお客を呼びに、しもべたちを遣わしたが、彼らは来たがらなかった。

(1) このたとえ話に出て来る言葉の意味

①結婚の披露宴は、天の御国(メシア的王国)を意味している。

*メシア的王国を宴会にたとえるのは、旧約聖書の伝統である。

*ユダヤ人たちも、その伝統を受け入れている(ルカ14:15参照)。

②披露宴を設けた王は、父なる神である。

③王子は、イエス・キリストである。

*キリストと教会の婚姻をイメージすると、たとえ話の意味が混乱する。

*ここでは、教会の祝福や役割については、何も語られていない。

(2) 王の招き

①王は事前に招待状を出しておいた。これは、当時の習慣でもある。

②招待しておいたお客を呼びに、しもべたちを遣わした。

③これが第一段階の招きである。

*「しもべたち」とは、バプテスマのヨハネとイエスの12弟子たちである。

*彼らは、イエスを信じるなら神の国が現れると説いた。

(3) 招待客たちの反応

①当時の結婚の披露宴

*富豪の場合は、町全体を招待することもあった。

*王に招かれることは、大変な特権である。

*客には時間的犠牲が要求された。通常、7日間続く宴会である。

*貧しい農夫の場合は、出席することがかなり難しい。

*それでも、王に招かれることは名誉なことである。

②招待客たちは、「来たがらなかった」「来ようとしなかった」「断ってきた」。

*彼らは、貧しい農夫たちではない。

*これは、王に対する侮辱である。

*これは、王に対する反抗と受け取られても仕方がない。

2. 4～6節

Mat 22:4 それで、もう一度、次のように言いつけて、別のしもべたちを遣わした。『お客に招いておいた人たちにこう言いなさい。「さあ、食事の用意ができました。雄牛も太った家畜もほふって、何もかも整いました。どうぞ宴会にお出かけください。』

Mat 22:5 ところが、彼らは気にもかけず、ある者は畑に、別の者は商売に出て行き、

Mat 22:6 そのほかの者たちは、王のしもべたちをつかまえて恥をかかせ、そして殺してしまった。

(1) 王の招きの第二段階

- ①王は、招待されることの祝福を丁寧に説いた。
- ②宴会の準備が終わり、何もかも整っている。
- ③「別のしもべたち」とは、使徒行伝の前半に宣教する使徒たちと考えられる。

(2) 招待客たちの反応

- ①ある者たちは、無視した。
- ②ある者たちは、畑に行った。
- ③別の者たちは、商売に出て行った。
- ④以上のことから、招待客たちは貴族階級であることが分かる。
- ⑤これは、王に対する侮辱である。彼らは、事前に招待されていたのである。

(3) 最悪の招待客たち

- ①王のしもべたちに恥をかかせ、殺してしまった。
- ②使徒たちのほぼ全員が殉教の死を遂げている。

3. 7節

Mat 22:7 王は怒って、兵隊を出して、その人殺しどもを滅ぼし、彼らの町を焼き払った。

(1) 王の怒り

- ①人殺しどもを滅ぼし、彼らの町を焼き払った。
- ②火をつけるのは、町を破壊させる最後の段階である。

(2) これは、紀元70年のエルサレム滅亡の預言である。

- ①エルサレムは破壊され、火で焼かれた。
- ②王の兵隊とは、ローマ軍のことである。

*彼らは異邦人であるが、神の裁きの道具として用いられた。

4. 8～10節

Mat 22:8 そのとき、王はしもべたちに言った。『宴会の用意はできているが、招待しておいた人たちは、それにふさわしくなかった。』

Mat 22:9 だから、大通りに行って、出会った者をみな宴会に招きなさい。』

Mat 22:10 それで、しもべたちは、通りに出て行って、良い人でも悪い人でも出会った者をみな集めたので、宴会場は客でいっぱいになった。

(1) 宴会の用意はできたが、招待されていた人たちは出席を拒否した。

- ①誰も来ない宴会は、王子に対する侮辱となる。
- ②そこで、最初の招待客よりも広範囲の人たちにチャンスが与えられた。

(2) 大通りで出会った者とは、異邦人のことである。

- ①宴会に招かれていなかった者たちが、招きの言葉を聞いた。
- ②「良い人でも悪い人でも」みな招かれた。
- ③その結果、宴会場は客でいっぱいになった。

(3) 使徒行伝の伝道に広がり

- ①使7章(ステパノの殉教)
- ②使8章(サマリヤ人への伝道)
- ③使10章(異邦人への伝道)

5. 11~13節

Mat 22:11 ところで、王が客を見ようとして入って来ると、そこに婚礼の礼服を着ていない者がひとりいた。

Mat 22:12 そこで、王は言った。『あなたは、どうして礼服を着ないで、ここに入って来たのですか。』しかし、彼は黙っていた。

Mat 22:13 そこで、王はしもべたちに、『あれの手足を縛って、外の暗やみに放り出せ。そこで泣いて歯ぎしりするのだ』と言った。

(1) 宴会に出るために必要な準備がある。

- ①その場にふさわしい礼服を着用する必要がある。
- ②当時の習慣では、婚礼の礼服は主人が用意した。

(2) しかし、礼服を着ていない者がひとりいた。

- ①彼は、王が用意した礼服を着用してない。
- ②王は彼を問い詰めるが、彼は沈黙したままである。

(3) 「あれの手足を縛って、外の暗やみに放り出せ。そこで泣いて歯ぎしりするのだ」

- ①その者は、宴会場から外に放り出された。
- ②「外の暗やみ」とは、「燃える火の池」(地獄)である。
- ③そこでは、火は痛みを与えるが光を提供しない。
- ④「泣いて」とは、悲しみと嘆きの表現である。
- ⑤「歯ぎしりする」とは、痛みの表現である。

6. 14節

Mat 22:14 招待される者は多いが、選ばれる者は少ないのです。」

- (1) 多くの者が招待される。
 - ①しかし、その招待に応答する人は少ない。
 - ②応答した人は、キリストを救い主として信じた人である。
 - ③その人は、神によって選ばれた人である。

結論：

1. 3つのたとえ話とイスラエルの霊的歴史

- (1) イスラエルは、豊かな実を付けることを期待して選ばれたが、失敗した。

- ①ふたりの息子のたとえ話

- *イスラエルは、父の命令に不従順であった。

- ②ぶどう園の主人と農夫のたとえ話

- *イスラエルは、御子を十字架に付けた。

- ③婚宴のたとえ話

- *イスラエルは、聖霊の招きに抵抗した。

- (2) イスラエルは脇に置かれ、キリストの祝福が教会に与えられた。

「兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思うことがないようにするためです。その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、こうして、イスラエルはみな救われる、ということです」(ロマ11:25~26a)

- ①この状態は、異邦人の完成のなる時まで続く。

2. 婚礼の礼服

- (1) 王に受け入れられるためには、婚礼の礼服が必要である。

- ①王が用意する礼服である。
- ②良い人も悪い人も、ともにこの礼服が必要である。

(2) 王は、礼服を着ないで宴会場に入っている人を問い詰めた。

- ①彼は、自分の義をもって神の前に出ている人である。
- ②彼は、沈黙するしかない。
- ③イスカリオテのユダを思い出せ。

(3) 婚礼の礼服とは、「義の衣」である。

「こういうわけで、私たちはキリストの使節なのです。ちょうど神が私たちを通して懇願しておられるようです。私たちは、キリストに代わって、あなたがたに願います。神の和解を受け入れなさい」(2コリ5:20)

(4) このたとえ話を、天国の情景だと思ってはならない。

- ①地上生涯でどういう選びをするかが、永遠の運命を決する。
- ②婚礼の宴会と「外の暗やみ」の対比を思え。
- ③婚礼の宴会には、光が満ちている。
- ④「外の暗やみ」とは、「燃える火の池」(地獄)である。
 - *そこでは、火は痛みを与えるが光を提供しない。
- ⑤「恐ろしい」という理由で、死後の世界を直視することを避けてはならない。

「カイザルへの税金」

マタ 22 : 15~22

1. はじめに

*きょうの箇所は、よく誤解される箇所である。

(1) 文脈の確認

- ① イエスの最後の1週間について学んでいる。
- ② きょうの出来事は、火曜日に起こったものである。
- ③ イエスは、神の小羊として4つのグループの指導者たちから挑戦を受ける。
- ④ 挑戦の目的は2つある。
 - * 群衆を誘導し、イエスに敵対させること
 - * イエスがローマ法に違反しているという口実を見つけること
- ⑤ イエスに挑戦した最初のグループは、祭司長とパリサイ人たちである。
- ⑥ 第2のグループは、パリサイ人とヘロデ党の者たちである。
- ⑦ 有名ではあるが、解釈が難しい箇所である。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 133 パリサイ人とヘロデ党の者たちが、イエスの権威に挑戦する。

マコ 12 : 13~17、マタ 22 : 15~22、ルカ 20 : 20~26

2. アウトライン

- (1) パリサイ人たちの策略 (15~17 節)
- (2) イエスの要求 (18~19 節)
- (3) 質疑応答 (20~22 節)

3. 結論 : 2つの盲点

- (1) 2種類の権威
- (2) 神への従順

小羊の吟味から、霊的教訓を学ぶ。

I. パリサイ人たちの策略 (15~17 節)

1. 15~16 節 a

Mat 22:15 そのころ、パリサイ人たちは出て来て、どのようにイエスをことばのわなにかけ

ようかと相談した。

Mat 22:16 彼らはその弟子たちを、ヘロデ党の者たちといっしょにイエスのもとにやって、
こう言わせた。

- (1) 首謀者は、パリサイ人たちである。
 - ①イエスをことばのわななにかける。
 - ②言葉じりを捉える。
 - ③揚げ足を取る。

- (2) 弟子たちをヘロデ党の者たちといっしょにイエスのもとに遣った。
 - ①パリサイ人とヘロデ党の者は、通常は敵対関係にあった。
 - ②イエスを共通の敵としたので、両者の違いは問題にはならなかった。
 - ③パリサイ人たちは、モーセの律法が要求する複数の証人を用意したのである。

- (3) パリサイ人の特徴
 - ①いかなる状況においても、ローマの支配を認めない。反体制派である。
 - ②彼らは、カイザル(皇帝)を王として認めることは、【主】が王であることを否定することであると教えていた。
 - ③カイザルに税金を納めることは、イスラエルの上にローマの権威があると認めることである。

- (4) ヘロデ党の者の特徴
 - ①彼らは、宗教的なグループではない。
 - ②彼らは、ヘロデ大王の統治を積極的に支持した人たちである。
 - ③今も、ヘロデ・アンティパスを初めとするヘロデ王朝の者たちを支持している。
 - ④ローマの支配を受け入れている現実主義者たちである。
 - ⑤ヘロデ家の中からユダヤの王になる者が出ることを期待している。
 - ⑥ポンテオ・ピラトがユダヤの総督であることを喜んでいない。
 - ⑦民衆の暴動が原因で、ローマがより強力な統治体制を取ることを恐れている。

- (5) 主人公が自分に向けられた難問に見事に答えるというのは、古典のテーマである。
「ときに、シェバの女王が、【主】の名に関連してソロモンの名声を伝え聞き、難問をもって彼をためそうとして、やって来た」(1列10:1)
 - ①イエスはソロモン以上の方である。
 - ②イエスは、傷もしみもない神の小羊である。

2. 16b～17節

「先生。私たちは、あなたが真実な方で、真理に基づいて神の道を教え、だれをもはばからない方だと存じています。あなたは、人の顔色を見られないからです。」

Mat 22:17 それで、どう思われるのか言ってください。税金をカイザルに納めることは、律法にかなっていることでしょうか。かなっていないことでしょうか。」

(1) 最初の語りかけの言葉

- ①偽善的な言葉である。
- ②彼らは、イエスを信じていなかったのである。

(2) イエスを畏にかけるための質問

- ①カイザルに税金を納めるべきか否か。
- ②これは、ローマへの反抗か従順かを問う質問である。
- ③「イエス」と答えれば、民衆が騒ぐ。特に、熱心党の者たちを怒らせる。
- ④「ノー」と答えれば、ローマに逮捕される。ヘロデ党の者たちを怒らせる。

II. イエスの要求 (18～19節)

1. 18節

Mat 22:18 イエスは彼らの悪意を知って言われた。「偽善者たち。なぜ、わたしをためすのか。」

(1) イエスは、彼らの悪意を知っておられた。

- ①イエスを畏にかけようとしているのに、ほめ言葉を口にするのは偽善である。
- ②彼らは、イエスを試している、試みに合わせている。

2. 19節

Mat 22:19 納め金にするお金をわたしに見せなさい。」そこで彼らは、デナリを一枚イエスのもとに持って来た。

(1) イエスは納税のためのコインを要求した。

- ①イエスはそれを持っていなかった。
- ②周りの人たちも、持っていなかった。
- ③イエスのもとに持ってくるのに、少し時間がかかった。
- ④神殿内では、だれもこのコインを持っていない。

(2) 神殿内では、ローマのコインは使用できない。

- ①ローマに税を納める時の貨幣はデナリ銀貨である。
- ②そこには、カイザルの像が刻まれていた。

- ③神殿税のために使用する貨幣は、ユダヤの銅貨である。
- ④両替商は、高い手数料を取っていた。大祭司のファミリービジネスであった。
- ⑤イエスが宮清めの際に倒したのは、両替人の台である(ヨハ2:15)。

III. 質疑応答(20~22節)

1. 20~21節 a

Mat 22:20 そこで彼らに言われた。「これは、だれの肖像ですか。だれの銘ですか。」

Mat 22:21 彼らは、「カイザルのです」と言った。

- (1) ローマのデナリ貨にはカイザルの肖像と銘が刻まれていた。
 - ①神格化された皇帝の肖像
 - ②「Tiberius Caesar Augustus, son of the Divine Augustus」
 - ③これは、ユダヤ人を支配しているのがローマであることを証明していた。
 - ④また、ユダヤ人はローマの徴税制の下にいることを示していた。
- (2) 彼らは、「カイザルのです」と言わざるを得なかった。
 - ①彼らは、日々、ローマの支配下にあることを痛感していた。

2. 21b~22節

そこで、イエスは言われた。「それなら、カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。」

Mat 22:22 彼らは、これを聞いて驚嘆し、イエスを残して立ち去った。

- (1) イエスは、カイザルのものはカイザルに返せと言われた。
 - ①彼らは、ローマの統治による恩恵を被っていた。
 - ②ローマのコインを用いている、道路を使用している、平和を享受している。
 - ③彼らには、ローマに税を支払う十分な理由があった。
- (2) 彼らは、神の支配の下にもある。
 - ①それゆえ、神に対する感謝を表す必要がある。
- (3) イエスは、畏にかけようとして者たちを驚嘆に追い込んだ。
 - ①彼らは、そこを去るしかなかった。

結論：2つの盲点

1. 2種類の権威

(1) 旧約聖書には、2種類の権威が啓示されている。

①神の権威

②神から権限が委譲された地上の権威

(2) 神はご自身の主権によって、地上の支配者を立てる。

①ダニ4:17

「この宣言は見張りの者たちの布告によるもの、この決定は聖なる者たちの命令によるものだ。それは、いと高き方が人間の国を支配し、これをみこころにかなう者に与え、また人間の中の最もへりくだった者をその上に立てることを、生ける者が知るためである」(ダニ4:17)

②それゆえ、人間は地上の支配者に従う必要がある。

③この観点に立てば、ローマの支配を受け入れないパリサイ人の立場は誤りだということになる。

④1ペテ2:17

「すべての人を敬いなさい。兄弟たちを愛し、神を恐れ、王を尊びなさい」

(3) ただし、神の権威と地上の権威が対立する場合は、神の権威に従う。

①使5:29

「ペテロをはじめ使徒たちは答えて言った。『人に従うより、神に従うべきです』」

2. 神への従順

(1) パリサイ人たちは、ローマの支配に抵抗しつつも、税は納めていた。

(2) しかし、神の権威には従っていなかった。

①神から受けている多くの祝福を忘れていた。

②神に対する義務を忘れていた。

③何よりも、神の「像」そのものであるイエスを信じなかった。

④へブ1:3

「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の全能者の右の座に着かれました」

「サドカイ人の質問」

ルカ 20 : 27~40

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① イエスの最後の1週間について学んでいる。
- ② きょうの出来事は、火曜日に起こったものである。
- ③ イエスは、神の小羊として4つのグループの指導者たちから挑戦を受ける。
- ④ イエスに挑戦した最初のグループは、祭司長とパリサイ人たちである。
- ⑤ 第2のグループは、パリサイ人とヘロデ党の者たちである。
*政治的質問をした。
- ⑥ 第3のグループは、サドカイ人たちである。
*神学的質問をする。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 134 サドカイ人たちが復活について不可解な質問をする。

マコ 12 : 18~27、マタ 22 : 23~33、ルカ 20 : 27~40

2. アウトライン

- (1) 舞台設定 (27~28 節 a)
- (2) サドカイ人たちの質問 (28b~33 節)
- (3) イエスの回答① (34~36 節)
- (4) イエスの回答② (37~38 節)
- (5) 結末 (39~40 節)

3. 結論 : 死後の復活はあるか。

- (1) 旧約聖書に記された復活の教理
- (2) アブラハム契約の内容
- (3) イエスの復活

小羊の吟味から、復活に関する真理を学ぶ。

I. 舞台設定 (27~28 節 a)

Luk 20:27 ところが、復活があることを否定するサドカイ人のある者たちが、イエスのところに来て、質問して、

Luk 20:28 こう言った。

1. 神の小羊を吟味する第3のグループは、サドカイ人たちである。
 - (1) 福音書には、パリサイ人とサドカイ人が頻繁に登場する。
 - ①両者は、イスラエルの指導的地位に着いていた人たちである。
 - ②両者の間には多くの類似性があったが、重要な点で差異もあった。
 - ③サドカイ人たちは、復活があることを否定していた。

2. サドカイ人とはどういう人たちか。
 - (1) 彼らは裕福な貴族階級である。
 - ①大祭司や祭司長たちは、サドカイ人である。
 - ②紀元1世紀のユダヤ社会で、大きな権力を持っていた。

 - (2) サンヘドリン(ユダヤ議会)の議席(70席+議長)の過半数を占めていた。
 - ①しかし、少数派のパリサイ人たちの意見に従うことが多かった。
 - ②民衆は、パリサイ人たちを支持していた。

 - (3) 彼らは、宗教よりも政治に関心を持っていた。
 - ①彼らは、ローマの支配を受け入れていた。
 - ②当初、イエスの活動にはさほどの関心を示さなかった。
 - ③ローマが介入してくる危険性を感じたために、イエスに関心を示した。

 - (4) 神学的にある点でパリサイ人と異なっていた。
 - ①口伝律法を認めず、書かれた書だけが権威あるものとした。
 - ②教理を導き出すためには、モーセの五書だけを利用する。それ以外の書は、教訓を学ぶためのものである。
 - ③神は日常生活には介入しない(自己満足とうぬぼれが特徴)。
 - ④死者の復活を認めない。
 - ⑤死後の命を認めない。肉体の死とともに霊魂も滅びる。
 - ⑥死後の裁きや褒賞はない。
 - ⑦霊界の存在を認めない。天使や悪霊の存在を否定する。

 - (5) 紀元70年のエルサレム崩壊により、サドカイ派は消滅することになる。

3. 彼らは、イエスに復活に関する神学的質問を投げかける。
 - (1) 復活に関する質問は、パリサイ人たちを悩ませていたものである。

①彼らは、同じ質問をしてイエスを困らせようとした。

II. サドカイ人たちの質問 (28b～33 節)

「先生。モーセは私たちのためにこう書いています。『もし、ある人の兄が妻をめぐって死に、しかも子がなかった場合は、その弟はその女を妻にして、兄のための子をもうけなければならない。』

Luk 20:29 ところで、七人の兄弟がいました。長男は妻をめぐりましたが、子どもがなくて死にました。

Luk 20:30 次男も、

Luk 20:31 三男もその女をめぐり、七人とも同じようにして、子どもを残さずに死にました。

Luk 20:32 あとで、その女も死にました。

Luk 20:33 すると復活の際、その女はだれの妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻としたのですが。」

1. 背景にある律法の規定

「兄弟がいっしょに住んでいて、そのうちのひとりが死に、彼に子がない場合、死んだ者の妻は、家族以外のよそ者にとついでなければならない。その夫の兄弟がその女のところに、入り、これをめぐって妻とし、夫の兄弟としての義務を果たさなければならない。そして彼女が産む初めの男の子に、死んだ兄弟の名を継がせ、その名がイスラエルから消し去られないようにしなければならない」(申 25:5～6)

(1) この規定は、寡婦の経済的社会的地位を守るためのものである。

2. 彼らの質問は、あり得ない状況を想定したものである。

(1) ある女が7人の兄弟たちと結婚した。

①子を残すことがなかった。

(2) 復活の際、その女は誰の妻になるのか。

①回答不可能な質問をして、イエスを辱めようとした。

②サドカイ人たちは、得意げにこの質問をしたのである。

III. イエスの回答① (34～36 節)

Luk 20:34 イエスは彼らに言われた。「この世の子らは、めとったり、とついだりするが、

Luk 20:35 次の世に入るのにふさわしく、死人の中から復活するのにふさわしい、と認められる人たちは、めとることも、とつぐこともありません。

Luk 20:36 彼らはもう死ぬことができないからです。彼らは御使いのようであり、また、復活の子として神の子どもだからです。

1. マタ 22 : 29

「しかし、イエスは彼らに答えて言われた。『そんな思い違いをしているのは、聖書も神の力も知らないからです』」

2. 復活の体に関する教え

(1) 復活の体(栄化された体)は、地上の体の延長線にあるものではない。

- ①それは、質的に新しくされたものである。
- ②朽ちない体、永遠に存続する体である。
- ③天にいる天使のようである。

(2) 復活の体を持つと死ぬことがないので、結婚する必要がなくなる。

- ①夫婦がお互いの顔を認識できないということではない。
- ②両者の関係は、まったく新しいものとなる。

(3) 「死人の中から復活するのにふさわしい、と認められる人たち」

- ①ここでは、信者の復活がテーマとなっている。
- ②信仰によって義とされた人たちが、復活に与るのである。

(4) 「復活の子として神の子ども」

- ①信者はすでに神の子どもである。
- ②復活の体は、信者が神の子であることの実質的な表れである。

IV. イエスの回答② (37~38節)

Luk 20:37 それに、死人がよみがえることについては、モーセも柴の個所で、主を、『アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神』と呼んで、このことを示しました。

Luk 20:38 神は死んだ者の神ではありません。生きている者の神です。というのは、神に対しては、みなが生きているからです。」

1. 出エジ 3 : 6~7

「また仰せられた。『わたしは、あなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。』モーセは神を仰ぎ見ることを恐れて、顔を隠した。【主】は仰せられた。『わたしは、エジプトにいるわたしの民の悩みを確かに見、追い使う者の前の彼らの叫びを聞いた。わたしは彼らの痛みを知っている』」

2. サドカイ人たちは、教理を導き出す書としては、モーセの五書だけを認めていた。

(1) イエスは、相手の論理に乗って回答している。

①彼らは、モーセの五書には復活の教えがないと信じていた。

(2) イエスは、モーセの五書に復活の証明があることを示した。

①神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である。

②神がモーセに語りかけた時には、アブラハム、イサク、ヤコブは死んでいた。

③しかし、神は生きている者の神である。

④つまり、アブラハム、イサク、ヤコブは生きているということである。

⑤もしそうでなければ、「わたしは、〇〇の神であった」という表現になる。

V. 結末 (39~40 節)

Luk 20:39 律法学者のうちのある者たちが答えて、「先生。りっぱなお答えです」と言った。

Luk 20:40 彼らはもうそれ以上何も質問する勇気がなかった。

1. サドカイ人たちは、沈黙した。

2. パリサイ人たちは、感動した。

(1) 復活に関して、サドカイ人たちを論破する論理をイエスから与えられた。

結論：死後の復活はあるか。

1. 旧約聖書に記された復活の教理

(1) ダニ 12 : 2

「地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。ある者は永遠のいのちに、ある者はそしりと永遠の忌みに」

(2) イザ 26 : 19

「あなたの死人は生き返り、私のなきがらはよみがえります。さめよ、喜び歌え。ちりに住む者よ。あなたの露は光の露。地は使者の霊を生き返らせませす」

(3) ヨブ 19 : 25~26

「私は知っている。私を贖う方は生きておられ、後の日に、ちりの上に立たれることを。私の皮が、このようにはぎとられて後、私は、私の肉から神を見る」

2. アブラハム契約の内容

(1) 創17:8

「わたしは、あなたが滞在している地、すなわちカナンの全土を、あなたとあなたの後のあなたの子孫に永遠の所有として与える。わたしは、彼らの神となる」

- ①カナンの地は、アブラハムとその子孫に与えられた。
- ②神はこの約束をアブラハム、イサク、ヤコブに個人的に与えた。
- ③しかし彼らは、その土地を手に入れることなくして死んでいった。
- ④神がこの約束を果たすためには、彼らを復活させなければならない。
- ⑤アブラハムがイサクを犠牲にする決心をしたのは、そのためである。

(2) 置換神学の問題点

- ①イスラエルは見捨てられ、教会が新しいイスラエルとなったという教えである。
- ②イスラエルに与えられていた約束は、教会が引き継いだ。
- ③もしそうなら、神の約束は果たされないままで終わることになる。
- ④アブラハム、イサク、ヤコブに与えられた土地の約束が成就するのは、メシア的王国(千年王国)においてである。

(3) マタ8:11

「あなたがたに言いますが、たくさんの人が東からも西からも来て、天の御国で、アブラハム、イサク、ヤコブといっしょに食卓に着きます」

- ①メシア的王国の祝福を描写したものである。
- ②アブラハム、イサク、ヤコブは復活して、そこにいる。

3. イエスの復活

(1) 2種類の復活

- ①信者の復活は、第一の復活である。
- ②不信者の復活は、第二の復活である。

(2) イエスの復活は、第一の復活である。

- ①初穂としての復活である。
- ②信者はその後続くという保証である。
- ③1ヨハ3:2、コロ3:4参照

(3) 福音の三要素を信じることは、神のトータルプランを受け入れることである。